

ある、實に適切に細密に觀察される、實際之をどんなところへ持て行つてもよくあてはまる。

吾人の一生に於てこれを見ると、幼時は知識主義、次に實行主義、次に或は失敗し、或は成功するに當り、熟慮と云ふこととなり、自らよく考察し自覺する觀念時代となり、次には自分の力の及ばざることを悟り、信仰によらねばならんと、遂に信仰主義に入つて来る。

學問のみを以て一生を終る人でも、やはりこの傾向はある、始めは先人の説を比較研究し知識を求め、次にはこれを實地に行ひ、自ら經驗し、更に自ら考察して説をたてんとするが、遂には分らなくなつて先人の大なる所説を信じて、これを取ることとなる。

これを廣く日本に當てはめてみれば、明治維新は、廣く知識を世界に求め、西洋學術の輸入時代であつて、日に日に新學問が取りこまれ、教科書の如きも毎年改められ

た、すると、次には學問ばかりして居ても、到底實業に及ぶものはないと、黄金萬能の主義となつて、實業熱が盛になつた、ところがこれを見て居ると、拜金主義のものには厭ふべき、人格のものも多い、信用を重んぜず、一時の利に目の眩む奴が多い、そこで自分からも、稍深く考へることとなり、商業道德がなければならぬ、實業家の自覺を要すると云ふことを説く觀念時代となつた、今日は實業家でも何でも人格の修養は根本的でなくてはならぬ、宗教的自覺を必要とする、即、信仰を基礎とした修養をしなくてはならぬと云ふやうになる、今日あの黄金主義の東京の真中で、實業家が集つ

て前田博士や近角君の法話を聞くやうになつた。

佛敎の歴史に就て見ても、その通りである、始めは學問主義で、佛の所説を學ぶに汲々として居る、次には戒律主義で實行に身を委ねる、戒律をいくらやつてもやはり死んだ規則では何にもならぬ、生きた戒でなければならぬと禪觀が出た、觀念主義に入つた、その觀念も成佛の結果を得ることが出来なくなり、自己の價値を自覺し、頭を

下げて信仰に入る。

釋尊の語に、我が教のまゝに行はれるのは正法の時代で五百年續く、次に像法の時期で形式だけは正法に似た形で行はれる、これが千年、次には形式上の法もなくなつて末法の時代となると説かれた、こゝでは人民が互に競争して各人の勢力によつて固めて行くと云ふ有様で人間の生活に急がはしく學ぶことも自然科學もあり、精神科學あり、世間法もあり、出世間法もあり、極めて澤山あつて、佛教ばかり専心に學ぶことは出来ない、實際に生活するに、多忙で、競争の方面に骨折る結果、修行などして居る暇がない、けれども宗教は必要である、そこでこの時には信仰の一で定る様な教でなくてはならぬ。

釋迦の一般の教法から云へば、末法である、彌陀の教法より云へば、この末法が即、正法の時代である、黄金時代である、この末法の時期に生れて、修行も觀念も出来ない今日に於ては、たゞ一念の信仰によるの外はない、此一念の信仰で人格向上の道が

開かれる、彌陀正法の時季である、これは私が始めて云ふのではない、七百年の昔親鸞聖人は、

釋迦の教法ましませど

修すべき有情のなき故に

さとり得るもの未法に

一人もあらずと説き給ふ

釋迦如來かくれましくて

二千餘年になり給ふ

正像の二時に終りにき

如來の遺弟悲泣せよ

とあるから、世はこの悲惨の幕で閉ぢられるものかと思ふとさうではない、一道の光明は左の語に認められてゐる。

像末五濁の世となりて

釋迦の遺教かくれしむ

彌陀の悲願ひろまりて

念佛往生さかりなり

と、正像末和讃に述べられて、信仰全盛の時代なることが明かである、現在の如き時に至つて信仰の時期となつた、この時代が彌陀の本願が大威張で行はれる時期である、

學問修行、觀念の時期は過ぎ去つて、信仰の時期となつたのである、一たび信仰に入れば、他の三つは單に一般の修養に止まることとなるのである、修養は信仰によつて始めて生きて來るのである。

印度は世界に類例のない文明を持つて居る、西洋の文明は人が自然界を征服して、人の領域を廣めるより起る、印度の文明は自然に同和するところにある、西洋の文明は人が漸く進んで、自然界に繁殖して居た猛獸を追ひ拂ひ、山林に繁茂して居た樹木をさりすて、山を穿ち川を堀り、あらゆる方面に自然界を利用し、自然を征服するが文明である、印度人の理想は、山林に自然を對手に生活せる自然生活である、西洋文明は都會生活から起る、都市生活からして生存競争と云ふことが起り、これから文明が出來上る、これが文明の根本動機である。

ところで印度では人が自然界に行つて、自然界と同化して文明が出来る、都會から出るのではない、山林に隱遁して冥想する、この冥想から文明があらはれるのである、

乞食の様なみすぼらしい仙人から文明が出るのである、この仙人は今でも石窟の中に居る、私共が窟前を通ると、内から見て笑つて居る、時には出て來る、そして此方から話しかければどんなことでも話す、又知つて居る、世の生動、盲動、蠢動を餘所に見て、自ら世界人生のことをよく觀察して居る、それに金を遣らうと云つても取らない、食物を與へやうと云つても取らない、こんな仙人から印度の文明は出て來るのである、昔から幾百千の小釋迦があつて印度の古代を飾り、精神界を組織して居つたのである。

印度の文明は形式の上では少しも美しくない、西洋の文明と正反對である、けれども形の上、目に見える文明はないが、その奥に世界の人の及ばない様な精神的の高い文明を有つて居る。

されば文明には二通りあることを知らねばならぬ、西洋の物質に重さを置ける文明で印度のは精神を主とせる文明である、そしてこの精神的文明が世界にあると云ふこと

を、世界に示して居るのは印度より外にはない。
 精神的の文明と物質的の文明とは、見たところで違ふ、物質的の文明は強い、足で行けな
 いところは汽車で、海で渡れないところは汽船で行く、何んでもと云ふと過言である
 が、非常に困難なこともやつてのける、そこで、精神と云ふことは漸次認められなく
 なり、物質萬能の傾向を生ずる、翻つて熟慮すれば、精神は墮落して向上する傾向は
 ない、かくて物質文明が日に進み、精神が漸く退くとならば、誠にあはれむべき
 ものではありますまいか。

これにも理屈はある、印度では自然界を征服しやうと云ふ様な考は更に起らない、平
 原は宏漠であり、山は絶高雄大である、動物は犖猛である、野象が居る、獅子が居る
 虎が居る、コブラと云ふ毒蛇が居る、水牛が居る、鱷が居る、樹木には一本の木で五
 町歩も六町歩も枝を擴げて居る榕樹がある、とても自然を征服して人間の領分を開か
 ぬと云ふ様なとは思ひも及ばない、全く自然と同化し、動物に對してもこれを倒さん

とする様な考は起らない全く共同生活である、これが自然の有様なのである。

印度人の庭には二間に四間位のブラットホームがある、毎朝そこへ米麥を撒いて置く、
 すると色々の小鳥、鳩、鳥、栗鼠など色々の動物が来てこれを食べるのである、之を
 バリ供養と云ふ、町の大通りに牛も水牛も猿も遊んで居る、水牛が八百屋の青物をさ
 らつたり、牛が菓子屋の駄菓子を食べなどは珍らしくない、水牛の背に鳥が止まり、
 蠅や虫を食つて居る、水牛の草を食ひつゝある口の側に鳩がビヨン／＼と歩いて草の
 中から虫の飛び出るのを待つて居る、自然の趣は又別である、牛を愛することは非常
 なもので、決して殺すといふ様なことはない、牝牛は車を牽かせるが牝牛は勞働にも使
 はない、それで野原に澤山の牛が群居して草を食つて居る、多く白牛であるので、知
 らずに見ると、白聖の城壁の様に見える、猿の如きも人が往くと、どん／＼高い枝
 から低い枝へ飛び下りて来てお辭儀をする、パンを投げてやれば、喜んで食べて頭を
 さげて行く、アヌデイアの市中では、猿軍の大戦争を見た、タライの森に居る孔雀な

ども、人が行つても逃げないと云ふ有様で、全く動物と共同生活である、一處に生活して居るといふ感情はあるが、少しも自然界を征服しやうと云ふ様な感じは起らない、印度の小兒は曾て動物を追ふとか、石を投げ付けると云ふやうなことをしない、動物は人を恐るゝことを知らない位である。

印度はこんなな精神界に偏して、智者が皆山に入つて、隠れてしまつたならば、印度と云ふ國は昔にもう亡びて居るに違ひないが、こゝに一人釋迦如來が世に現はれて、隱遁主義の極端もよくない、その中道を取らなければならぬとの教を立て、兩極端を排斥せられた、山林に出來た文明を都會村落に引き下げ、その大理想を實現するこゝに汲々せられた、こゝに一大文明が建設せられた、これが佛教的印度の文明である、印度を統一した王朝の建設も釋尊以後である、釋尊以前には傳はる王の名もあまりないが、釋尊以後に於て彼の有名なる阿育(アシヨカ)迦膩色迦(カニシユカ)崛多(グプタ)などの大王朝が出來た、また美術も建築も佛教時代に著しき進歩をなした、今日

残つて居り發掘されたる彫刻建築などの立派なるものは皆佛教に關係のあるものである、純文學は馬鳴菩薩の佛傳から起り、戯曲もこの菩薩が開祖らしい、哲學は龍樹菩薩の峻嚴な論法から刺激されて、學派の色彩も充分になつた、實に印度に價値ある文明は、皆佛教文明である、研究する價値あるものは印度佛教である、かくの如く佛教と文明との關係の深いのが釋尊の理想の實現である。

印度では生れて八才で山に入つて道を仙人に學ぶ、十四で家に歸り結婚して子を擧げれば、祖先に對する責任終れりとする、そして四十位になれば家政全體を子に譲つて再び山林に入つて觀念修行し、遂に信仰を得たならば、村落都市に出て、行脚し縁に觸れて萬衆に救濟の道を教へ、一生を過すと云ふ有様である、これが波羅門一生の四時期である。

日本の佛教もこの四時期はある、奈良朝の三論法相の極盛時代は、南都の學問宗の名ある如く、全く學問主義であつた、平安朝に至つては傳教弘法大師が出て山上生活の

僧風を起して修行主義を取つた、次に鎌倉時代には禪の觀念時代となり、遂に法然親鸞の浄土門が盛になり、日蓮の妙法が行はれた、即ち信仰時代となつて終つた、これ以上最早進まない。

日本の文明は佛教が大なる原動力となつて居る、佛教がなかつたならば、日本の文明の趣は大に違つて居つたに相違ない、佛教に反對して居る神道でも、佛教に依つて、今日まで持續したものである、文學も、建築も、美術も、教育も、皆佛教から出て居る、あらゆる社會組織で佛教の關係して居ないものはない、今日の日本、今日の社會を作つたものは佛教の功が多いのである、哲學と宗教とが文明に最も大切なものであるが、日本には哲學者は一人もない、ないのではない、佛教が西人の云ふ哲學と宗教とを合せて有して居るから、哲學者は佛教の中に入つて居る、日本の哲學的天能は佛教で満足されたのである、佛教の外にあつて佛教に反した哲學者がないと云ふまで、ある、佛教以後に哲學者はない、支那でも古へは孔子、老子、莊子、列子、淮南子

の如き哲學者もあつたが、佛教が傳つてからは佛教の影響を受けて居るものが多い。かくの如く佛教は哲學と宗教との兩方面の役目を果して、我國の文明を養つて來た、その中の或る部分は腐敗もしたが、全體としてはこの佛教の作つた文明が著るしく一國の進運を開いて居る、我日本の國を救つて居る。

一體文明は決口があつては行く所があればどん／＼流れ出て行く、佛教も東流してどん／＼支那朝鮮日本と東漸した、そしてはけてゆけば本元は空虚となる、現に佛教は日本ばかりにあると云ふ状態である、そして日本からは行くところがない、行けば太平洋にはまらなくてはならぬ、爲に停住して今日に残つて居る、この理由で我國が大乗相應の地たる恩恵を蒙つて居る、また一方我が國民性は、文明は一旦自分の手に入れば、その時代に適合する様に活動せしめ、日に新にしたために、停滯して動かなくなるべき筈の佛教が、今日まで生きて働いて日本に貢獻して來た。

今日に現に持ちつゞけて來た佛教を益々發展せしめて、實社會にいよ／＼活動開展す

るやうにするが、我々の責務である、耶蘇教は偏狹の教である、佛教に比較したならば極めて不完全な宗教である、けれどもこれを運轉する人が大に努力して、境に應じて巧みに適用すればこそ、社會的にかくの如く盛に發展せしめることが出来たのである、かくの如くなれば完全な立派な宗教を有して居る吾々は、この正法を護つて立派に社會に發揮せしめたいと思ふ、今日の時代に適應した正法……純他力の信仰……だけれども永久これを持続發展致したいものである、之が大乗相應の國民の本務である。

第五章 世界に於ける佛教の地位

日露戦争の前に、獨逸の皇帝は一枚の繪を書いて（自ら書いたのではない、畫工に畫かしたのである）露國皇帝に送つて之を示した、その繪には一方に金色の佛が畫いてあり、その下には黃龍が横はり、その前面には羽衣を戴ける天使が居る、之に續いて西洋各國の代表する白色の神々が武器を執つて佛と相對して居る、この繪の意味は

金色の佛が東方に居る、それは日本を指す、龍は支那である、西洋白色の神々が武器を持つて、佛を征服しやうと云ふ意味を表して居る、日本は最近に發展して來た、早晩日本と支那とは聯合して歐洲を壓伏し來るに相違ない、その時臍を噛むも及ばない、早く今の中に退治して置けと云ふ意味である、日本を金色の佛にして表すには深い意味がある、獨逸には研究者としての佛教徒が千人以上もあつた、ワグネルは佛の傳記を音樂にせんとし、佛傳は劇詩となつて上場され、シヨペンハウエルの印度哲學鼓吹に次ぎて涅槃論、解脱論など獨逸の學界を賑はして居た、日本を表はすなら天照大御神とか神武天皇とかを畫くのがあたりまへなのに、佛を畫いて日本としたのは、宗教上の怖畏心を利用せんとしたのである、日本の何處からか佛教の波が打つて來さうであつた、そこでその佛教の波を打ち止めねば將來恐ろしいと云ふ意味で、露西亞へ送つたのである、獨逸ではまたその複寫を各小學校に配布した、説明は色々あつたらしいが、とにかく吾々獨逸に反するのは日本支那である、「黃色禍」は日に白色國を

肉迫して居るこの黃禍を破らなければ、獨逸は世界を統一する使命を全ふすることは出来ないといふ意味で學校に配布した、日本の教育勅語のやうに國民教育の大本にしたのである、獨逸が世界を統一するか、露西亞が世界の盟主となるか、世界の大勢は二つに分るゝ運命に向つて居た、バルカン半島の下層民は多くはスラヴ民族で、少數の民族及上流民は多く獨逸主義である、この兩民族の中、バルカン半島に勝を制したものが、全歐の死命を制し、縦には小亞細亞印度を取り、横には地中海を制し、亞弗利加を取つて、世界を統一するのである、そこで獨逸の邪魔物は露西亞である、で日本を早く打つて、黃禍を拂へと諷したのは、獨逸の世界統一策から云へば自然の希望である、獨逸が黃禍論を主張したのは、自己の野心を成就する階段であつたのである、露西亞が若し日本に勝てば彼は東方經營に餘念がなく、歐洲の風波は當分平和に飯する、その間はバルカンの經營を完成し、バクダット鐵道を成功せしめ、南下の策を講じ得るのである、若し日本に露西亞が負けたなら、その打撃は露國をして獨逸對抗の

手を收めしむるに至るのである、何れにしても露西亞と日本とを喧嘩させるより外はないと云ふので、無禮にも佛を使つて諷刺したのである、所が露西亞はうまくカイゼルの術中に陥つて戦争を始めた、故に獨逸は日露戦争中は全力を擧げて露西亞最負を始めた、日本人に取つては不愉快千萬であつた、さういふ獨逸が此度露も英も佛も合せて相手とし、戦争を始めた、なか／＼終りさうにもない、獨逸は強い、強いと云ふのも理由がある、これまで各國の取つて居つた主義、その國の識者、青年が頭を向けて居つた主義主張といふものが、獨逸とは大變異つて居たからで、このことは大變大切なことであるから一通り述べて見たい。

佛蘭西に如何なる主義が一國の趨勢を支配して居つたかと云ふと、國民全體が美術と云ふことに向つて居つて、美術は佛の中心で佛國青年の生命であつた、文部省と一所に美術省があつて、最も多くの經費を使つて居る、ギリシヤにも古美術研究院を作り、ローマにも美術學校を作り、安南へも古學研究院を作り、印度にも埃及にも恒に美術

研究法を講じて居る有様で、佛人は誰でも或る程度まで美育があり、藝術的技能がなければ、佛人としても交際出来ないと言ふ民心の傾向である、その上政治は共和政體と來て居るから、軍隊教育も完全しなうなことはない、世界の流行の根本、美術の源泉流行の淵源はパリスであると云はれ、國民の美的天能を發揮するのは、國民全般が希望した所であるが、國防といふ方面は自然第二位になつてしまつて居つた。

英國は「自由の國」(フリーカントリー)と云ふのは昔しのこと、いまは自由主義は殆んど凡べての方面から排除された、今日は正義と云ふことが英國の國是と云つて宜しいのである、外國へ對しても、國民に對しても、正義と云ふことを主として行動をする、正義は人間の義務として如何なる場合にも身勝手の論を主張せぬ所は英の特質である、英國の此度の戦争も、獨逸が中立國を無視して、白耳義を亂暴に蹂躪するのを見兼ねた立つた正義の戦である、英國の領土は全世界に亘つて居る、英王の領土には日の没したる時はない、英國の領地だけを歩いて、世界一週が出来ると歌はれて居た、

その領土を取るには正義もなかつたか知らぬが、今は正義を以て事に臨むと云ふ者が國民一般に行亘つて居る、軍隊は志願兵組織であるから、一身を犠牲にして國難に當るが正義だと云ふことを理解し得る人が志願する、立派な人が出て戦死する、英國も今度は困つて居る、先には成るべく妻子のないものを募集して居たが、もはや間に合はなくなつた、軍隊組織が完全でない、訓練教練の出來て居ない兵士と來て居るから、とても獨逸の敵でない。

亞米利加は直接今度の戦争に關係はないが、主として富を本として個人的能力を發揮せんとして居る、個人が完全なものになる、自分が自由に雄飛する能力を發揮しやうとするのが一國の氣風であるから、國家の爲に身を捨つるなどは、なか／＼眼中に泛ばない、米艦のクックは大抵日本人、支那人である、マニラを討つときに日本人のクックを危険視して廢止し、アメリカ人のクックを募集したが、クックになり手がな

しに二倍の給料を拂つてやつと行かせた次第であつた。
所が獨逸はどうであるか、獨人は政府も、民間も、青年も、婦人も、總ての人の頭の中には祖國と學術とが眼目となつて居る。(Vaterland und Wissenschaft) 凡へての經營は學術を以てし、祖國は軍國主義で擁護すると云ふことが一般民心の傾向である、日本は學問をやめて實業をやると云ふ、獨逸では實業に従事するために學問すると云ふ差異がある、こんな風であるから、社會制度萬般が學術的で少しも遺算がない、科學的正確 (Scientific exactness) と云ふとから成り立つて居る、芋を食つたら皮を捨ててはならぬとか、麥の藁を焼いてはならぬと云ふ命令が出てゐる、後には軍馬の食料に缺乏するから、それにあてねばならぬと云ふ精算が立つて居る、今度の戰爭には凡ての點に遺算がないのである、祖國を守るは學術の根據に依ると云ふことが根本となつて居る、獨逸の兵は精兵である、露西亞の兵は強兵である、強兵は訓練がないから精兵には勝てない、露西亞には情ないことには、一國の趨勢が統一されて居ない、人種が

異なつて居る上に、上と下との心が一致しない、スラブ民族も幾種もある、ポーランド人もある、猶太人もある、一般の主義主張が一致して居ないから、他の歐米諸國のやうに一般的にその國民の傾向を論ずるわけにいかぬ。
獨逸はかくの如く祖國を學術で經營して行く點に於て、世界の各國に勝れて居る、學術では世界で頭をあげ得るものはない、戦前に於て已に世界を學術的に征服して居つた、祖國主義は軍國主義であるが、歐米の何處の國にも缺けて居る點である、この二つの、學術主義、軍國主義に於て、最早聯合軍は獨逸に負けて居る。獨逸はたとひ實際の戰爭には負けても、主義では既に世界に打勝つて居るのである。
然らば獨逸の主義は正しいか、主義は正しいが、他に大なる缺陷がある、獨逸に於ては耶穌教は實際無勢力であつて、形式的、僞信、僞善、虛偽の信仰で持ちきつて居た、これは獨逸ばかりではなく、歐洲一般に耶穌教は全體に於て勢力を失つて居た、明治廿三年以來、凡そ十年毎に三度洋行して親く目撃した所では、その急速力を以て勢力

を失ふたことは驚くべき有様であつた、かくして信仰は日に薄らいで行つた、これでも尙ほ正義同情など云つて人道を行ふものは、耶蘇教國のみだと思つて居つた、所が日露戦争に於て耶蘇教國でない日本が眞の正義人道に缺けた所がない、黄禍として退けられ、野蠻に近いと思はれた日本が、正義人道に外れない、これが爲め凡ての日本觀は變つて來た、耶蘇教會でも日本の布教は後廻しにして、實際の野蠻國を先きにするに云ふやうな議も行はるゝに至つた、日本の正義が認められると同時に、耶蘇教の信仰は薄らぎの度は高まつた、獨逸の皇帝は随分偉人である、若し私が獨の皇帝であつたなら、學術主義と祖國主義とではもはや世界に冠絶して居る、向つて行く所に苦情はない、不平は起らない、然らばこゝに正義を以て敵に臨み、同情を以て無辜の士民に對し、武士道を以て敵兵及俘虜に對し、天道、人道、武士道、一言に云へば宗教に背かぬやうにする、總ての方面に同情を及ぼして、小供や婦人を殺さず、無辜の衆を苦めず、寺を毀さず、僧侶を屠らないやうにしたならばどうでありませう、學

術主義と祖國主義と加ふるにこの宗教主義とを以て行つたなら、たとへ戦争に負けても、主義に於て勝つて居るのである、獨逸に對する世界の批難は唯彼れの野蠻的行爲にある、人道を無視し、道徳を捨て、宗教を侮蔑する所にある、若しも獨逸か宗教主義を以て臨んだならば、世界は何れの點に於てもみんな負けるのである、萬々一戦争に負けたとしても立派なものとなる、カイゼルはそれを知らない譯はないが、耶蘇教が已に無勢力であることも知つて居る、無勢力であることを知るが故に、宗教を眼中に置くのは邪魔にはなるとも、利益にはならないと云ふ確信から、如此野蠻行爲を敢てするものである、人道をも考へず、宗教も氣に止めず、而して自ら天の選民である、天の命令に依つて世界を統一する使命を持って居ると號して居る、これに反するものもみな滅すのを天意の如くに考へて居る、獨の伯林ポスト新聞の社説に「戦争は慘虐なれ」と云ふ社説がある、「子供は將來我々に反するから殺すべし、婦人は將來我々に反する子供を生むから殺すべし、吾々を邪魔する元素は總て滅絶するのが平和を早め

る道である」と論じて居る、然かも實際はなほ酷い、これで「神の意志を行ふ」と云ふのは實に恐るべき悪魔である、天の選民ならば天道は踏まねばならない、人道は守らねばならぬ、カイゼルは僞信の頂上、僞善の親玉で、歐洲今日の僞善を代表してどうしても天罰を受けねばならぬ運命を持つて居る、いま假りに勝つたとしても、このまゝ行つたなら宗教の元素はなくなつて、自然に滅亡するのである、宗教的に大いに反省せざれば、獨逸帝國は早晚滅亡する天命を持つて居る、天罰を受けねばならない順序となつて居る、強いのはたゞ武器の文明、形式の文明で、宗教は既に存して居ない無辜の士民の恨みのみでも容易でない、もし獨逸が虚偽でもいゝから宗教を行つて居つたら、世界の人々は何とも云ひ能はぬ、一言もないのである、そこが既に天罰を受けて居るので、カイゼルが宗教を無視して、蠻行を敢てすると云ふことが、即ち天罰を受けて居るのである。

話が世界的になりましたが、世界的にならざるを得ない、世界の事件も對岸の火事を

見る考へでなく、成る可く注意して居らねばならぬ、世界の大事はいま眼前にどう變化して居るかわからない、今後我々の頭の上に何が起つて來るか油断してはならない、故に世界的の情勢をも、しつかりした考を頭に入れておく必要がある。

カイゼルの書かせた繪は、白色人種が集まつて黄色人種を滅ぼさうと計劃して居るが、さう易くは滅ぼされない、また滅す必要はないかも知れぬ、私の教へて居る曹洞宗大學の大塚と云ふ學生が、カイゼルの黃禍を書きかへて、佛の前に西洋の神々が武器を投げ出して降参して居る所を繪にした、そうしてその下に「佛陀慈光照三千界」と書いて居る、之を書いてもらつて私の大學の教室にも一枚懸けて居る、この理想が實現されるのは遠き將來ではあるまいと思ふ、また實現されねばならぬのである、若しも學術主義と祖國主義とに宗教主義を加へたならば、世界をして渴仰の涙を濺いで感服せしめ得るのである、日本は維新以後、廣く知識を世界に求めた、學術主義は汲々として西洋に學んだ、然し決して西洋の奴隸になつたのではない、日本は元來祖國

主義である、獨逸は農業主義より商業主義、商業主義より軍國主義と云ふやうに、色色に變遷した、獨逸では祖先の國と云ふても本來の大本家は已に滅んで居る、いまホーヘンツォールレン家が盛んになつて、各國を聯合して頭領になつたのである、日本の萬世一系とは全く相違して居る、大本家の主人公即ち日本民族の中心が、また政權の中心である、日本とは全く相違して居る、支那の如きも民族の主人公と政權の主人公とは多く相違して居る、獨逸の祖國主義は驟かに作り上げたのであるが、日本の國家主義は本來の面目その儘である、一旦緩急あらば義勇公に奉ずる、公のために働くオホヤケといふのは大本家、君の御家のこと、君は大家族の首領である、法學者が血統團體と云ひ、進化學者が族父統治と名けたのは即ちこの家族主義の國家を指すので皇祖皇宗の御國である、日本の祖國主義は獨逸のそれよりも根本的、徹底的である、此義に於ては向うに學ぶことはない、祖國主義を精神教育の主眼とするのは、西洋に學ぶ所は毛頭ない、所が學問はさうは行かぬ、學問はどうしても個人的である、家族

的に行かぬ、學術技藝は總て個人的である、學術は個人的で西洋より益々輸入するも宜しい、精神教育は家族主義で彼れに學ぶ所はない、一見矛盾のやうであるが、決してさうでない、日本はこれを調和し得る人種のやうに思はれる、世間では往々之が爲め間違を生ずる人がある、個人主義や歐化主義は弊害である、元來商工と云ふものは、社會の下層に蹂躪せられてをつたのを、西洋の教育の影響で士農と平均に擧げらるやうになつた、そこで中には精神教育の根本を忘れて、士農の上に商工を引き上げやうと努力するものもあつた、併し精神教育は飽くまで家族主義で行かねばならぬ、技藝教育は飽くまで個人主義で行かねばならぬことは、上下共に腦底に收めて置かねばならぬ、この二主義は決して調和し得ないものではない、世には往々間違つた倫理學者がある、家族主義は現に破れつゝあるから、他の主義を以て精神教育の根本にしたら宜からうと云ふ意見を持つた人がある、危険恐るべきものである、元來家族同居で、家族主義でやつて居つて自然に家族的訓練が行届いて居た、それで根本精神は養

はれて居つた、今は家族同居は破れつゝあるから、他の主義に代へよとは大な間違である、破れつゝあるのだから、一層強く腦底に根本主義を入れて置かねばならぬ、日本固有の家族主義で十分である、精神教育の方面では西洋は少しも學ぶ必要はないことを承知して居らねばならぬ、それを西洋から輸入せんとするから危険なる社會主義とか、危険なる個人主義とか云ふものが伴つて来る、日本固有の精神教育の根本を磨いて行けばそれで充分である、技藝教育の個人主義と、精神教育の家族主義と相調和し、學術の方と祖國主義とを調和させるのが教育である、吾々の任務である、日本人はこれを調和し得る人種だと思ふ、これまで外國の主義を取入れて來たことでも解るが、またこれで古來やつて來て居る、政岡が自分の子が殺されることをぢつと耐へて見て居る、けれども公義の手前もすみ榮御前がかへつた時は、政岡は我子の死骸に取りついて前後不覺に泣く、政岡は我子を思はぬやうな無情な女ではない、人よりも多く人情を持つて居る、それを彼様に使ひ分ける、忠義と人情とどちらにも使ひ分け

得る、現に吾々は兩方を使ひ分けて居るのである、夫が戦死したと云ふ電報を受け取つた時、妻の情に於ては泣き倒れるほどである、しかも子供を集めて父の戦死をよろこべと教へ、父の志を繼いで國家の爲めに働けと教へるなかゝ出來ぬことである、しかも日本人の女はやつて居る、我々一個人の情と智とを調和統一して行くことが出来る、こんな場合西洋人は氣絶するより外はないのが通例である、世界人種中日本人のみがなし得る人種であると思ふ、個人を成功さす目的を以て學術を磨く、而して日本と云ふ大自己を完成するために小自己を捨て、進み、それに反對するものは日本人にはない筈である、今の教育と宗教とのある以上、個人主義の宗教の生れない以上この危険はない、將來は學術は個人主義、精神教育は國家主義家族主義でなければならぬと考へて置かねばならぬ、日本も學術主義と祖國主義を持つて居る、此點は獨逸と同じことである、まだこれでは足らぬ所がある、祖國主義と學術主義と、加ふるに宗教主義と云ふことを、日本將來の主義とせねばならぬ、されば天の選民は却て日本

である、天道人道を行ふ使命を有せるものは日本民族である、宗教が或點に於て精神的に獨逸とは相違して居るのみである、英國には學術主義、祖國主義はない、佛蘭西も米國も露西亞も二つながら全く備はつて居ない、日本はこの祖國主義を持つて大戦争に勝ち、學術主義を以て今日まで進んで來た、若し宗教主義を把持することが出来るなら、世界に雄飛する元素を持つて居るのである、故にこれを自覺し、擴充するより外はない、日本は佛教を何處よりも完全に傳へ持つて居る、佛教は獨人も英人も尊敬して居るものが多い、佛教をもつて世界中へ擴め知らせる覺悟がなくてはならぬ、自分だけ持つたら充分だと考へてはいけない、法華經にある如く吾々は「如來使」如來所遣である、二行如來事」の選民である、如來の使、如來の宰相、我々は佛教の選民、最も適した人間であるといふ自覺心がなければならぬ、佛教は他の國には適してをらぬ、たゞ日本だけほんたうに之を傳へ残して居る、佛教の理想を世界に擴める選民であると云ふ考へを持たねばならぬ、昔から大乘相應の地といふて居る、國民は大

乘相應の國民である、然らば大乘とは如何なることか、利他を以て大乘の根本精神とする、萬物を會して己となす、萬象己なく亦己ならざるはなし、宇宙萬物を愛すると云ふのが大乘の極意である、小乘に於ても自殺を禁ずると云ふのは、まだ充分智慧が磨いてない内に身を殺すのは戒むべきであるからである、大乘は利他の本職を持つて居る、大乘は國家のためなら自殺をも獎勵する、利他の爲になる身命を故なく自ら斷つは堅く禁ずる所である、常陸丸の將士は切腹した、西洋人は之を笑ふ、生きて居たらあとで國家の役に立つと云ふ、西洋の要塞防禦の標準は、「三度まで極力防げ、それでも防ぎきれなかつたら降ても宜しい」と云ふのである、日本の武士は、「城を枕にして討死せよ」と云ふ、西洋人は笑ふ、耶穌教徒は笑ふ、神から貰つた身體を使命を忘れて殺してはならぬと云ふ、生きて居たらあとで働けると云ふ主旨である、日本ではそんな降參するやうな人間が生きて居たつて何の役にも立たないとする、將士が自殺するのは、個人としては惜しいけれども、其人の死のために何千人の勇士を生ずるか

分らぬ、廣瀨中佐は死しても幾多の廣瀨中佐が生れるか知れぬ、日本の犠牲的精神は徹底して居る、西洋諸國では皇帝は軍旗に先づ禮をする、西洋の軍旗は神の代表であるからである、日本の軍旗は天皇陛下より先きに禮をする、之に對して陛下の御答禮がある、これら日本の軍旗は陛下の代表であるが故である、おなじ犠牲性と云ふても佛教は利他のためである、西洋の犠牲性は神のためであると云ふ、慈悲も耶蘇教では自分がしたと云ふ名を顯はさんとしたら慈悲ではなくなると教へる、佛教では理想がもつと高い生縁の慈悲があれば法縁、無縁の慈悲もある、慈悲心の持ちやうによつて慈悲にはならぬ、菩薩の理想は三輪空施である、一には施者空で自分が施すと云ふ考へがあつてはならぬ、二には受者空に受ける人を考へてはならぬ、誰にやると云ふ考へがあつてはならぬ、西行法師が頼朝公に兵法を教へて銀の猫を貰つた、所がこれを門前に居た乞食に與つてしまつた、その高德は人皆之を感ずるのである、然るに義仲勳功記によると、その乞食は西行の遺子寫繪姫で、父を尋ねて乞食して居たのだと云ふ、

子にやつたとすれば慈善でもない、高德でもない、なほ一つは施物空に私は千兩やる他人は百兩であると云ふ如き施物に關する考へがあつてはならない、一錢しか持たぬ人が一錢やつたら、百萬圓持つた人が一萬圓やつたより功德が大きい、一錢はその人の全財産である、世間で「長者の萬燈より貧の一燈」と云ふことがある、この三輪空が揃つたのが菩薩の慈善の理想である、然しかゝる理想通にやれと云ふのではない、反省の材料とせよと云ふのである、西洋人の理想と佛教の理想とはかくの如く違ふ、我々は大乗選民の國民であることを自覺して、世界の認めて居る道徳を修めるのは勿論、獨逸の持たない宗教即ち佛教を持つて世界に雄飛する覺悟がなければならぬ、「佛陀の慈光三千界を照す」と云ふことは、大乗の選民であると云ふ自覺を持つことによる、この宗教主義に合せて祖國主義と學術主義とを標榜したら、獨の強點を有して獨の弱點を捨てる、かゝる國民が即ち天の選民である、この三主義を持つものは何れの國でも天の選民たる資格のあるものである、この宗教主義即ち大乗主義がやがて軍隊

教育、國民教育の根本精神になる、この宗教的自覺を持つて行かねば日本は進歩することは出来ない、西洋の神々をして武器を投げて佛の前に頭を下げさせる、これが我々の天職である、我々はこの使命を持つて居る。天の選民であると共に國民全體が大乗相應の國民である、大乘の選民であると云ふことを日本に對し外國に對して發揮してもらいたいものである。

第六章 日本に於ける佛教の地位

第一章には、人間は理想を持たなくては向上の道を圖ることが出来ないといふことから、理想の重すべきことを述べ、理想の宗教としては、佛教を選ばなければならない理由を述べた、第二章には文明と云ふことから、佛教を見て、我々の智情意の三方面を圓滿に満足せしめ得る宗教は佛教であることを述べ、第三章に意志の自由と云ふことを述べた、これは少し六ヶ敷過ぎるやうである、自由と云ふことは、善いことを撰

ぶも、悪いことを撰ぶも、皆自分の自由である、獸類に近い情は吾々を墮落せしめやうとし、智は吾々を神に近づかしめやうとする、この兩方面の調和を計り、理性の判断によつて感情の變調を制して行くのが意志の自由であると云ふことを述べた、意志説から佛教の地位を明かにしたのである、第四章には、世には色々の主義がある、學問主義、實行主義、觀念主義、信仰主義の四つがあるが、これが何れにもあてはまる今日は生存競争の烈しい時代であつて、信仰主義の時代である、釋尊の遺教から云へば末法であるが、彌陀の教から云へば正法の時代である、眞宗の教の黄金時代であるといふことを述べた、第五章には世界に於ける佛教の地位といふ積りて、戦後の精神教育の方針を御話した、その中で荐りに哲學と佛教と云ふことを言ひ過ぎる程述べた、哲學と佛教とは相提携すべきことを言ふたが、これは一般の言ひ方である、佛教は哲學と宗教とを融合した宗教である、即佛教は所謂哲學と宗教とを合せ持つて居るのであることを承知せねばならぬ、私は前に佛教は智情意を完全に満足せしめ得る宗教

であると云ふた、それは例へばこゝに一つの眞理があるとすると、哲學は眞理があるかどうか、眞理は如何なるものかを探究し、且つその探究方法を極めるのである、即ち眞理を思索尋究する、眞理と認めたらなら、それに一致しやうとも、それを實現しやうともしない、これが一般の哲學である、この眞理(眞如)が活動して人間を救済し、感化を及ぼし向上せしめ得ることを認めるのが宗教である、即ち信仰修養である、これは一般の宗教であるが、佛教はこの眞理の思索尋究の方面も、信仰修養の方面の何れも持つて居る、この兩者を持つて居るが故に、佛教の學問の方からも實行の方からも批難される點がない、日本には哲學者がない、支那には孔子があり孟子があり、老子、莊子、列子、淮南子、王陽明と、哲學は蔚然として起つた、日本には哲學者が一人も出ない、それはその筈だ、日本には早くより佛教が輸入されて居つたから、佛教以外の哲學は出なかつたのである、凡ての哲學的天能は佛教の中に含まれてしまつたのである、佛教傳來以後開けた日本には哲學的要求は、十二分に佛教で満足されてしま

つて居たのである。

佛教は學問の方から言へば哲學に入り、實行の方から行けば宗教となる、これが哲學と宗教とを有する所以であるが、實はこれが眞の宗教であり眞の哲學であるのである、哲學も眞理を實現する能はざるものは、半面哲學である、宗教も眞理の思索を教へざるものは半面宗教である、完全の宗教は、佛教より外にはない、人間には學問の時代と、實行の時代と、觀念の時代と、信仰の時代と四つの時期があると私は言ふた、時代にもこの四つの時期がある、いまは末法の世で生存競争の烈しい間に自ら悟りを開くと云ふことは極めて困難である、故にいまは信仰によつて佛になるべき眞宗の黄金時代である。

學問によつて行かうとするのも、戒律を守つて進まうとするのも、觀念して自覺しやうとするのも、信仰といへば皆な信仰である、けれどもそれは部分的信仰である、中でも觀念の法が一番完全であるが、これには自分の力の制限があるから、その修養は

徹底的でない、自力的の修養になる、最後に私の言はうとするのは信仰で、全他力の信仰、純他力の信仰が誰にとつても完全の信仰であると云ふことである、一度この信仰を根本として見れば觀念、學問は自らの修養であることに氣が付く、修養も善い、實例金言を多く集めて之を規矩として自分の精神を之にあてはめ同和せしめやうとする、修養の特質は集めること (Collection) である、信仰は撰擇 (Selection) と云ふことによつて、一つを取つて信ずるのである、前三つの修養と云ふものは、若し信仰が確立するならば皆んな生きて来る、ほんたうのものになる、でなければ修養は徹底しない、自ら暑熱を冒して講演するのも、自己の功德の爲、修養の爲めならば、大事業を爲せるかの如く感ずるかも知れぬ、若し此れが、信仰の上から佛恩報謝であると思ふならば自慢の餘地はない、信仰が定まつたなら、總てのことは佛に對する萬分一の報謝に止ることとなる、恩が非常に大きいのであるから、いくら勤めても足らんと云ふことになる、同じ世界を見ても信仰の定まつたのちは、世界を見る心持が違ふ、世

界は信仰を得ると共に生きて来る、活動の世界になる、一生奮闘努力するのは、如來使としてその天職を果し、義務を完ふするに在ることを知ることが出来る、若し奮闘は成功するためであるなら、成功すると奮闘しない、義務の爲であるとしても廣く之を行はしむるには困難である、報恩の爲とならば、一生の努力は自然である、二宮尊徳翁の報徳主義を奉ずる自治村は重みに經濟を根本としてある、富有になると、もう努力しないやうになることもある、現にさう云ふ村がある、いまは模範村でないやうになつた、宗教的信仰がないためである、信仰があればいくら成功してもまだ報恩は果たせない、吾々は一生努力して恩を謝さねばならぬと自覺して奮闘努力する、佛教を根本とした模範村が山口にあるが、これは特殊部落で最も善い模範村である、益々進むばかりである、それは眞宗の信仰が根本となつて居るからである。全體殺す目的で養ふのは眞に養ふのではない、印度の佛教語に猿が豚の肥えて居るのを見て美んだが、殺す爲に美食を與へられて居ると云ふのを知つてからは、天然の菓

物に満足したと云ふことがある、それを天年を全うするまでも、生かして置くのが眞の養ひである、信仰の根本がないならば、凡べて生半熟である、不徹底の修養となる、信仰を利用して佛にならうと云ふのは駄目である、純他力によつて、佛の力によつて佛になるといふのであるから、謝恩の生活を送るのが眞義である、徹底的の信仰を得るにはどうしても純他力によらねばならない、我々の佛になると云ふことが既に他力である、佛の力が七分自分の力が三分と云ふやうな考のあるべき筈はない、自分の力によつて佛になることは全然不可能である、自分の力を頼む餘地が何處にあるか、佛になることが他力であるなら、安心を得るのは御佛の心になるより外はない、こちらの心が動かぬから自分の力が三分だと思ふのは、間違だ、動く心が動かぬやうになるのが、純他力の慈悲である、全部彌陀のお計らひである、この外に信仰があり得る筈はない、然るに三心と説けば、人が疑ふ、十念と説けば迷を生ずる、そこで親鸞聖人はこのことを明瞭に一心と説かれ、一念と教へられた、疑ふべき餘地を残して置かれ

ない、疑ふ餘地を残せば、すぐ人は引つかゝる。

いまして哲學とか意志の自由とか云ふいろ／＼のことを申したが、信仰を得て居る人には修養の心得となり、信仰のない人には佛教はかゝるものであると云ふことをお話したのみである、佛教徒は成るべく、知識を廣めて置かねばならない、そのために述べたのである、直接に信仰を説くためのお話ではない、心得としてお話するのである修養のためにお話する、若し信仰を得たならば、私の述べたことは皆んな生きて來る信仰のない人には時には却つて邪魔になるかもしれない、扇には紙がある、竹の骨がある、けれども要がなければ全く役に立たない、信仰は要のやうなものである、信仰を得たときに役に立つやうに、述べておくのである、絹張なれば兎も角も、紙の扇はその裏表は解らない、扇の裏表を知らないやうではいけない、之を知るには、竹の骨の裏表を見れば自然に分かると云ふことは教へてもらはなくては分らない、けれども裏表を知つても要を知らなければ何にもならぬ、要のある上に裏表を知ることが必要の

知識である、殊に書畫を書く人には尤必要である。

信ずるとはどう云ふことを信ずるか、法然上人は一切經を讀破すること六回で、罪惡生死の自己が救はれる法、一切衆生が平等に助かる法を見出さうと云ふ標準で釋尊の教を尋ねられた、そして釋尊の出世の本懐である阿彌陀如來の本願を見付けられて、釋迦が特に撰擇して説出された教義であると云ふことを見付けられた、そこで念佛爲本諸行方便の教をお説きになつた、親鸞聖人は自分で煩悶されて自分の助かる法はないか、自分の往生の一大事は如何にして解決し得るかを探して居られたが、如何にしても自己を救ふことは不可能である、そこで六角堂の觀音に百日百夜の御祈願を籠められた、その時五條の橋の上で安居院の聖覺法印に會はれた、自己の煩悶を話された時、法印は吉水の法然上人の所へ共に行くことを勧められた、そこで法然上人にお會ひになつて、他力より外にないと云ふ解決がついた、これからは已に一切經を讀む要はない、既に法然上人が見出して居られた、その信仰をそのまま、お受けになつた、こ

の點は釋迦如來が本懐として説かれてあるのを、法然上人が見付けられた、之をその儘お受けになつて實行せられたのが親鸞聖人である、聖人はこの法實によつて自己が救はるゝのみでなく、いまこの恩澤の薄い平民、下層の人民、一般の日本國民には残らず行き渡つて、宗教的自覺が一般的になるやうにお擴めになつた、法然上人は栗の刺毛も皮も濫も一所に取り出されて與へられた、この刺毛を取り濫を去つて眞味を味ふことを知らぬ一般人民の中には、たゞ念佛の意味を取違へる人も出來た、念佛を唱へて功德にして行くと云ふのではない、信心といふことが大切なのである、そこで親鸞聖人は一律主義を以て統一せられた、念佛爲本は親鸞聖人に至つて信心爲本と定まつてしまつた、最早や疑ふ餘地は残してない、私は親鸞聖人を一律主義の人と思ふ、法然上人は教義の人で、受け取る人によつてどうにもなる、主義の人親鸞聖人によつて少しも疑ふ餘地なく統一されたのである。

この一律主義より眺めると親鸞聖人は八面玲瓏、明了徹底の人格であつたことが分る、

我々の信仰は全他力、純他力、絶対他力の信念で、信心爲本といふ一本鎗で定まつて居る、法然上人の念佛爲本、臨終正念、三昧發得、來迎を待たずして往生は平生業成で、早く信の一念に解決され、信念の光りは實生活に實現し得る、我々の行は念佛報恩の一律である、念佛の業は報恩のためである、この主義で實生活に奮闘活動する、念佛は佛に對する感謝である、自己の懈怠に對する懺謝である、かくして實生活を金剛不動の大安慰を以て送ることが出来る、生きて活動することは悉く報恩である、感謝の念からして一生奮闘努力することが出来る、こゝに始めて宗教の本領を發揮する、宗教の眞味も顯はれて来る、これで信念も明了である、一寸の疑もない、念佛も報恩で、これを功德に利用すると云ふのでない、然らば拜む佛はと云つたら彌陀一佛である、法然上人は阿彌陀如來の分身であつて、御使である觀音勢至の御像を自らお刻みになつて、阿彌陀如來にお添へになつたこともある、親鸞聖人は觀音勢至さへも拜むではならぬ、釋迦如來さへも拜むことはならぬと、禮拜の目的を一律に定められた、

皆んなおなじ信念で行くのであるから、信の結果は彌陀同體である、彌陀一佛の信心であるから、死んで行つたら彌陀同體の佛と成るのである、耶蘇教では神と人とは全然一所にはなれない、神は能造の主、人は所造の臣である、人が救はれて天國へ行つても神の國に入るのみで、神と同體になることは出来ない、なほ上下主従の隔がある、之が無ければ汎神教となつて、耶蘇教の教義は崩れてしまいます、親鸞聖人は寸分變らぬ彌陀同體の佛となるを教へられる、それはその筈である、絶対に二つはない、眞理に二つはない、純他力で佛の力で佛になるならば彌陀同體より外はない、親鸞聖人の前には僧侶と俗人との區別はない、僧俗一律である、僧親鸞、沙門親鸞と云はれたことは一度もない、恒に愚禿親鸞と言はれる、聖覺法印も愚禿と稱して居る、此法印は天台の僧侶で、親の代から肉食妻帯であつた、親鸞聖人は聖覺法印の書かれた唯心鈔の註釋「唯心鈔文意」を書かれた、兄弟子に對してこれだけ師事し尊敬して居られた、聖覺法印は天台の僧侶で肉食妻帯であるから、一面から見れば墮落である、佛

し念佛往生の人であるから、一面から見れば寸毫も差支はない、親鸞聖人の近い標準は同門の聖覺法印である、遠い理想は聖徳太子である、一層遠い理想は釋迦如來である、釋迦如來は貴族的宗教を平民的とせられた、山の宗教を引下げて、村の宗教、市の宗教、民間の宗教とせられた、聖徳太子は俗人の姿で佛教を修め且廣められた、聖覺法印は肉食妻帯で他力念佛を信じた、この三理想を標準として僧俗平等といふ一律主義が親鸞聖人の腦底に浮んだ、肉食妻帯、在家止住は聖人の家族主義の實行である、親鸞聖人は寺は建てられない、寺といふものはなかつた、何々坊と云ふ弟子の家へ行つて、法話をなされた、それを御坊といふのである、寺が出来たのはあとの話である、大谷派の法主光演上人は「勿體なや祖師は紙子の九十年」と咏れた、僅に墨染の法衣はあつた、それはもともと叡山の僧であつたといふ名残である、告朔の餼羊である、羽織姿で説教しやうと云ふのが御本意であつたに相違ない、僧俗は平等であつても師弟の區別はありさうなものであるが之もない、親鸞は弟子一人も持たず候として、

自分をも含めて御同胞、御同行主義を主張なされた、おなじ法海の水を汲む友であるといふのである、かゝる一律主義より押し見れば、國家的生活は王法爲本の一律に定まるべきである、王法爲本を明かに述べられたのは蓮如上人である、がその精神は明らかに親鸞聖人の家族主義に籠つて居る、ゼームス、トループと云ふ人は日本で領事をして居る内に、蓮如上人の御文章を譯した、王法爲本と云ふことは、國家的教義で、同時に世界各國へ行つて差支のない世界的教義である、何れの國へも行へる、國家的宗教で、而も世界的宗教であると賞讃して居る、かく眞宗は一律主義、統一主義で出来上つて居るのである、蓮如上人は信長が天下を取り朝廷を無視して居つた時代に平氣で王法爲本と云ふことを言はれた、此勇氣は吾々の習はなければならぬ主義である。

山の宗教は僧生活本位で、下界の衆生とは没交渉で、女人禁制で、僧侶の修行本位である、市の宗教は俗生活本位で、我々が佛法を味ふために出来て居る、この俗生活と

云ふは廣い、平民的でなければならぬ、また家族的でなければならぬ、自然に然らなつて來る、家族的なる以上は王法爲本で國家的でなければならぬ、實際に行はれる俗生活の宗教は家族的でなければならぬとの理想から、親鸞聖人は全く家族主義の宗教を建設せられたのである、かく平民主義、家族主義であるから、日本國民が一般にこれによつて、宗教的自覺が出來、靈的自覺を得て佛の恵に浴することが出來るに至つたのである。

境野哲君は、信心爲本、念佛報恩、平生業成、肉食妻帶の四は親鸞聖人の四大主義である、日本に行はれる價值があるといつた、私は猶一つこれに付け加ふるに、非迷信主義を以てして、親鸞聖人の五大主義としていふと思ふ、そして肉食妻帶は在家止住と改めたい、非迷信主義は親鸞聖人の善導讀にも述懐讀の中にも見える、非迷信の一律主義は明了に説かれてある、迷信は教育上最も妨となるもので、その迷信の根本は祈禱である、聖人はその祈禱、現世祈りを排斥禁止せられた、祈禱は我々が佛と

成ると云ふことに付ては必用の餘地がない、信の一念に定まつたものを更に祈禱する理由がない、併し現世の事實即ち病を療すとか、方角を見たり吉日を撰んだりする、これが迷信である、これは自分から作り出して自分の神経を助長するところに、教育上甚だ害がある、宗教は教育に害があるわけではないが、迷信を助長する様な宗教は迷信の點で害がある、神経を過敏にして意志を弱めるところで妨となる、害がないならば何故に宗教を教育に入れないか、それは耶蘇教ばかりの西洋であつても、諸派の解釋の差があるために甚だ困難である、今日處置に苦んで居る國もある、まして日本は佛教あり、神道あり、耶蘇教あり、これを統一して國民教育をなすといふことは不可能である、これは日本の状態として自然である、眞宗は非迷信の主義に於て世間無比の宗教である、世界の中あらゆる宗教の中で、祈禱を禁じた宗教は親鸞聖人の眞宗がたつた一つである、しかも眞宗が信仰に於て最も進んで居る、勝れて居ると云ふことは誰も疑ふものがない、祈禱が迷信を生じ、個人の修養にも、國民教育にも害がある

と云ふことは明らかであるけれども、眞宗だけはこれをその儘、教育に用ゐても寸毫も害は認められない、これによつて見れば眞宗のみは教育的宗教であつて、これ以上宗教として望むところはない、平民的で、家族的で、國家的で、教育的であれば缺けたところはない、それで親鸞聖人以後に新しき宗教はない、それ以上發達しない、發達する必要がないのである、然るに世には眞宗には祈禱がない、宗教の通則に外づれて居る、祈禱を始めたなら、宜しからうと述べた人がある、これは宗教の必要を教育界に鼓吹するには非常に功勞のあつた谷本博士である、これが眞宗の特長であり、世間に誇るべき無類の教義であるのを却つて缺陷の如く説いたのは残念である、假令祈禱を信念の表示と見ても、眞宗には祈禱の入るべき餘地はない。他力の教が大變に入り易い、それ故自力門の方でも他力を説くのが多い、それ／＼理屈もあり、功能も相當にないではないが、之を専門に教へるのは眞宗であるから、純他力の一律主義に入るのが尤も適當である、釋尊が出世の本懐として説かれた大無量壽

經には、彌陀は衆生が救はれなければ佛とはならないとの誓願に依り遂にその願満足した、その時より我々衆生の往生は定つて居るのであると云ふことが明らかに示されてある。

「四十八願成就して 正覺の阿彌陀となり給ふ

たのみをかけし人は皆 往生かならず定りぬ」

然るに信心爲本の主張にのみ重みが入り過ぎて、他の家族的、國家的、社會的大標榜を忘れるから、終に宗教が老人の專有物となつてしまひ、未來専門の教である、實生活と没交渉であると云ふやうに批難されて、折角親鸞聖人が家族的平民的に引き下げられた佛教が、隱匿主義の宗教に返へりかけて居る、實際悲しむべきことではないか、親鸞聖人に對して相濟まぬことである。

これだけ實生活に最もよく適合した、最も望ましい、國家主義、家族主義、平民主義の完全に備つた宗教を持つて居ながら、これはよく味はないで、このありがたい我々の

機にかくまで適應した彌陀の本願があるのに、そのお恵みに預ることが出来ないといふのは、これほどなさないことはあるまい、目の見えぬ我々はそれほどにも思つて居ないが、佛の御目より御覽になつて如何にお歎き遊ばさるゝことであらうか。序に現世的の言葉を以て日本人の本務、佛教家の本務、眞宗信者の本務を述べて置きたい、人間は四つの關門を通らなければ眞の人間ではない、佛教徒ではない、また眞の親鸞聖人の教に従つたものとは云はれない。

(一) 吾々は家の中に生れない者はないのであるから、家族的な生活が完全でなくては人ではない、親の心を以て心とし、父子一體の自覺がなくてはならぬ、一方にかく平等門があると同時に、差別門がなくては佛教ではない、平等門では親の心を心とするのであるが、差別門では親子の別がある、親には絶對に服従しなくてはならぬ、心地觀經には四恩と云ふことが説いてある、その第一は父母の恩である、佛教は前にも述べた通り、謝恩的の行爲でなければ眞の行爲ではない、遺産を得る爲に孝養する如き、

利用的行爲は眞實ではない、父母の恩を感謝する爲の行爲ならば、一生の孝養尙足りとせられないのである、親鸞聖人の家族的な生活は、この父子關係の標準を示されたものである、之が第一の關門である。

(二) 人は皆社會に出て、生活せぬ者はない、社會的生活を完全にするのが第二の關門である、人の心を以て心とし、己の欲せざるところは人に施さず、四海兄弟であるとするのが精神的平等門である、衆生を見ること自己の如く、諸天人民を哀愍すると父母の子を思ふよりも甚しと、佛の言はれたのは平等門である、差別門では自他の差別がある、他のものは寸毫も犯さぬ正義が必用である、これを蓮如上人は世間の仁義を先きとせよと教へられてある、仁は同情で平等、義は正義で區別を示して居る、競争するにも人がなければ出来ない、至るところ衆生の恩の塊である、そこで心地觀經にはこれを衆生の恩と説いてある。

(三) 第二の關門は過ぎてても國家的生活が完全しなくては人ではない、國家の中心は

君である、上一心、君は民の心を以て心とし、民は君の心を以て心とする、君臣一體である、罪あらば、我を罪せよ四方の神、民は我身の生みし子なれば、と明治天皇の御詠がある、これは平等門である、差別門に於ては、君臣の分自ら定つて居る、臣民は絶對に服従する本務がある、心地觀經には國王の恩も説いてある、謝恩的の忠なれば勳爵を與へられざるも不平はあるべき理由がない、忠も孝も仁義も一寸も變つたことはない、皆一つである、他の心を以て心とするのみである、これが第三の關門である。

(四) たとひ以上の三關門が完成しても、個人的生活が完全せねば家の爲にも國の爲にもならない、これが最も大切の處で誤りの起るところである、個人的生活の完全と云ふことは、個人を完全にすることであるから、これからして個人主義となり、利己主義ともなり、自然主義ともなる、これは心得が至らないからである、これを防ぐには個人的生活と宗教的生活とが全然一致すると云ふことの外に道はない、個人的生活と

宗教的生活との一致は、即ち靈的自覺である、その靈的自覺は絶對他力の信仰によつて自覺するが最も大なる自覺であり、完全の自覺である、かくて佛の爲さしめ玉ふ所は之を爲し佛の捨てしめ玉ふ所は之を捨てる、佛の命令により佛の光明と生活する身となれば、凡べて報恩の生活である、即ち信仰生活である、それが精神教育の基礎を形作り、自然に國家的生活、家族的生活、社會的生活が完全に行はれることとなるのである。

精神教育は裏面に靈的自覺があつて始めて完成する、信仰的生活から導かれて國家的自覺、社會的自覺、家族的自覺となつてあらはれ、これが人類の劣情弱點から起る墮落より救はれ、國家社會を毒する危険主義から救はれることとなるのである、個人的生活は主人がない、國家には君があり、社會には人がある、家族には親がある、個人には主とする對象がない、之が自然主義、危険主義の根本となるのである、信仰生活と一致するに至つて始めて佛と云ふ救ひの主あるに至つたのである、こゝにも平等

と差別がある、精神的平等では生佛一如、佛凡一體である、一休和尚が「極樂にさま
で用事はなけれども彌陀を助けに行かざるまい」と咏まれた、自己が救はれねば彌
陀の心は休まらない、即、自己が救はるゝは彌陀が救はれるのである、親心に安心が
出来るのである、これは平等門である、差別門では佛は絶對であり、我は小人格であ
る、不完全なものである、佛恩に依つて初めて生きるのであるから、謝恩の努力を續
けねばならぬ、之が第四の關門である、萬物の活動は二にして不二、平等門、差別門
が二つある様で二つではない、相交錯してうまく融合して行はれなくてはならぬ。
此四種の關門につきては、今更新しく發明して申すのではない、心地觀經に父母恩、
衆生恩、國王恩、三寶恩と説かれてある、親鸞聖人は始めから家族主義を標榜して家
庭をつくり、蓮如上人は仁義爲先、王法爲本、朝家の御爲國家の爲念佛申し合せ候へ
との御言葉あり、報恩稱名念々相續の御勧めがある、かくの如くこれが眞宗の信仰
であり、心地觀經の教であり、釋尊の直説である。

儒教は國家的生活に於て不完全を免れない、支那には眞の忠は存在しないと云つて宜
しい、忠は日本獨特の教である、また耶蘇教は家族的生活に於て不完全を免れない、
國家的生活に於ては今尙試験中に在る、どうか四種の生活に於て曾て遺憾のない佛教
に依り、絶對他力の大信心に住し、報恩の奮闘努力に身を委ね、如來使であり、如來
の所遣である天職を盡して、帝國の臣民として世界に大乘の選民たるの事實を表明し
たいものである。

恒河 結句用島地上人之作

恒河滔々流不 _レ 理。	天河降流白龍蟠。	溶々落爲 _二 無熱水 _一 。
氷雪千秋地軸寒。	水經 _二 馬口 _一 達 _二 人界 _一 。	遂到 _二 天門 _一 爲 _二 巨川 _一 。
三流交帶稱 _二 偃水 _一 。	五河合滙是龍淵。	波渦佛子火定燄。
沙塞育王地獄門。	百萬生靈日沐浴。	擬 _下 洗 _二 罪垢 _一 浴 _二 天恩 _一 。
曾泛西域馳騁客。	幾渡南海寄歸人。	留學有 _レ 友此沈 _レ 骨。
巡禮幾人來問 _レ 津。	五天風色無 _二 今古 _一 。	行路何獨知 _二 危安 _一 。
游心來對東流水。	甲谷城外夕陽殘。	

雪下道人 高楠 順未治 艸

下篇 久修十題

第一章 理想的顯現としての菩薩

一切佛敎の理想は、菩薩に由つて示されて居る、菩薩は因位にあるだけに衆生にも近く、今一足で果位に登るのであるから、佛にも遠からず、上求菩提では、我々と同一の行路を辿つて居る人で、下化衆生では佛と同一の悲願を持つて居る人である、恰も佛と衆生との間に立つ勢力ある媒介者の如くに感ぜられる、歴史上の佛は已に涅槃に入り、今はその音容を拜することは出来ないが、未來の佛たる菩薩は、現に都率天の内に院に住して居る、佛は出世を待たねば遇はれぬが、菩薩は世界の何れに如何なる身形で出世して居るかも分らぬ、かゝる思想は漸次に集中して、遂に菩薩を一の理想として崇拜するやうになる、これは寧ろ自然の趨勢と云ふて宜しい。

佛敎史を調べて見ても、佛の涅槃の後には彌勒菩薩の崇拜が起る、これは單に未來の佛であると云ふ思想から信仰せらるゝので、龍華三會の曉とか、五十六億七千萬歳の

行末とか云ふ、遠い時期まで思想の及ばぬ人は信ぜない、定力にありて都率の内院を觀想することの出来る人の外は、内院往生は希望せぬ、全體菩薩と云ふのは、唯彌勒一人に限るべきものでないと云ふことは、本生經五百話を讀むものには直に感ぜられる、本生五百話は、佛が「菩薩」たりし時あらゆる生類の形となりて生れて五百生を経たと云ふ實驗話である、一々の本生話は皆「菩薩」が主人公で、標準的の言動、教訓的の偈頌は、皆「菩薩」に歸してある、その時には波羅門も菩薩であれば、商人も菩薩行者も菩薩、猿も菩薩、馬も菩薩である、本生話五百四十七篇の内に、菩薩は實に左の如く示現して居る。

- 一、仙人たりしこと八十三度
- 二、國王たりしこと五十八度
- 三、樹神たりしこと四十三度
- 四、人師たりしこと二十六度
- 五、波羅門たりしこと二十四度
- 六、王臣たりしこと二十四度
- 七、王子たりしこと二十四度
- 八、貴人たりしこと二十三度

- 九、學者たりしこと二十二度
- 十、帝釋たりしこと二十度
- 十一、猿たりしこと十八度
- 十二、商人たりしこと十三度
- 十三、富者たりしこと十二度
- 十四、鹿たりしこと十度
- 十五、獅子たりしこと十度
- 十六、鴨たりしこと八度
- 十七、鴨たりしこと六度
- 十八、象たりしこと六度
- 十九、鶏たりしこと五度
- 二十、鷲たりしこと五度
- 廿一、奴隸たりしこと五度
- 廿二、馬たりしこと四度
- 廿三、牛たりしこと四度
- 廿四、梵天たりしこと四度
- 廿五、孔雀たりしこと四度
- 廿六、蛇たりしこと四度
- 廿七、陶師たりしこと三度
- 廿八、浮浪たりしこと三度
- 廿九、蜥蜴たりしこと三度
- 三十、魚たりしこと二度
- 卅一、調象者たりしこと二度
- 卅二、鼠たりしこと二度

- 卅三、豺たりしこと二度
- 卅五、喙木鳥たりしこと二度
- 卅七、豚たりしこと二度
- 卅九、蛇毒治療者たりしこと一度
- 四十一、石工たりしこと一度
- 四十三、鬼舞者たりしこと一度
- 四十五、銀工たりしこと一度
- 四十七、水禽たりしこと一度
- 四十九、牡鶏たりしこと一度
- 五十一、鳶たりしこと一度
- 五十三、神仙たりしこと一度
- 卅四、鴉たりしこと二度
- 卅六、盗人たりしこと二度
- 卅八、犬たりしこと一度
- 四十、賭博者たりしこと一度
- 四十二、鍛冶工たりしこと一度
- 四十四、學生たりしこと一度
- 四十六、大工たりしこと一度
- 四十八、蛙たりしこと一度
- 五十、兔たりしこと一度
- 五十二、山鶏たりしこと一度

計 五百三十二生(少しく違算があるやうに見えるが、暫くスペンズ、ハイデイ氏の計算に順ふこととした百二頁)

五百本生經は、蕭齊の時代に於て、一たび支那に譯せられたが、惜ひかな散逸して今は「佛說生經」の五十話を存するのみである、その他多くは譬喻經、賢愚經、雜寶藏經等に見えて居る、本生話に於て菩薩が、如此多くの生を経て、如此多くの身を現して、幾多の衆生に近接したる事跡は、本生話そのもの、教訓と俱に、一般道俗を導きて高尚なる道義の觀念に浴せしめた、その恩光に感化せられたる結果は、自然に人間生活の理想と、宗教倫理の標準とを本生話中に求むるに至つた、故に本生話は幾多の詩人に依りてその詩材に供せられ、後には巴利語のチャリヤピタカ詩篇、梵語のジャータカマラー(本生鬘經)詩篇の如き詩話を生じ、「龍王の喜び」の如き、菩薩を理想化した戯曲文學をも生ずるに至つたのである、而して常にこの本生話を味つた人が、單に釋迦如來の因位の本生のみを隨信し、この外の佛にはかゝる本生なしと思つたとは如何にしても考へられぬ、佛も已に未來に於て佛が顯れると説き同時に過去七佛をも説いた、過去と未來とに一佛でもあると教へられた以上は、過去も無限

未來も無限であるから、自然にその數は増して来る、巴利語に過去二十三佛の傳説あれば梵語にも過去五十三佛の信仰がある、如此過去未來の佛も皆一々幾多の本生があつて、百千の菩薩の生を受けて修行したに相違なく、殊に未來の佛は、今現に修行しつゝあるに相違ないして、見れば自然に幾多の菩薩の存在をも認むるに至るべき理である。菩薩の存在は一般佛教者が認知する所であるが、こゝに南北佛教の大差がある、南方佛教は菩薩の存在とその理想たることを理論的に承認しても、實際的信仰の上には會て之を禮拜しない、彌勒の如き、佛が現に説かれた菩薩でも、その像は作つた寺にあつても之を禮拜はせぬと云ふことである、而るに北方佛教は、菩薩の理想を承認すると同時に之を信仰禮拜すること佛に均しくする習慣になつたのである、されば大乘、小乗の差と云ふものは、この菩薩を禮拜するに否とに在るので、唐の義淨三藏も云て居る。

大乘小乗區分定まらず、律檢殊ならず、齊しく五篇を制し通じて四諦を修す、若し

菩薩を禮し大乘經を讀むは、之を名けて大となし、斯の事を行はざる、之を名けて小となす。(南海寄歸傳)

而して巴利佛教徒が、果して本生話の菩薩の教行を理想的に見たかと云ふとは、中には疑ふ人もあるかも知れぬ、是は一寸原書を繕く人には寸毫の疑ひも起らぬ程の者であるが、一應殊に明白に述べて置く、巴利佛教の信仰によると、菩薩は「十波羅密多」を有して居る、「波羅密多」は「度」と譯し、又は「到彼岸」と譯する、即、完全圓滿の意味である、チャリヤピタカ詩篇には之を「十度」に分つて本生話を之に配付して擧げてある、そこで五百本生話の序文にも「十波羅密多」を擧げて、菩薩の教行を光讚してある、十波羅密多とは一、布施、二、持戒、三、捨家、四、智慧、五、精進、六、忍辱、七、眞諦、八、定心、九、慈悲、十、捨受である、大乘の十波羅密多、六波羅密多と大差はない、この六度、若くは十度滿行の位が即、菩薩の理想である、そうして巴利佛教では更に之を開いて「三十波羅密多」として詳細にその修行を示してある、布施の

如きも單純の布施は四肢の一部を與ふること、第二義の布施は一切の所有を與ふること、第一義最上の布施は生命を與ふることを教へてある、これは本生話の中に教へてある訓言である、之を聞いて下化衆生の理想を「菩薩」に求めず、單に上求菩薩の思想に止めたのは、教の罪ではなくて受けた人の罪である。

佛教の理想として「菩薩」は尤適當である、圓滿の佛を示すに圓滿の佛を用ゐるは六ケしい、窮極の法身を説くには窮極の法身ではいけない、第一義を示すに第二義を以てし、非人格を示すには人格を以てし、全體を示すには部分を以てすべきものである、佛を示すには菩薩を以てするが適當である、「我れ救世の本懐を遂げずば、正覺を取らじ」と誓ひたる言は今尙「菩薩」の因位に止まれる聖者に依て完全に表示せられて居るのである、兎に角事實は菩薩が佛教の理想となつて法界に活動して居る、三輪空施の實現は菩薩に由つて行はれ、六波羅密の萬行も菩薩に由つて遂げられ、四弘誓願も菩薩の本願である、されど菩薩は佛徳の一方面のみを示すものであつて、全部を代

表するわけではない、そこで未來佛を代表するは彌勒、理智を代表するは文殊、行願の理想は普賢、慈悲の理想は觀音と云ふやうに各佛徳の一分を表示して居るのである、この中でも慈悲の代表者であるだけに、觀音菩薩が古往今來尤廣く信仰せられて居る、彌勒や文殊や、普賢の信仰は、日に薄らいでも、觀音の信仰のみは益々弘布して居る、文學に入り、美術に入り、社會の上層下層を通じて幾多の精神的慰安を與へて居る、色身を現じて苦界に入りて入難を救ひ、三十三身を示して施無畏の本願を行ずる現世の救主である、普門示現の教主である、偈に曰、菩薩清涼月、游於畢竟空、衆生心水淨、菩薩影現中。

第二章 觀自在菩薩

菩薩は、佛の代表者であつて、佛教の理想を表して居る、三輪空施でも、四弘誓願でも、六波羅密でも、皆佛教の理想を示して居る、而して觀音菩薩は菩薩の中の理想で

ある、凡て圓滿のものは圓滿を以ては表せられぬ、窮極は窮極を以ては表せられぬ、そこで果位は因位を以て表し、本地は垂迹を以て表し、全體は部分を以て表はすのである、これが佛教の長所である、そこで圓滿の佛を表するには、恒に菩薩を以てする、智慧の理想は文殊で表し、行願の理想は普賢で表し、慈悲の理想は觀音で表する、各々佛徳の一部分を表して居るのであるが、觀音は慈悲の領分を受けて居るだけに、その勢力が他菩薩に勝れて廣く信仰せられ、深く人心に染着して、永世滅退しない有様となつた、そこで文學にも、俗話にも、美術にも表現せられて、世界にその痕迹を残して居る、その本地たる阿彌陀如來の忘れられた印度でも、八難救脱の彫刻は、石窟寺院に存して居る、南方佛教の本場である西倫島にも、觀音崇拜の痕迹があると云ふことである、西印度の印度河口から南印度の摩羅耶の海濱、南方支那の海濱、それから深く内地に入りて、西藏國の王宮から、東海に入り、我日本に至る迄「補陀洛」(ポータラカ)の名は人の信仰の目標となつて居る、三十三身の示現はその方便慈力

の廣大なるを示したものであるから、人をして凡べての恩人、徳者は皆觀音の化身たるを想像せしめ、遂には人天、鬼神を論ぜず、一切の恩威、神力は、悉く觀音に歸するに至つた有様である、そこで觀音の徳を表したものは梵天もあれば、大自在天もある、又シヴ女神もある、準提(チャンデイー)と云ふ女神もあれば、馬頭(ハヤグリイワ)と云ふ鬼神もある、そこで六觀音、七觀音、十觀音と云ふ風に、その數も増して来る、楊柳とか、魚籃とか、色々の名を付けてその徳を表する、ゼシユイト派の包容主義が來てからは、マリヤの像も、子安觀世音と同一視せらるゝに至つたらしい、そこで觀音は慈悲の理想たるのみならず、一切の慈悲を表し、救世を表する神力の集合體と云つても差支ない様になつて居る、觀音の名はまた甚面白い、觀音又は觀世音、光世音など云ふのは、何かの間違から生じたか又は意譯から出て來た名で、正しく云へば、新譯の通りで「觀自在」である、この觀自在(アヴローキテーシユワラ)と云ふのが奇な名である、「觀」はこゝでは「能觀」ではない、この字の性質は「所觀」

の義である、精しく云へば「所觀自在天」である、本地の自在天は不可觀であるが、その垂迹は衆生に依て「觀られたる自在天」と云ふ義になる、その本地の自在天と云ふのは誰れか分らん、阿彌陀如來でもよし、又實在でもよし、眞如でも法身でもよい、その垂迹たる「觀自在天」は衆生の前に「示現したる自在天」である、「即時觀其音聲」と云ふのは、その意義を廣めて云つたので、名の意味を直譯したのではない、そうすると「觀自在」と云ふのは、「顯示的神格」で「權現」「化身」「垂迹」と云ふと同じやうな名である、佛教本來の佛體なれば、權現とは云はぬ、化身とは云はぬ、そこで或はその源は印度の地方神か外國神かで、漸次佛教の菩薩となつたのではなからうかと云ふのが、私の最初の考であつた、そこで先づ觀音に付纏うて居る「補陀洛」の名からして何か面白い考は出ないかと思つて、段々調べて見ると、「補陀洛」の根本はどらも西印度らしい、殊に印度河口の島の名らしい、希臘ではこの島の名を「バタラ」と云ひ印度では「ポータラ」と云ふ、これから「ポータラカ」(補陀洛)が出たらしい、

さてこのバタラは或は小亞細亞のバダラから來たのではあるまいかと云ふことが更に疑問となつた、小亞細亞のバダラは、アポロ神廟の在る處で、殊に「バダラのアポロ」として有名である、この「バダラのアポロ」が印度に移つて「ポータラのアバロキタ」となつたのらしく見える、「アバロキタ」(觀)は、印度の方言では「アバロキタ」である、つまり「所觀」と云ふ妙な名の出來たのも、もとはアポロを印度風の名に改めたものであるからであらうと思つた、この考は誠に突飛な想像で、随分一笑に付してよいものかも知れぬ、併し「ポータラカの觀音」の解釋が十分に明白にならぬ内は、この想像も一言で打消す譯にはいかぬ、殊に智度論中に諸菩薩の故郷を示した處がある、皆印度地方を以てその故國としてあるに、觀音だけは「從他方佛土來」とある、これは近頃文學士吉田修夫君が見出したのであつて、愚考に對して有力なる助勢である、但觀音の根本名はたとひ希臘の出であるとしても、その性質神格は全く印度である、そのアポロに關係あると云ふことは印度の諸神、諸聖の徳を集めたものである

上は、希臘神の原素も幾分かその中に包容せられてあると云ふに止まるのである、結論にはまだ容易に達せないから、今では未決の問題として置かねばならぬ。(観音の本門(サマンタムッカ)であつたらし) 門(サマンタムッカ)であつたらし) 門(サマンタムッカ)であつたらし)

観音は慈悲を表して居るからして、色々の經に關係があるが、殊に法華經には一品が全く観音の神力を表明する爲に設けてある、之が特に觀音經の名を專有して世に流布せられて居る、觀音の信仰は全くこの普門品からして鼓吹せられたのである、八難救脱の自在力も、三十三現身の方便力も、皆この中に示されて、念彼觀音力の功德を鼓吹し、施無畏の大神力を示してある、「南無觀世音菩薩」の稱名が萬能力を有して到處にその威力を現じて、衆生の苦難を救済する、即、現世娑婆に於ける苦難を除き、人民に一時的の慰安を與ふるとは全く觀音の領分とせられて居る、現世的救済は、觀音の職分であるが、未來的救済はその本地たる阿彌陀如來の本領である、觀音の普門示現自在の業は、現世の上のみに限られ、彌陀の念佛衆生攝取不捨の光は現當

二世に被ると云ふ、即、菩薩は結局佛の慈悲の一部分を表するに過ぎないのである、凡そ現世のみを説いたのでは一つの宗教にはならない、こゝではその本地たる阿彌陀佛の慈悲を合説せば、方便引入の普門示現と、誓不成正覺の本願成就とを合せ示すものであつて、完全の宗教信仰となるのである。

法華經普門品の梵本を見ると、この兩方面が完全に示されて居る、普門品の偈頌の部分は、漢譯には二十六偈あつて、秦譯、隋譯ともに同一文で、隨分適譯で名文である、晉譯の正法華經にはこの偈は全く無い、右の二十六偈は先づ原本と同一と云つて宜しい、然るに梵本にはこの上に尙七偈あつて、都合三十三偈ある、さてこの七偈は觀音頂禮の意を續けて、更に阿彌陀如來の因位、果位のこと略して示してある、どうも語法から見ても字句から見ても、思想から見ても、後世の挿入とは見えぬ、さりとて如何なる理由で鳩摩羅什の持つて居た原本には、之が無つたであらうか明了しない、或は後世の竄入だと云ふ説も立てられないことはない、もし法華經中に、阿彌陀佛の

ことが一切ないと云ふならば、後世の竄入と云ふことも賛成するが、第七化城品には「西方二佛。一名阿彌陀。二名度一切世間苦惱」と云ふがあり、第二十三藥王菩薩本事品には、

若如来滅後。後五百歲中。若有女人。聞是經典。如說修行。於此命終。即往安樂世界。阿彌陀佛。大菩薩衆。圍繞住處。生蓮華中寶座之上。不復爲貪欲所惱。亦復不爲瞋恚愚痴所惱。乃至得菩薩神通无生法忍。

と云ふ語がある、この教が法華經中にある以上は、阿彌陀佛に關する偈が、その慈悲を表する觀音のことを述べたる普門品にあるは尤適切である、之が若し無かつたら不思議と云はねばならぬ、そこでこの七偈は尤必用のものであると思ふから、之を左に譯して世の人に示すこととする、昔から不和である法華と念佛もこの七偈があると知つたら、調和の實も擧つたかも知れない。普門品の偈の終りは、

具一切功德 慈眼視衆生 福聚海无量 是故應頂禮

と云ふのである、この次に七偈がある、先づ和譯して、後に漢譯して見た、翻譯は勿論難澁で適譯とは云へぬ、けれども大略の意味だけは顯はした積りである。(東方聖十一にケルン氏の譯はあるが、氏は法藏比丘を誤譯したから要領を得なくなつた)

一、人界に對し慈悲を有せる彼れは

未來世に於て當に佛となるべし

彼れは一切の憂畏の苦を滅す

我れ今この觀自在菩薩を頂禮す

二、世界の供養を受くる法藏比丘は

世自在王如来をその師とし

幾多の百劫を歴て修行し

无上清淨の菩提に達せり

- 三、右邊若くは左邊に侍して
無量光佛を扇ぎつゝ、
彼れらは三昧の力に由り幻化の如く
一切國土の佛に詣て供養す
- 四、西方に清淨の世界あり
安養にしてまた極樂なり
無量光佛は彼の土に於て
有情調御の主として止住せり
- 五、この國に於ては女人の生なし
凡て陰陽の法を存せず
かの佛子はこゝに化生し
無垢にして蓮華の臺に坐せり

六、彼の無量光佛も亦

- 純淨微妙の蓮華宮に於て
獅子の高座に趺坐し
光を放つこと沙羅樹王の如し
- 七、世界の主たる佛は此の如く

三界に於て等倫なし

主を讚嘆して我が功德は積まれたり
最勝人よ願くは速に彌の如くならん
之を漢文の偈にして見れば、不穩當ながら左の如きものである

一、慈悲救世間
當來成正覺

能滅憂畏苦
頂禮觀世音

二、法藏比丘尊
詣世自在王

- 修行幾百劫
- 證無上淨覺
- 三、當侍左右邊
- 扇涼彌陀尊
- 三昧示幻力
- 供養一切佛
- 四、西方清淨土
- 安養極樂國
- 彌陀住彼土
- 調御丈夫尊
- 五、彼土無女人
- 無見不淨法
- 佛子今往生
- 乃入蓮華藏
- 六、彼無量光佛
- 淨妙蓮華臺
- 獅座放白光
- 如沙羅樹王
- 七、如是世界尊
- 三界無等倫
- 禮讚積功德
- 速爲最勝人

(以上)

第三章 佛教生活の理想

本學年に於ける佛教青年會の初會に於て、平生見て以て將來理想の宗教となせる所を述べんとするは、尤その時機を得たるものであるとを信ずる、抑「各宗合同」なる理想は久しく教門の一大懸案であつて、而も實際に於ては決して解決せられざるの問題である、今かくまでに別れかくまでに差違ある各宗派をして、同働一致の事業に當らしめんとするのは、言ふべくして遂に行ふべからざるの理想であるからである、しかし「各宗合同」は無上の理想たるを失はない、宗教經世家の尤希望する所たるは言ふまでもない、これを世に實現せしめんと欲せる計畫は、常に失敗に歸し、識者の憂慮を買ひたること一にして足らずである、而るにこの佛教青年會は、各宗の青年相合して、宗教生活に於て同一の理想に進まんとするものである、若しこの間に於て一宗一派の特別教義を骨張し、他と相容れざることあらば、是れ青年會の目的に背くもので

あつて、青年會は自然に「各宗合同」の理想を實踐せざるを得ざるの地に立つが故に、青年會員が常に相計りて以てその主義となし、務めてその實行を期すべき事項は大凡左の如きものであらう、

- 一、各宗派に共通する所の教義、方軌を求めて務めて之が互融を期すること、
- 二、史的攷究の結果を利用して、務めて佛在世時代立教の精神に還向すること、
- 三、各宗別途の宗義は各祖師の佛敎中に於ける新發見に屬す、故にその優勝の處を求めて務めて之を相互實用に供すること、
- 四、從來の解釋に依り佛の正意の誤認せられたるものあること、佛の正意の尙隱蔽せられたるものあること、この二事を信じ、務めて隨自意の解釋を試むること、我々若し一たび以上の精神を以て佛敎を宣説するの自由を得、佛敎を實踐するの標準となさば、聖淨二門の差、顯密二敎の異を打て一丸となし、悉く相融和して所謂理長爲宗的新宗敎を實現することを得るであらう、今その解釋に依りて、取捨の差を生

ずべき實例の一二を擧げて、その希望する所を述べやうと思ふ。

三學は諸宗を通じて尤樞要なる教義であつて、佛の根本教義の一である、是所謂三毒の煩惱に對して宣説せるもので、人間の須臾も離る可らざる教訓である。

貪慾、瞋恚、愚痴の三毒を治むる爲、戒、定、慧の三學を教へるのであつて、戒を以て慾を對治し、定を以て瞋を治め、慧の運用を以て愚痴を拂ふ、所謂「三學の林に入らずんば誰か菩提の果を證せん」と云へる如く、尤樞要なる法門である、けれども淨土門に於ては、全く之を棄て以て常人の企及し能はざる所とする、若し之を初地以上の理觀より見るならば、三學の奧義は到底通常人の履踐すべからざる所であるが、今之を開き之を和げ、積極的に之を説かば、戒は正語、正業、正命の三である、消極的に之を述べれば不殺生、不偷盜、不妄語、不邪淫、不飲酒である、人間誰か之が實踐を憚るものぞ、たとひ佛の教法ならざるも、何ぞこの訓戒を守る能はざるの理があらうや、誰か敢て之を排斥し得べきものとなさうや、淨土門に於ては之を以て出離生死

の正因となさんとするを排するけれども、之が實踐に於て素より異議ある筈はない、定は正治、正念、正定の三正道にして、慧は正見、正思惟の二正道である、この正道の實行も亦更に異論あるを見ない、如此解し來ると、戒とは日常生活の訓戒で、社會の慣習と紀律と徳義とに背かざるを云ひ、定とは精神修養の正路として心を攝し、意を専らにし、諸般の考察力を養ひ、一生持續し得べき恒心を養ふを云ひ、慧とは天與の慧能を發揮する運用力であつて、その見地を正しくし、その理想を高くし、迷信を去りて健全の信仰に歸向し、常に常識の指示により事を處するを云ふものであるから、我々日常生活に尤必要にして、精神修養に於ては缺く可らざるの正道である。

十二因縁は佛の人生觀の思索的順序を示し、四聖諦は佛の教義の哲學的組織を示し、八正道は佛が積極的に宣説せる倫理の標範である、佛が消極的禁戒として教へ、機に應じて説いた大小の説法は、多々なりと雖廣く一般の依用すべき中樞の正道として宣説せる所は唯この八正道あるのみである、然らば八正道とは何であるか。

慧
正^〇 正^〇
見^〇 迷信を去り、空想を排し、正しき見地に住するの謂
思^〇 如法如實にして、信念相應し、その理想を高くするの謂
正^〇 言^〇 公平、眞實、愛意を以て言説をなすの謂
戒
正^〇 行^〇 清淨、平和、方正の行爲あるの謂
命^〇 他人を損し他の生物を害せざるの生活を爲すの謂
正^〇 治^〇 常に自省の意を持ち、猛勇、奮進の心を存するの謂
定
正^〇 念^〇 一心専念にして、自の地位を自覺し、その守る所を念持するの謂
正^〇 定^〇 靜慮にて事物を伺察し、極めて完全に考覈し、根柢より斷定を下し得るの地を爲すの謂

是れ佛説の所謂八正道である、私欲、私情の發現たる世間的生活の俗道にも非ず、苦行苦悶の集合たる外道の生活の危道にも非ず、平易明晰何人も實踐し得べき不偏不局の中道と説いてある、是れ實に佛敎生活の理想であつて、個人修養の標範たるもので

ある、各宗各派老若男女共に履修し得べきの大道である、之を以て單に小乘に限れるものと考へるのは是れ實に外道的偏見なりと謂ふべきである。

釋迦の八正道は初轉法輪の時に説いたるものであつて、彼の「五群比丘」と稱せらるゝ尊者了本際以下五名はその簡易にして理を盡せるに感じ俱に佛門に歸したのである。以上は今此に一例として挙げたるものであるが、之を佛教青年會の理想として佛教青年の模範生活を建設せんことを希望して止まない次第である、その説く所如何に高遠でも、その行ふ所賤劣であるならば人格の尤憎むべきものであつて、宗教者の俱に戒むべき所である、故に將來の宗教として學界に評判あるべく夢想せられた理論宗のやうな空論的新傾向を生ずる如きことあらば、佛教は實に、個人の修養に益なく、社會の實用に適せざるに至るであらう、八正道の如き、善美俱に備はれるの福音を棄て、佛立教の精神を没却するは、自その宗教を破滅するものと謂ふべきである、凡そ、信念なく、實踐なき宗教は社會に生存するの權利なきものである、我國佛教の弱點は、

常に議論に馳せて信仰冷却せるの一事に在る、これは佛在世よりしてその淵源する所があり、以てその然るをなせるものである、佛は凡ての人間以上の神格を非認し、諸天諸神は人の生活、生命に向つて寸毫の支配力なきものとし、神の天啓に係れりと云ふ吠陀經を排斥し、唯各自自證の菩提に依りて、眞解脱を得べきを説いたのである、外圍の弟子信者は悉く佛の人格を慕ひ來つて佛に隨從せるものであつてその拜するは敬禮であつて、禮拜ではない、香花を献じたのは敬愛の至情に出たものでその神格に奉じたものでない、佛前に讀經する如きは、佛の在世に於てあるべき理なく、行住坐臥悉く恩師に對するの待遇であつて、師の覺者たるを知るものに對し神格視したこともなく、佛は涅槃の後如何なり行くのかと問へるものすらあつた位であつて、その間實に師弟同和の一團あるのみであつた、而るに耶蘇は自稱して「我は神の子なり」と云ひ、聖靈の宿る所、神の應現體なりと云ひ、その在世に於て神たるの觀念を與へ、弟子は之に對して自ら宗教的奉祀の念を帯びたるは掩ふべからざる所であつて、弟子

の之を拜するは敬禮よりも寧ろ神に對するの禮拜であつた、生前に奇蹟あり、死後に再生のことありしより、益その神格を高め、三位一體を以て信仰の要件とするに至つたのである、一言にして之を云へば佛は人格として尊崇せられ、耶蘇は神格として禮拜せられ、佛教は知識本位であつて、無上智に進むを以て人間の大事とし、耶蘇教は信仰本位であつて唯一神を拜するを以て要件としてをる、即ち佛教は知識の教にして耶蘇教は信仰の教である、故に今に到つて尙この傾向を生じ、佛教者は常に知識研鑽に傾き易く、耶蘇教者は信仰祈念に偏し易い、耶蘇は尙神の如くに拜せらるゝけれども、釋迦牟尼佛は今各宗に於ては之を拜するものが少くなつた、この弱點に代ふる爲他佛を拜し、之に對して祈念信仰の禮を盡せるものがあるけれども、釋迦を以てその本尊とするは至つて少いのである、その拜する所はたとひ何れの佛であつても、その實踐する所は釋尊の正法たらんことを希望して止まない次第である。

かゝる高尚の教義、かゝる美麗の眞理を得て、而して徒らに偏僻の见解を以て之を損

減し、之を墮退し、遂に之を破滅せんは實に忍ぶべからざるの所作である、願くは佛當時の本相に返へりて十二分の攷究を經、その長所を發揮し、佛法光讚の本務を盡さんことを切望の至りに耐へないのである。

第四章 佛教清徒の任務

眞個の預言者世に出でず、信仰の中心會て定まる所なく、我國精神界の將來は全く暗黒である、世の宗教を談ずるもの、宗教の知識あるに非ず、信仰の經驗存するに非ず、宗教以外に立ちて宗教を説くこれ決して眞の宗教ではない、自ら信ずる所なくして他をして之に信賴せしめやうとする、世人の耳を傾けざる抑また理由ありである。

我國に於ける宗教の戰爭は、尙その準備をも始めざる有様である、大に聖典の講究を開き、その解釋に於て遺憾なきも、戰闘準備の一である、廣く宣教の方法を講じ、一切の社會改善の事業を收めて、宗教機關の完備を期するは、戰闘準備の二である、宗

教者の資格を高め、その教育を完成せしむる、是れ戦闘準備の三である、而してこの
 戦闘準備は、即、その戦争であつて、この準備の大小に依り、その占領の範圍の廣狹
 を來たす所以である、佛教はその準備の極めて不完全なるにも係らず、曾て根本的に
 之を改善するの勇なく、依然宗判の舊夢に安んじ、全く當年の情力にのみ生存してゐ
 るものゝ如く、耶蘇教者に至りては、その準備は比較的に完成し居るからして、その
 示威時代に於ては、稍成功の趣があつたけれども、一たび外援を棄て、獨立し、國家
 思想に同化せんとしたるの結果、信仰全く水平に歸し、教化の天職を去つて、自營の
 業務に従事するもの多く、今は戦闘員にすら事缺くの有様となつたやうである、而し
 て神道、儒道はかゝる點に於ては全く無能力であるから、我國宗教の振はざる亦知る
 べきである、將來精神界の王冠は、果して何れの宗教の有に歸すべきであらうか。
 維新以來我國に於ては政治上、宗教を忌避するの慣習自成りて、之が分離に成功し
 た結果、何事をもこの筆法を以て律せやうとし、例せば監獄教誨の如き、到底宗教の

力に依らざるべからざるものまでも、之を宗教の手より離れしめやうとしたことがあ
 る、今ではその經驗の教ふる所に依り、少しはその非を悟り、宗教の勢力を利用する
 の適當なるを知り得たけれども、教育上、倫理訓育の宗教的後援なくして奏功した例
 なきことは、世界歴史の教ふる所であるにも係らず、全く之を排斥しやうとするもの
 がある、倫理と宗教とはその理論の上に於て分離し得べきと同じく、實際に於ても亦
 分離し得べきや否や、これは一種の問題であるけれども、我國に於ては左までの不便
 なきものゝ如く、假令實際不便の點があつても、再び宗教を教育の實際に用ふるは到
 底今に於て望むべきでない、是れ、我國宗教の無能力にして、倫理的修養の實力なき
 に依るからであつて亦如何ともすべからざるものである、而して我國宗教の無能力は
 常に此點に止らず、宗教の資格を定むるに最も樞要なる社會改善の事業に於て、亦全
 く無能力である、釋尊開教當時にありし社會改良の精神も今は全く斷へ、阿育王治
 世の慈善事業亦影だも留めない、門下無告の窮民、病に沈み苦を訴へても、之を收容

すべき病院なく、施療の門戸遂に開けず、職業を授くべき貧民院の設もなく、孤獨を養ふの慈善院もなく、學齡兒童を訓育するの日曜學校もない、通俗に宗教を教ふる機關もなく、青年會の組織連絡も亦全きを得不い、勞働問題は日に益々起らんとするけれども之が解釋の道を講じたこともない、心眞諦に馳せて、而して眞諦の運用たる俗諦を忘れ、世間を離れて出世間の道を講ずるの弊、又救ふべからざるに至つてをるのである、「佛心者大慈悲是」とは佛説の訓言であつて、佛の心を以て心となすは遺弟の本分である、然るに我國十萬の僧侶は、之に對し、常に出世間的の解釋を與ふるのみであつて、會て慈悲の佛心を社會の實際に宣布することを務めない、故に社會の下層には、慈善の涙に生々すべき幾多の衆生があつても、一人の之が救護の道を講ずるものあるをさかない、「於諸衆生、視若自己」とは大乗教理の眞髓である、如此美麗なる一視同仁の教理あるにも係らず、會て之を世間的に解釋したものなく、佛教は日に盛んに信仰月に廣まつて、而して社會改良の資たるべきの業、一も佛者の手に出づる

といふこともなく、佛教は遂に非社會的宗教となり終れるに至つて居る。

現今佛教者中、慈善事業を説き、社會改良の手始めを試みんと欲するものもないではない、けれども、是れ實に基督教者活動の反應に出たものであつて、會て佛教仁慈の大道より割出し、自然慈愛の涙より出たものではない、要するに、自己聖典の講究が没歴史的、非學術的であつて、教理の解釋に學術を應用するの道を知らず、世の實用に應ずべき解釋の方法に暗きに依るのである、故に僧侶は、日に世と遠ざかり、而かも世と共に宗教に於ける無智を表白するに至る、自ら、宗教を研究するの資格を備へず、又人を宗教に導く地位がない、之を耶蘇教に比してその差異果して幾何であるか、神學講究の機關、各大學に備はり、新舊兩約書の原語及その譯語（ヘブライ語、希臘語、アルメニヤ語、シリヤ語、羅旬語）の研學、日に盛んで、その解釋、翻譯の斬新なる、誠に燦然として見るべきものがある、各派聯合の「聖書改譯會」は、頑陋守舊の羅馬教より破格急進のユニテリアン教會に至るまで、悉く委員を出して、翻譯の改

良に従事し、神意の發揮に餘念がない、而してこの學術的精神は獨り自教の聖典に止まらず、波羅門教、佛教、回教、儒教等、他教の聖書に於ても亦發揚せられ、今や、印度古學の中心が印度に在らずして、却て歐洲に存すると同じく、佛教聖典研究の中心も、亦實に歐洲に樹立せられんとしてゐる、南方佛教の教典は龍動に於て發行し、北方大乘佛教の經論は、露國大學に於て出版せられてゐる、我國は幸にも、宋、元、明、清、韓の諸大藏經を有せるにも係らず、曾て學術的講究を試むるの念なく、寶を懷いて空しく殉死せんとしてゐる、我國の佛教は實に學術的無能力を表白せるものであると謂ふべしである。

如是我國の宗教は、政治的にも無能力で、國家教育にも無能力である、倫理的、社會的にも無能力であつて、亦學術的にも無能力である、然れども、是れ根本的に無能力であるのでなくつて、一たび革新の實行を見るならば、能力回復の望みがないわけではないのである、されども宗教社會の腐敗は、その度意外に甚しく、その根柢に

達してゐるの趣きであるから、容易にその革新の行はるべからざるは勿論之が防廢の鹽たるも亦實に至難なるを覺ゆるのである、この時に於て殊に旗色鮮明なる一大勢力の存在を望むのは、亦自然の勢である、政治に關せず、教派に係らず、一意宗教の前途を思ひ、國民精神界の將來を支配せんとする一團清徒の必要は、實にこの時に在るのである。

基督教清徒は、過去に於て一大勢力であつた、現今に於ても、尙遺風を英米の良家に留め、その潜勢力たるを失はない、佛教清徒同志の精神、若し之に私淑せるものとするれば、我精神界の闇黒に對し、茲に一道の光明を認めたるものとして祝賀せざるを得ざるわけである。

佛教清徒同志會の綱領はその旗色鮮明の點に於て、世の注意を惹くであらうし、その條目僅に六種に過ぎないが、少くとも左の諸項を含有せるものと謂ふべきである。

- 一、我國新宗教の問題は、佛教を以て解釋し得べしと信じたること、

- 二、佛教は個人的、社會的改善に於て能力あることを認めたること、
- 三、佛教の歴史的根柢を以て、佛教解釋の方法と認めたること、
- 四、宗教の比較講究を以て、佛教者の知識發達に必要な方法とせること、
- 五、迷信は眞佛教を損し、眞佛教は迷信を含有せざることを認定せること、
- 六、今日の宗教的制度、組織、禮拜の儀式は、佛教に根本的大關係なきことを認めたること、

七、政治的保護干渉は眞佛教の發揚に害あることを認めたること、
 是れ佛教の本義は單に寂滅主義にあるものとし、隱遁獨修に適するも非社會的宗教なりと云ふ世の論法に向ひて、正反對の主義を宣言せるものである、即、佛教をして世界的、現世的、精神的の方向に進ましめ、社會人格の完全統一をなすの地位に進ましめんとするものである、その所謂新佛教を以て世界的宗教たらしむるをその最後の目的とするものなるは明かである、將來の宗教の五資格として、「宗教研究」の著者が

望みたる條目、即、科學的、道德的、哲學的、世界的、理想的の各條の大部分を満足せしめんと希望せらるゝやうである。
 今や、向内向外、俱に宗教を談ずるに足るべき人なきに、佛教清徒諸氏はかゝる廣大なる希望を以て世に顯れ、最完全に近き綱領を世に公にした、之に對し一二の疑問を發しても、又無用でないこと、信ずるのである、疑問の第一として予が同志諸氏に聞かんとするは、その所謂

新佛教

とは果して如何なるものを意味するか、是れ、即、同志の以て眞の佛教と信ずる所、信仰體托の根本主義と認むる所のものであらうと思ふけれども、未その内容の如何を聞かないから世の論者をしてその果して佛教たるや否やをも疑はしむるに至る訣である、同志は佛教所示の「宇宙に遍滿せる唯一實在」を信ずると答へたる外、又その如何の理由を告げないのであるが、而れども吾人は幸ひにして消極的にその舊佛教に對する

の宣言を聞くを得た、即、舊佛教の大部分は習慣的、形式的、迷信的、厭世的、空想的であつて、新佛教の主張者は當然之に反對することを公言してゐる、夫れ舊佛教の精髓を打て一丸となし、新佛教の組織となす、是れ疑ひもなく、世の希望する所だと思ふに諸氏も亦之を思念せるものであらうと思ふ、併し従つて起るべき疑問は、その所謂精髓とは如何なるものを指すか、撰擇者の地位、知識に依つて、その見て以て眞髓となすもの、異なるべきことは無論である、その標準若し全く哲學的に在るならば、是れ佛教より宗教分子を脱離せるものであつて、長へに宗教的光明を占有するを得ぬのであらう、又その方針全く歴史的に存すとすれば、教理の成立明白はこれを得られやうとも、その範圍時に或は狭小に過ぎ、教理運用の自在を缺くに至ることがあらう、故に眞正の學術的講究は、巧みに歴史的、哲學的の調和を圖り、以て新宗教組織の完成を期するに在る、歴史的方面に於ては、釋尊なる一大人格を中心としてこの源頭より流出せる高尚の教説、美麗の眞理と稱すべきものを集め、その開教の精神、そ

の社會改善の方針、その救世の本旨を領會し、之に對し適當の解釋を施し、その運用の完全を企圖すべきである、而して哲學的方面に於ては、釋尊自説の教義に含有せる哲理の萌芽を探求し、各條に就き遠く遡りてその系統を正し、降つてその發達の全版圖を歩測し、惹いて各國特有の發展をも講究しなければならぬのである、その歴史的な研究は、必ず、根本的歴史研究たるを要する、その方法は全く學理的たるを要するのである、且哲理の萌芽を捕へ來たりて、その變化發展を調査しても、亦是れ一の史的講究であつて、歩々その根本教義を忘れず、各時期に於ける發達、各地方に於ける發達、各地方に於ける變化を測度するに於ても、佛説の教理と弟子説の教理とを混交せず、現存のものと新出のものとを甄別し、本有今無、今有本無の諸説、悉皆眼底に徹照するに至らしめなければならぬ、若し夫れ各國特殊の發達の如きは、新加の原素を含蓄し、風土の感化を受けしものが多いのであるから、之が講究に於ても、一法を以て律すべきでない、予は佛教清徒諸氏が是等の講究法を過らず、完全の知識を得て、

適當の組織に依り「新佛教」の何ものたるを世に公にせんことの遠きに非るを希望して止まない次第である、予が疑問の第二として次に提出せんとするは、その所謂

迷信

の範圍である、日月の崇拜、富貴の祈願が迷信として排斥せられたのは、之をその宣言に於て見るを得た、されどその迷信範圍は、何の邊まで及ぼすべきやの問題は、意外にその難問題たるを覺ゆる、宗教の迷信を含有するのは、何れの國でも免れない所であるが、殊に印度の諸宗教に至りては、迷信を以て充滿して居ると云ふも過言でない、佛教は比較的迷信を混合してないやうであるが、年月の遷移に伴ひ、大に、迷信を加味するに至つた、一たび釋尊の根本教義を以て律するときには、現今見て以て正統の教理としてをるものも、亦一の迷信に過ぎないかも知れない、少くとも一の神話的宗教たるを免れないのである、彼の根本佛教と雖、解釋の如何に依りては一種の神話説と見得られないこともない、佛のセナール氏、蘭のケルン氏は曾てこの見地

を以て佛教を講究し、遂に釋尊を以て實存的人物に非ざるものとなし、恒河の流域に於ける一新文明を形成せし大聖人の一生は、悉く一種の太陽神話として葬られんとするに至つた、茲に於て獨のオルデルベルヒ氏厥起してその妄を辨じ、該博の考證、史蹟の參照に依り、釋尊なる歴史的人物を畫き出し、その圍邊に集注せる直弟の性格をも明示し得るに至つた、されど、その神話的要素を全排せんとせし結果、諸種の論點に於て消極的解釋を試みざるべからざるに至つた、この兩邊の中間を歩み、「佛教文學は歴史的要素と神話的要素とを含有せるもの」として兩説の依て出でし兩極の原本を比照參酌し、完全なる佛教史の研究を企圖したのは、萊府大學のヅキンデイシユ氏である、氏は佛教がその開教當時に於て、已に多少の神話的要素を含んでをつたものであるといふことを信じて、その講究を始めたのである、是れ實に佛教史の講究としては、最も穩當にして、最も完全なる方法であるけれども、新宗教組織の上に應用せんとするには、純歴史的講究を以て、正當なる方法なりとすべきである、思ふにその研

究愈進むに至らば、諸氏が大膽なる斷案を迷信解釋の上に與へ、迷信の範圍を明示するの目あるを期し得るであらう。

予は尙進んで綱領の第二、第五に對し、粗大なる疑問を試みやうと思つたが退いて考へると、佛教清徒諸氏は、今尙新佛教組織の途上に在るもので、一意聖典の講究に餘念なきの地に在るものである、その實行的方面に向つて疑問を試むるのは、今に於てはその早計たるを免れない、予は茲に諸氏が綱領中に於て、宗教の比較講究を主唱せるに對し、一言の祝辭を述べてこの篇を終らんと思ふ、抑比較講究は眞正學術の本領であつて、自他の地位を知悉し、その利害を領會せしむるに於て最必要なるものである、第十九世紀學術の進歩は一に比較講究に基くものであつて學者の最も意を注ぐべき所である、而してその功果宗教の比較講究に於て實に宏大なものである、故に基督教徒は早く已に之を用ひ、自己の知識進歩の一方方法とした、一たび他の宗教を講究するや、その曾て與へたる宗教の定義、範圍も、從つて變更せざるを得ざるに至つ

た、清徒諸氏若しこの精神を以て、進んで宇内の各宗教を討究し、遂にヘーゲルは何故に「佛教を自攝觀念の宗教としたか、ハルトマンは何故に絶對的空想教としたか、近世比較宗教の大家たるチーレ博士は何故に、佛教を倫理的宗教とし、世界的統一宗教とし、基督教、回教と並舉したか、唯物論者ハックスレー氏は、何故に近世唯心論の大家たるバークレーの哲學よりも、一屬深奥の地に達せりとして、佛教哲學の高妙を嘆稱したか、印度思想の鼓吹者たるドイセン氏は、何故、その哲學の根本思想を印度に取つたか、將シヨッペンハウエルは何故に、左の言を發したか

若し、予が哲學の結果を眞理の標準と見ば、予は佛教を以て他の哲學の最上位に置かざるべからず、予の哲學が世界大多數の人の信仰せる宗教と、かくまで一致せるは予に取りては、一大満足とせざるを得ず、予が殊に歡喜に耐へざるは、予は予が哲學組織に於ては、毫も佛教の感化を受けたることなく、全く獨立の構成をなし、偶佛教と一致せるものなるを以てなり。

佛教は何故に如是世の賞讃を博したるか、何故に如此異様の見解を施したるかを知らば、新宗教の組織、眞佛教の成立、亦至難の業に非ざるべきである、殊に予が諸氏に望む所は、その宗教の討究に於て、その經論の研鑽に於て、勇往獨歩、世論の如何に顧慮せず、學說の可否に心を奪れざるの一事である、學者の論議は參考として最妙味を覺ゆるも、宗教者の取つて以て實用に試みんには最不適當なるものゝ多きを忘れてはならない、宗教の論議、聖典の論究、一たびその方向を誤らば、又如何ともすべからざるに至る、願くは他の爲に迷はざるゝことなく、自己を知るものは自己なることを信ぜられんことを。

第五章 宗教一轉の時機

マクス、ミユラー博士は常に人に教へて曰つた、社會百般の物、皆改善を待て發達する、宗教は殊に然りである、佛若し今日に再現し玉は、必や自教改善の主唱者であら

うと、是れ實に千古の格言であつて、宗教家が常に仰いで以て警語と爲すべきものである。

今より二千五百年の前に方りて、佛出世の當時を追想すると、印度川の流域に於ける波羅門文明は、遂にその光明を失ひ、恒河の流域に於ける佛教文明の氣運漸く開けんとしてゐた、是れ實に印度に於ける精神的な一大發展の時機なりと謂ふべきである、從來信仰の源泉と仰ぎたる四吠陀の天啓は去りてその地を三菩提の自證に譲り、波羅門教權の獨占は、轉じて僧伽の教權均霑の主義と化し、四姓差別の社會制度は、遂に種族權平等の大道に進み、祭祀犠牲の神聖は、佛の前には自利暗劣の私法と叱せられ、信仰萬能の大義に依り、宗教は貴族的より平民的に進み、保守的より進取的に趣き、儀式的より遂に精神的な一大發展に向ふに至つた、是れ佛の社會改善の精神が、その光明を當時の社會に發したものである。

佛教文明の結果として、恒河を以て中心とせる流域一帶の地方に於ては、上は王公貴

族より、下は下賤の卑族に至る迄、その恩化を被らざるものなく、引いて全印度の各地方に及び、宗教的幸福なる一國民を現出するに至つた、佛は實に宗教改善の主義を實行して、その光明を社會改善の上に發揚したものである。

然るに、佛教が他の國に移る時に於ては、その國に於ける宗教の程度に相應するの必要があるから、時に反動變化の實がないでもない、故に當時宗教的幼稚なりし東洋の諸國に於ては、佛教は概ね貴族的傾向を示し、儀式的態度を養成し、祭祀犠牲の舊例を再現し、教權獨占の故智を復演せんとするに至つた、我日本に於ても實にこの宗教病的傾向を示したことは事實であつて、念佛門の唱導、淨土教の開展は、慥に上示の病的状態を救はんとて顯れたるものである、宗教の教理的方面に於ては、數度の改善を経て、稍満足の域に進んだけれども、その社會的方面に於ける改善は未曾てその功を奏しない、この點に於て宗教の任務を盡せるの宗派は、殆皆無なりと謂ふべきである、我が宗教界、我日本の社會に於て、今日今時最必要とする所は、宗教者がそ

の社會的任務を盡し、宗教の社會的發達を促し、その慈善主義を社會の實際問題に應用し、その同愛主義を社會階級の最下層にまで普及せしめ、慈悲平等の旗色を明かにし、「佛心者大慈悲是」の主義を説き「視衆生若自己」の大道を啓示せんことを計るに在り、是れ即、社會改善主義を實行し、自然の結果として宗教改善を計るものであつて、佛が宗教改善主義を實行し、必然の結果として社會改善を遂行せられたのと正反對の方法であつて、而かもその所歸は一致せるものである、精神的活動の二而不二なる所以蓋此に在りて存すと謂ふべきである。

宗教も亦果して改善を待て發達するものとせば、今日に於ける改善は唯社會的方面に向つて進捗するに在る、而して社會各層の人民中、最多く宗教的訓化を要するものは、最遠く宗教的恩光を離れたるものである、知つて而して罪を犯すもの、知らずして而して罪を蒙るもの、止むなく罪に陥るもの、罪惡を以てその生命を支ふるもの、是れ皆罪戾に腐蝕せられたる人類である、最遠く宗教訓化を去れるの人である、是れ所

謂社會の病的人民である、而して是等の病態よりかの病民を救出すのは、實に精神的訓化を司る宗教家其人の任務である、彼等をして再び健全の常態に復せしめ、無辜の良民たらしむるには、宗教の社會的活動に依らなければならぬ、而して社會的活動なきの宗教は、宗教にして宗教ではない、病態の人民に對して、拔苦の實を擧ぐる能はざるの宗教は、死宗教である、社會的生命なきの宗教である。

監獄教誨は實に宗教の死活を判する一大試金石である、宗教の精神的拔苦は、實に罪囚感化の事業に於て發揮せられる、監獄教誨は、社會訓化の事業中、最名譽ある最光榮ある社會的大事業である、この事業に次いで、肉体的拔苦の宗教的事業は、貧民院、施療院、孤兒院、癲病院、感化院等に於て實行せらるべきである、之を總稱して宗教的社會的の事業と云ふのである「宗教が國家の治化を補ひ、人道の大義を保護し、地に平和を布き、人に好意を與ふるの本分を盡す所以亦實に此に在る、宗教の死活も亦一に此にある、宗教一轉の機も亦實に此にある。

教誨師諸君の双肩能くこの大任を荷ひ得るかどうか。

第六章 社會改善の精神

救世軍の別動隊が遊里の真中に立つて、廢娼の演説をした、その時は人その無謀に驚いた、間もなく二六社の運動が起つた、すると松井部長が出張し、自由廢業の承認を與へた、人々皆意外に感じたれど、その行爲が遂に規則となりて發布せられし時は官廳の意志も明白になり、自由廢業のみでなく、その自由生活の範圍までも廣められた、樓主の狼狽はさもあるべき處だが、よく事理を辨へて見れば、人の意志の自由を束縛し、その束縛を自分の營業の種と心得るは不都合千萬だ、それはともかくも、この救世軍、この二六社中、この官廳の規則、その精神を尋ねて見れば實に喜びに耐へぬ、なぜなれば、これが即ち社會改善の精神が上下官民の間に行亘りたる證據であるからだ、之を十五六年前我々が禁酒、禁煙を唱へ、廢娼を唱へた時と比較すると

えらい相違だ、その時には識者には耶蘇教かぶれとか云つて擯斥され、おまけに岐阜和歌山と續々公娼が許された、世はまだ闇黒だ。

施政者も追々と社會改良の必要を自覺した、殊に社會病的人種を感化訓育して、良民に復歸せしむるに正當の方法を講ずるは政府の義務なることを自覺した、そこで「警察監獄學校」の設けも出來た、之は大なる社會的事業である、殊に喜ぶべきは、病的人民を訓化するには、倫理的宗教的の施設を眞實に必要と認められたことである、故に警監學校には宗教の代表者を入學せしめた、すると即座に功績が顯はれて、東西兩本願寺の「監獄教誨師養成所」を生ずるに至つた、この方面に於ける政府の爲せし事業中の最大美事だ、留岡君の教育事業、原胤昭君の出獄人訓育事業は、無論上下に知れ亘りたる大事業だ。

社會の公德も高まらず、社會的制裁もまだ薄弱だ、當局者は風俗の改良に力を與ふることに決した、行政執行法も發布せられた、併し餘り實行は見えない、ゆすり征伐の方法も講ぜられた、娼妓の年齢も限られた、自由の廢業も許さるゝに至つたのは、社會の狀態を改善するに大なる力のあるもので、上下の精神が社會改良に向ひ居るから出來たのだ、是れは近年萬國監獄會議や、病毒豫防會議や、色々の會議に人を出したお蔭だらう、とにかく喜ぶべき現象である、衆議院自身の内部は随分改良すべき處もあるだらうが、その學童の禁煙を主張したのは、善惡の評はあるが、その精神は最も好みすべきものだ、文部大臣が寄席の話に注意したのも、遞信大臣が切手貯金を設けて學童貯金と貧民の蓄財に便にせしも同精神で、至極結構だ、その外又宴會改良だの音樂改良だの、結構な事が起つた、結構だからと云つて、かゝる瑣事に満足したら、社會の改良は出來ないが、只喜ぶのは、上一一般この意向になつたと云ふ一事である、眞成の社會改良と云ふものは、具眼の經世家と、政府と、教育家と宗教者とが一致して、初めて成功するのである、宗教者が最大部分を働くべきに、意外の無能力であるのは悲しいことだ、如此したのは、大半政府の責任である。

政府も今後は宗教を可成優遇して、今までのやうにこれを邪魔者の様にせぬことが肝要である、これを冷遇して敵とすると、これを優遇して用ゆべき能力ある宗教を用ゆべき場所を利用するは、策の最も得たるものである、當今政府の義務として行ふべきは、能力ある宗派に社會改良の精神を吹込むにあると思ふ、今では宗教者の眼中には學者もなければ、富豪もない、貴族も、豪傑も何とも思はぬ、唯信切にして敵意なき政府の忠告のみは、眞面目に聴く、又喜んで之を實行する、この方面の能力を發達せしむるは、その責唯政府にある、政府の外爲し得るものはない、政府は意志薄弱なる日本佛教には實に神格的權力がある。

陸海軍的孤兒院

孤兒を養育するに最もむづかしいのは、常人の如くに感じ、常人の如くに生活せしむるに在る、孤兒は凡てその思想のひがむもので、之を正當に養育し、その資性の發達を充分ならしむるは、その愛親に異らざる師父あるを要するのであるが、之を得ることが

むづかしい、偶之を得るも一朝その人を失へば遂に如何ともする能はざるに至ることが往々ある、是等總べての方面で、最も適し最も好結果ありと思はるゝは、孤兒院を海陸軍的組織にするに在る、これは小兒の時より悉く軍隊組織にして養育する即女子は多く看護婦に仕立て、男子は陸海兵、樂隊、其他の各部門として教育し、生れながらにして軍隊生活に馴れしむる仕組だ、その間無論各種の職業を教へ、自活の道を教ゆることは常の如くする、かくて二十一歳となると、先づ人々の義務として、志願兵とならしめ、女子は、赤十字その他の病院の看護婦とならしむる仕組だ、しかし男女とも獨立の生活の出来るまでは何時までも見届けること、せねばならぬ、この組織の利する所は、一は個々の孤兒をして一齊の教訓を受けしめ、そのひがみ根性を生ぜしめざるに有効なると同時に、又時々日曜等に京内を行軍し、樂隊、看護婦をも完備して、晴れの場所に出でしめ、人々の慈善心を喚起するに尤利益である、その殊勝に、完全に軍樂を奏し、軍律に服し、一致の舉動あるを見れば、多くの慈善の涙を誘生す

る方便となるものである、殊にその海軍にしたものは、我國海軍思想の缺乏を補ふの道ともなれば、初めは庭内に大船を造り其中に眠食せしめ、漸次海に出て實習せしむる、これに對する反對には、我國軍事思想の盛んなるに、何ぞかくしてまで養成するの必要あるやと云ふ人もあらう、されど孤兒院を陸海軍組織となすは、慥に一大良法たるを失はない。

普通國士の資格

茲に國士と名くるは、一國普通の紳士を指すものである、この日本の紳士として他國に恥ぢざる人士の資格として、必ず所有すべき知識は何であるといふに、或は中學程度の知識であるとか、隨分世の議論もあるであらう、しかし予が今日本國士の品位として他に恥ぢざる知識を所有することを必要と認むるは此の如きものではない、凡そ大學專攻の學科を終へしものも、中學程度にて終りしものも、各種の専門の學力を有せるものも、凡そ日本國の紳士として一般の交際を爲し得るものは、必ず左の三種の

知識を有すべきを主張せんとするものである、それは

第一 日本歴史の知識

第二 日本文學史の知識

第三 日本地理の知識

で、餘り掛け離れたる知識ではない、今後の青年はその大概は所有せる筈であるが、今日の紳士に對して大なる注意を請はなければならぬ、日本の華族の子弟なり、富豪の青年、その他、凡そ通常人の風上に立ち、品位の標準ともなるべき紳士に就て、一言歴史の話を試みれば、直にその空腦なることを發見する、殊に文學史に至りては誰でも分らない、無論文學史と云へばとて、深奥專攻の知識を望む譯でない、日本には如何なる文學が存して、如何なる價值のものである、戯曲は如何なる資格のもので、文學は何れの時に頽廢したかと云ふが如き大畧の知識にても宜ろし、畢竟一度或人の説を聞けば、明白に得らるべき程度の知識が多く紳士には皆無である、之れに附屬し

て日本美術の價值などは、少しは心得て置かねばならぬ、世界の美術史上、現下、唯二大動力を認め得る、その一は希臘美術であつて、紀元前の太古に起因し、印度を風化し、波斯を隨がへ、歐洲全土を席捲して、新文明の要素となつた、一は日本美術である、日本美術には無論印度式も、希臘式も、支那風も、朝鮮風もある、しかし今日の日本美術は純然たる日本風であつて、以上の各式、各風の長所を採り、應用門に入りて之れを日本化し終つたものである、今日歐米の應用美術は又更に日本化せんとする勢がある、故に希臘美術は主として純正美術として世に迎へられ、日本美術は却つて應用美術にその美を發揮せんとして居る、總體、古今の美術のこと、文學のこと、美文のことに就ても、世の紳士は少しく學者の説をも聞いて、一と通り梗概を心得居なくては、日本紳士として、即ち國士の資格あるものとして、歐洲人の前に紹介するに足らないものである、この點に於ては實に感慨に耐へない有様である、又これよりも更に甚しきものがある、日本紳士として日本國の地理に暗きことである、黒潮と

は如何なる性質のものか何故に黒潮はかく暖波を我々に送るか、また日本各地の緯度に關する知識より、氣象風位の大略、各地風俗、言語宗教の大要は心得るべきは勿論なるも、闇さも闇し、甚しきは東西南北の區別もなき人がある、これに附屬して日本人種に關する要項、アイヌ族の性質、琉球臺灣の民種、内地各地方の特質等も大略心得居らねばならぬ、堂々たる紳士が實に中學程度にも劣る有様がないでもない、唯少々の注意能く之を矯正し得るものなれば、國士の資格を有せんと欲せば、正しく自身の修養を要するのである。

吾人一度歐洲人に接すれば、諸種の問題が口を衝て起る、日本宗教のことを問はるれば神、佛、耶の三教の大略は答へ得るも、一步を進まば知らずと答へ、美術を問はるゝも、知らずと答へ、歴史を問はるゝも、年代を聞かると時は、一言の答も出來ず、地理に於ては却てその淺知を發見せられ、殊に文學のことに及ばざれば、われ文學者に非らずと答ふるの外、言の返すべきなきに至る、憐むべきの極と云はねばならぬ、現今

の紳士は殊に此點に注意し、國士の三知識の必要を自覺せねば、日本紳士は到底歐米人と同等の品位は得られない、殊に陸海軍の士官諸氏に望むは、今少し其胸宇を開きて知識の範圍を擴充するの一事である、戰勝國の士官として、世は氏等を歓迎せるに、無風流一邊の紳士にして文學の趣味を解せず、美術の知識なく、歴史に闇き時は、その軍隊に於ける優勝は、却て交際場裡の劣敗に歸せんことを恐るゝのである。

音樂の普及

日本にては西洋風の音樂が發達しない、世に遍く行はれない、これには色々の原因もあるが、普及の方法を講ぜないのが主因である、第一音樂の効用は皆無分らぬ、從てこれを普及するの道を講ずることをしない、音樂學校は花の上野に隱居して功能を世に示さぬ計ではない、その音樂會も滅多に公開せぬ、儀式と義務とで傍聽人はあるが、傍聽者の範圍は今も昔も變更せぬ、當事者も音樂學生も、音樂に堪能なるものも、皆その自己の主義責任即、音樂普及に對する任務を自覺して居ない、音樂感化の廣まる

のは、民生の一大幸福で、社會改良の一端といふことを知らぬ、花の上野は帝都人士の足の向ふ所、即、音樂普及には最も好地位を占めたるものである、然るに之を利用し、之を應用することを知らぬ、又音樂が必ず歌謡と共に發達すると云ふことも充分に了得が出来て居らぬと見える、此點に於ては少々の施設、能く宏大の進歩を促すといふことを知らねばならぬ、全國小學校に音樂を用ひ、耶穌教會に讚美歌あり、その上に音樂學校の存するあれば、日本の音樂は之に依りて發達すると思つたが、これは一の妄想で、中々そうは行かない、明治音樂會の如き、漸く日本固有の音樂の勢力を借りて人氣を引くを得るのみ、實に憐れなる次第である、市内樂隊の不完成も驚くべきものである、音樂の方面に於ても亦一大改革を要する、これには色々考案もあつたが、今に行はれぬ、差當り音樂學校長の如き人を得たりと信ずれば、充分に相談して音樂普及を計らねばならないことと思ふ、人民中に音樂の必要なるは英國トインビーホール大學分殖館等に徴しても、救世軍の經營に徴しても分る、殊に國民の愛國思想、

自負心、和合性等音樂に依らねば發達の棍が取れない、養成の道を得ない、この外御婚儀を祝して献上すると云ふ美術館のと、今回文部省で建てる美術展覽會のこと、國語調査會に就ても、小言を云ひたいが、これは又他日に譲ること、しやう。

第七章 日本の家族本位と歐洲の個人本位

日本が世界の外交と歐米の人心に與へたる變化

世界に類無き兵力と民力との合一を得て、列國環視の間に未曾有の名聲を博した日露戰役は、列國の外交と世界の人心に異常の變化を與へた、佛蘭西が獨逸と英吉利とを牽制する目的で露西亞と同盟して居つたのが、今回の戰爭で權力の中心が破れて、今では何國が歐亞の盟主となるか分らぬ、佛英兩國の親和となり、獨露兩國の近接となり、美望するもの、反目するもの、虚喝するもの、畏縮するもの、各々の志望を逞ふせんとして世は再び暗闘時代に返つた、今は何の國の兵力、民力を調べて見てもその統一

の働きに於ては、日本の尤も恐るべきを覺つた、勿論日英同盟の力には抗することは出來ない、少くとも今後百年何國でも獨力で日本にかゝつて來やうと云ふ國は先づ無からう、東洋流の言語で云つたら、日本は先づ萬代不易の國に成つたとも、國家を泰山の安きに置いたとも謂ふ可きである。

英國に於いても戰爭の初め日本の公債が一千圓のものが七百圓位より昇つたことが無かつたのが、今は常に其以上に上つて居る、日英同盟も戰爭の前は英國の或る一部はその効力を疑つて居つたに拘はらず、今は日英同盟で無くては到底世界の中心に横行潤歩をする事は出來ぬと云ふ有様で、殊更に同盟を擴張して行くやうになつた、又新聞雜誌界でも以前は決して日本の味方斗りでは無く、随分露西亞の味方のものもあつたが、戰爭の進むと同時に皆一變して日本最負になつたのみならず、一般日本の風を學ぶやうなことに成つて、先づ軍人の教育を學ばねば成らぬと云ふので、毎年五人の士官を遣はして日本の軍隊に就て實地を研究する、又一般の國民教育に就ても調べな

ければ成らぬと云ふので、教育家を招聘して講義を開くことになり、澤柳普通學務局長後には菊池男爵が行つた、赤十字事業でも、英國皇室の恩召でマツコール嬢が視察に來て我國の組織を學ぼうと云ふ有様である。

ヘーグの平和會議にも、戦争前に日本は三等國であつたのが一躍一等國となつた、基督敎國が野蠻敎の日本を征服す可しと妄信して居つたものが、ガラリと反對の結果を生じた、彼等の思想は根柢より變化されたのである。

日本人の勝つた原因が解らぬ

強大の露國に向つて海に陸に敗戦の跡を一回も残さず、戦勝の光榮を擔つた日本人は、實に不思議な人種である、日本人は何故勝つたか、どうしても解らぬ、これ今日歐米人普通の大疑問で、亞米利加では日本人は少食な人種であるから、この強いのも少食から來たかも知れぬと云つて、一部の軍隊に少食主義を試験して見たやうな滑稽もある、ロンドンではワザ／＼在留の日本人二百有餘を一人一人訪問して、日本人を観察した

者がある、彼等の云ふに、どうも日本人は不思議な人種だ、一人々々調べて見ると格別えらい人も見あたらない、個人と個人とを比べて見ると日本人は歐米人に比して特に優等な人種とはどうも思へない、然るに日本人全體が一所に成つた時には歐米人には出來ない事をやる、これが西洋人には不思議でたまらない、殊に此度の戦争の結果は何う云ふもので斯うなつたであらうかと云ふことで、種々に研究の歩を進めて居る、我々は自身のことでも何うして斯う成つたか知らずに済ますことが多いが、彼等は中々爾うで無い、何か一つの現象が起ると、此原因と結果とは十分に之を調べずには置かないのである。

戦争に就ての彼等の研究題目となる疑問は、

君國の爲めに身を致すに就て、實に美はしき至軍一致の精神と軍紀の嚴肅とは、何

の源因から來たか。

従來の戦争に類無き、特に南阿の戦争などに比べて軍隊衛生の事業が驚く可き好成

績を擧げたのは何故であるか。

死を見ると歸へるが如く、歐米人の目よりは寧ろ狂と見ゆる迄に進んで犠牲となる強烈なる愛國心の行動は、何に依て養はれたか、偵察任務の殆んど各國に類無き程精確なりし原因は何か。

秘密の嚴守 即、軍略の漏洩を防ぐことがかく完全なりし所以は何か、最も各國を驚かしたる後方勤務、即、兵糧彈藥の輸送、傷病兵の送還の敏活と完備とが特に勝れたる原因は何であるか。

すべて一人一人では弱き日本人が澤山集つて共同的にやれば歐米人よりも強き理由は何か。

此他日本人は西洋の學術を學んで器械を輸入する、知識を世界に求め彼れを師とすると同時に、多くの點に於て日本人は西洋人のやつたよりも一步上に進んで居る、彈藥の下瀬火藥、銃の村田銃、砲の有坂式、無線電話の木村式、是等も皆彼等の驚いた所で

ある。

赤十字社の事業ももとは西洋から始まつたものであるが、今では日本の組織が遙に完全して居る、戦時に於ける國民一般の事業の上にも、國民の後援、遺族の保護、出征軍人の慰藉、敵捕虜の取扱、俘虜情報機關の整備、又は公債應募等の事柄に至る迄悉く自分の利益を第二にして國家の爲めに兵力と民力とを一致せしむることなど世界の人から見れば、理想の軍隊、理想の國民と思はれたのである、之は何うして斯う云ふ工合に進んだのであらうか、此結果を見た上はその原因を探らなくてはならぬ、是れは四十年の間に行はれた陸海軍の教育と、又一般の國民教育と此二つが原因には違ひ無い、併しこれは近い處の原因であつて、更に淵源するところの大なる理由が無ければならぬ、これが歐米人の尤知らんと欲するところで、我國民は素より知らねばならぬ今日の重要な研究問題である。

家族本位と個人本位

日本人を一人／＼調べて見ると立派でないのに、集つて一所に成ると非常に結果を顯はすと云ふのは、大なる原因がある、それは個人主義と家族主義との別に依て起る者で、即、個人を本位とすると、家族を本位とするとの相違から起る、個人主義とは何う云ふのであるかと云ふと、自分一己を本位として行動する、自分の利益を先とし自分の思ふ所を爲し他を顧まない、たとひ他を顧ることがあつてもつまり自己の爲にすると云ふのが即、個人主義で、親は子を育てるのが義務であるが、子は親にお禮をせんけはならぬ義務は無い、即、自分の産んだ者を自分が育てるのは當然である、其代り成年に成つたら子は親を養はんでも自分自身を養はんければ成らぬ、夫れ故丁年に成ると甚しい處では親の家に居るのにも下宿料を拂つて居る、爾う云ふ風であるから兄は百萬の金持でも弟が乞食をして居つても救助はしない、彼は自分で怠つて乞食をして居るのであるから助ける理田は無いと云ふ、畢竟自分の技倆と學問とで得た結果は人に與へることはしない、實に利己主義の弊害は恐ろしいものである、親が若し金があつ

たら死ぬ時分けてやる、夫れ故金があればその金か欲しいから折々來るがそうでなければモウ家を持つと自然に足が遠くなる、つまり西洋は金が命で、自利が中心である、又子の方でも親のすねをかちつてやつて行く考はない、夫れで自分が食べる丈けの收入が取れるやうに成らなければ決して婚禮もせぬ、夫故或非常の金満家に向つて「貴君の御息は婚禮の約束があるさうですが何時頃に結婚なさいます」と問ふと、「否まだ中々婚禮はしないでしよう月給が二人暮しには十分でありますまいから」と答へる、而う云ふ工合に個人を主位として個々別々にやつて居る、此の主義からして英國人でも同情を以て日英同盟に賛成し乍ら露國に船を賣り、食料を送る様な行動もやる、軍隊に統一の六ヶ敷のも、軍機の漏洩するのも、皆個人主義の餘弊から來るのである、所が日本の家族主義では家族に重きを置いて一族が相扶けてやつて行く、個人を軽くして家族を重くする、親は子に子は親に、弟は兄に兄は弟にと相救ひ相助けて家門の名譽と繁榮とを希ふ、どちらにも短所もあれば長所もある、此家族が澤山集つて村に成つて村中

相扶けてやつて行く、その弊としては依頼心の生ずることや、脛嚙り主義の流行を來たすのではあるが、その利の點から見れば國の爲に特に日本の爲に我國の今日あるを致した大源因となつて居る、國と云ふも家と云ふも同じ事で、二千年前に神武天皇の大家族が他の群小の家族を率ひて浦安國の基を開き玉ひしも家族主義である、多くの臣家が悉く御門の爲、御家の爲に働く、そして百二十一世の間我々が今日陛下の臣民であると同じく、我々の祖先は皇宗譜代の臣であつた、中々三代相恩どころでない千代相恩と云つても宜いのである、即 他國に比べると君主と臣民との關係が全然違ふのである、支那及び西洋あたりでは君主が悪るかつたり、弱かつたりすると倒してしまつて他の者が代て君主に成るのであるが、我々のはその時の天子には格別の御恩にならぬとしても、自分の先祖は代々お世話に成つた御一門で、切るにも切られぬ關係を有して居るのである、國民は一の先祖を基として今日まで相扶けてやつて居るのである、夫れだから「君は千代ませ八千代ませ」と云ふのは君のお家は幾千代迄も續いて行つ

て貰ふことを希望するのである。

戦勝は家族主義の賜物

夫れで我國と西洋とは全體「家族」と云ふもの、範圍が違つて居る、西洋では夫婦と子丈けて家族を構成して居る、子も成年に達し若しくは婚禮すると別々に成つてしまふ、日本ではそうで無い、祖父でも祖母でも子でも孫でも皆一家族である、家族相扶け相救ふの主義で段々父子の道も發達し孝となり忠となり、愛國心となつたのである、自分の子が殺される時、飛び付いて助きたい心底でも、お家の爲めに嚙ひしはつて耐へた政岡も是が爲めに生じた、參謀本部から電報が來た、良人の戦死と聞て軍人の本分であると思ふ細君も是が爲めに生じた、軍紀の嚴肅も統一も死を恐れぬ愛國心も、偵察任務や後方勤務の完全も皆是が爲めに生じたのである、舉國一致秘密を嚴守し露探の少かつたのも皆この家族主義の賜物である。

西洋婦人などは良人が死んだと聞いては直ぐ氣絶するのが多い、日本人の方は今一步

上に行かねばならぬ、倒れて泣きたい心も家人の爲に取り亂してはならぬ、利己主義から云ふと戦争なんぞに出ても死ぬる程馬鹿氣た事は無いから、命があつての物種と云ふことに成るが、家族主義の方から行くと、私の親が何う思うであらうか、茲で自分が恥をかけば親兄弟一家一門の恥辱だと云ふから、何しても死ななければ成らぬと云ふやうに成て来る、自分が出征の時村中の人が旗を立てて送つて呉れた「玉と碎けて花と散れ」と子供までが歌つて送つた、然るに今に成つて命が惜しいから歸つて來ると云ふ事は何うしても出來ぬ、死すべき時は今である、個人の利益を犠牲に供して國家のために働く、そこで自分一人の爲に家族の全部が生きて來る、一家の面目があがる家門の名譽となる、若し自分が生きて還つた所が何をしに還つたかと云ふやうな事であるから、誠につまらない、前途只死の一字あるのみと、勇んで死ぬるが家族本位より見た個人の本意である。

日本に於ける家族主義の同化力

故に支那の儒教と日本主義とは、全く根本の相違がある、支那は「君君たらざんば臣臣たらざ」で天子が天子の職務を盡さなければ我々は服従の義務は無いと云ふのである、若し、桀とか紂とか云ふ悪い君主が居つたら倒してしまつて好い人を立つるが宜いと云ふ、所が日本では爾うで無い、どんな事が君主の身の上にあつても我々は切るに切られぬ千歳離る可からざる關係である、夫れだから他國が若しも日本のやうに成らうと思つても皇統一系の事實のない以上は逆も出來る事ではない、この儒教も日本へ來ては全く日本式に同化した。

佛教も耶穌教も皆個人主義であるが、佛教も根本に於て日本の主義と違ふに拘らず、兩部神道に初り眞宗に至つて全く日本化して仕舞つた、日本では自分の父祖が死る、其人が今迄私を可愛がつて呉れた人である父母であると云ふので尊敬の意を表する爲に拜ひ、家族主義の日本と個人主義の佛教との調和が出來た、印度の佛教と日本の佛教とは全然違て居る、基督教でも始てザビエーが日本へ來てその教を説いた時に澤山

の人が聴きに來た、所が自分の阿母さんが基督を信じて居なかつたので、地獄へ落ちて永久の罰を受けて居るに違ひないと聞いては、そんなら私は基督教には成らぬ、親が信じて居なかつた爲に救はれて居らぬならば私も信じないと云つて改宗しない、夫で彼等も誠に感心して日本の人は實に高尚な罪のない人物である、斯ふ云ふ人は眞に我心を得たる人だと賞めて居る、爾ふ云ふ様に佛教でも儒教でも悉く家族主義の爲に支配されてしまつた、佛教が今日のやうに成るのには何れ文け自分の説を曲げたかも知らぬのである、若しもそれに反して居つたら逆も日本へ擴めることは出来なかつた。

家族主義と個人主義の調和

茲に於て結局我國の將來に於てはこれを如何にすべきかとの問題に逢着する、ラフカディオオ、ハーン(小泉八雲)も日本の特色たる家族主義が今後歐米の文明に接觸した以後は大問題であるとして書いて居る、或點に於ては所謂西洋流個人主義を學ばねば競争が出来ぬ、發達が出来ぬ、今日歐米の文明は全く個人主義の賜物である、さりとて

この家族主義を打破しては日本の國家は實に危険である、今日の青年には已に滔々として個人主義の傾がある、先づ自己を中心として然る後家族を考へ國家を考ふる底の人間が殖へかゝつて居る、自己の小意志を抛つて君國の大意志の爲めに犠牲となるの美風は今の青年には消えんとして居る、今回の如き戦争が若し五十年百年後に有りとなれば、今日の如き好結果は或は六ヶ敷からずやとの懸念がある。

これは經世家の大に考慮すべき大問題である、歐米に於ても、近來特に日本の戰勝後、此點に氣付いて個人主義の弊害を説くものが多くなつた、我國の軍人勅語も教育勅語も西洋人は今迄儒教の寫したとか古代の遺習だとか悪口を云つて居つた所が、今日は

日本の勅語は新約全書の福音を讀むやうな心持がすると賞讃して居る。其他幾多の弊害ある勞働問題、社會問題は歐米にては皆個人主義の餘弊として起つて居る、一のストライキも個人主義を以てすると之を防ぐに中々の困難を感じるが、例へば我國の印刷局の如く一人を雇入ると同時に家族全體を雇入れ、主人病氣の時は妻

子代て行くと言ふが如き制度は、家族主義を労働問題に移したものである、随てストライキの原因を防ぐに大なる功能がある、家族一同相扶け相救ふて一の仕事に従事する時にストライキなどの起ることは實に少い、蘇格蘭土にては克蘭の主義がまだ残つて居る爲め一種家族的の風が有て労働問題の困難が比較的少いと云て居る、此頃英のウキンチエスターには家族主義の自治村を模範的に又は試験的にやつて居るものも出來た、我國今後の政治なり、教育なり、總て此點を考へてやらねばならぬ、個人主義も無くては個人性格の圓滿なる進歩が出來ぬ、自分の腕を磨き大競争に打て出ることは是非歐米人の個人主義に學ばねばならぬ、唯兩方に於ける主義の弊を避けて其利を取り調和することが大切である、自分の理想又は學說としては極端なる個人主義を唱ふるに素より差支へはないが、少くとも今日日本の國體を維持して世界と競争して行くには、是非二千年來の家族主義を土臺としてこれに西洋個人主義の長所を加へて行かねばならぬ、我輩はかくして更に完全なる新日本のナシヨナリヂを形作りたいと

思ふ。
要するに我國の工藝教育に於ては個人主義を取り、精神教育に於ては家族主義を取るのことが正當である、家族主義とは單に家族同住主義ではない、家族主義に基いた國家主義のことである。

第八章 家族主義と個人主義

左は新公論第十一年第五號に掲載せし高楠氏の「日本の家族本位と歐米の個人本位」と題し我國戰勝の原因を家族主義に在りとしたるに對し、板垣伯の反對ありしを以て更に高楠氏が是に答へたるものなり。

板垣伯は維新の功臣で、而も余の尊敬する元老の一人である、然るに斯る名家が余の如き後輩の議論に對して一顧の値ひありとせられたのは謹んで謝する次第である、若し杜撰なる主張の爲め世間を惑すと云ふことになつてはと、この責任の歸することを考へて、更に自分の説を擴張解説して、立論の根據を明白にするの必要があらうと

思ふ、依て茲に板垣伯に對して尊敬を表するが爲に、本誌にその要領を載せることゝした。

家族主義と個人主義との利弊

全體自分の述べた説の要領は、粗々左の通りであつた。

第一 軍人勅語を基とする軍人教育の結果として、兵士が一心同體の活動をなし得たること。

第二 教育勅語を基としたる國民教育に依て、國民一般に一心同體の動作をなし得たること。

この敵前に在て、君國の爲に身を致す戦争力と、一旦緩急あれば義勇公に奉ずる後援の力と、兩々相一致して、言を換へて云へば、兵力、民力が一致して、同一の目的に向つて働いた結果は、遂に軍國に於ける標準の軍隊、模範の國民として、世界の尊敬を享くるに至つたので、歐洲人の日本に對する思想も全く變化して、その取扱の點に

於ても、遽かに一等國として最強國の班に置かるゝ様になつたのである、斯の如く僅か四十年間の進歩を以て、一足飛びに最強國の一に加はることの出来た人種は、大いに研究すべき民族であるといふ考からして、日本研究といふことは、歐米人が各々自己の見地に因て、指を染めんとする所となつた。

さて戦捷の原因に就いても、宗教であるとか、教育であるとか、大和魂又は武士道、或は國民の自覺心であるとか、野蠻の勇氣に文明の利器を得たから、斯の如き偉大な結果を致したのであるとか、種々に説明を立てるけれど、勿論是等の如き各々その原因因であるには相違ないが、此總ての原因の裏面に横はつて、總ての思想、總ての組織を支配する所の本源は、實に家族主義である、所が此家族主義には弊害も無論多いが、我日本人はその長所と強點とを維持してゐるが爲に、總ての點に於て優勢を示すことが出来たのに、露西亞は個人主義の弱點と弊害とを受けた爲に、戦争で常に敗を取るに至つた、斯様に一利一害は免れにくいもので、家族主義に弊害があると同時に、個

人主義にも、亦弊害と利益とが併有されてゐるから、此二主義を間然なく調和して行く必要があると思ふ。

工藝技術の進歩の爲には世襲の家族主義は、不適當であると同時に、國民の精神的方面には、個人主義では纏りのつかない結果を來すのである。個人主義の極端には恐るべき虛無主義、罷工、示威等の惡結果があつて、家族主義には食ひ潰しや共倒れの惡結果がある、乃て將來の心得としては、工藝教育には個人主義を加味し、精神教育には家族主義を維持して、努めてその調和を計らねばならぬ、其處に至つて初めて日本民族の名譽を我國二千年の歴史の光と共に、萬代不易の地位に置くことが出来るであらうと思ふ。

板垣伯も勿論極端なる個人主義の主張者ではあるまいから、ツマリ家族主義の弊害を救ふ爲に、個人主義の長所を採用すると云ふに過ぎないお考だらうと信じてゐる、歸する處、自分の考る所では、個人主義は説法せずとも、自然にその傾向があるが、日にますます忘れんとしつゝある家族主義の美點を維持せんとする爲に、この義を提出した譯である。

家族主義は果して専制なるか

板垣伯は娘を賣つて酒の飲み代となし、家内を苦めて遊興に耽る如きの弊害を擧げて、日本の家族制度は専制主義である、この専制の遺物たる家族主義に何等の美點があるかと排斥せられた、かゝる弊害こそ社會改良の力を以て、識者が改良すれば宜いで、これあるが爲に家族主義を全然排斥するといふのは、チト盲斷に過ぎるであらうと考られる、日本の家族制度は、一人の家長、所謂家督ありて常に家人の利害を一身に引受け、家名相續と資産の増殖を計り、父祖の訓言を守り、その祭式を續けて怠らず、祖先と家族との名譽を傷げざる様、又家内の小議會に於てはその議長となつて之が經營をなし、家人の教育の爲には、自ら家族學校の長となつて、その面倒を見、常にその親和を計り、罪惡を出さざる爲には、自ら家内の警察の長となつて、之が監督を

なし、以てその家督の任務を全うするならば、理想的の家庭も之が爲に作られ、郷黨の平和もこれが爲に維持せられるのである、若し斯の如くに實行せられたならば、壓制を敢てするの餘地は嘗て存しないのであらうと思ふ。

要するに専制の封建時代に於ては、その家族主義も専制に失したのであらうけれども、立憲政下にある家族主義はこれに相應して、この理想的の家族主義を作ることとは、決して難事ではあるまい、家族主義の長所は

- 第一 家内に在つてその尊族を敬愛し、言語迄も敬語を用ゐる美風は自ら長上に對する態度を教ゆ。
- 第二 一族同住の結果は、各自一心同體の觀念を養ふ本源となる。
- 第三 家名を重んずる精神より、一家の親和と名譽とを保つ爲に、個人の不便を忍び、他を助け爲に自己犠牲の念を養ふ。
- 第四 外に對して自家の名譽を傷けず、祖先の名を汚さざるを期す。

第五 家督相續は祖訓を守り家憲を維持する上に於て最も必要なることを悟らしむ。

第六 我國家は血族團體であつて家族主義に基く國家である、家の型を國に移せば國家的生活となる、忠孝不二の至誠心を養ふ。

かかる觀念を家族生活の上に養ひ得て、さらに之を國家に施し、又之を社會の實際の上に移すならば、その精神的活動に於て、大いなる裨益のあることは疑を挿む餘地が無からうと思ふ、この主義を以て總ての有形無形の經緯をなすに於ては、國民の協心戮力を得、上下一致して、同一の目的に向つて遺憾なく發展を試むることが出来るのである。

其間に於て、個人主義の結果として、得て起り易い弊害、即個人の利便より打算することとは、一家族の名譽保全の關門に依て、單に利己的である所の欲望を防遏することが出来て、小にしては一家協力、大にしては都合よく舉國一致の結果を得ることが出来る、家族が社會を組成する要素であるから、家族に對して政府も人民も、同一の

目的を有するものとして遇するから、或一の家族に勳功者あり戦死者ありと假定すれば、その名譽の表彰も之を感ずること深く、恰も一家族の代表者を出して、國家に貢獻したと感ずるから、その死者に對する祭式勳章等が我國に於て最も注意を拂はるゝ所以である、一家族は其勳功者、其戦死者を模範として、更にその遺志を繼承する志を起し、死者に代つて功業を全うせんことを計るのが通常である。

之が個人主義の社會で見ると、その個人が已に死んだ後に勳章を贈るのは實に兒戯に類するもので、従つて斯様な習慣は歐洲には存してゐない、唯其遺族の扶持を要する者があれば、社會は之に對して相當の手當をなすに過ぎないのである。

祖先教と家族主義

板垣伯は我國の皇室を尊崇する美風は、一種の祖先教にして、家族主義に非ずと断定せられた、然るに我國一般の祖先教は、全く家族主義より發展したもので、他の人種の有する祖先教とは、全くその趣きを異にし、死者の靈を畏れて之を崇拜するものでな

く、自己の父祖を重んじて、之を敬愛するの孝心より發達したものである、今日まで膝下に孝養給仕せる父母が一朝死亡したりとするも、猶その遺愛を慕ふ衷情より、家内にその靈位を設け、之に仕ふること恰も生者に仕ふるが如くする所の風俗習慣から、漸く進んで、父祖代々の靈を祀る様になり、遂に祖先崇拜の形を成すに至つたのである、乃で上下大小の別こそあれ、皇室に於ける賢所の起原も、われくの父祖に對する敬禮も、同一の家族主義に起因したものである。

われくが戴いて最も自慢する所の、萬世一系の皇統も、詮ずる所、各種家族の姓名相續と同一の主義に基けるもので、この萬國無比の國體を生じ、空前の發展をしたのも、ツマリ家族主義の賜である、多くの家族を集めて、組合をなし村を形造り、終に國をなすに至るものであるから、國と家とは單に規模の大小に止まるのみで、われわれが名づけて國家といふのもこの邊からであらう、皇祖皇宗はこの群小の家族を統率し、之を統一し愛護し給ひし結果により一切の家族が仰いで以て御門と稱し、皇室と

して、無限の服従を表する所以である、われ々の祖先の家族は、則ち皇室の下臣として天恩を忝ふしたものであるからして、皇室と衆民との關係は、殆ど同一家族の如く、終に離る可らざる結果を生じた、今日君國の爲に身を致すも、代々相恩の徳に報ゆるに外ならぬ、斯様な恩恵を涵養するには、家族主義の國民で無くては得難いとである。

國民の自覺心

自覺心とは、自己の地位を知り、その地位を知りその地位に相應する本分を盡す心である、板垣伯は水戸藩は夙に天下の大勢を明にして、十分の自覺心を有したるを以て強い勢であつたが、中途で内輪喧嘩の爲に、自覺心を失つて遂に又衰運に傾いたと云はれた、此點は最も注意を要すべき處であつて、一般で云へば内輪喧嘩、一個人で云はゞ利己主義の爲に、得て自覺心を紛失するに至るものである、乃で單に個人主義の自覺心なるものに依頼するのは、社會的に生存する人間には最も危険である、故に第

一に之をその家族と社會との兩關門に於て、喰ひ止むる時は、その自己的利己主義を制して好く自覺心を維持せしむることが出来る。

今若し舉國一致の自覺心を維持せんと欲するならば、幾多の家族々々に於て、これを纏める時は、その一致を強くし、且つ之が頽廢を防ぐといふことに、大いなる便利を得る、之が即ち敵前に在つては戰鬥力となり、軍後にあつては後援となり活動となり、容易く目的を達することが出来るのである、南亞戰爭時代の英國も、日露戰爭の時に日本も一般國民は同く自覺心は有つた、内地に於ては幾千百の涙に沈む人があるけれども、而もその個人の悲を制して、國家の爲に名譽の戦死を遂げたのを喜ぶのは、獨り家族主義の日本に於て得る處であつて、英國の南亞戰爭中、各人が子弟を失ふたのを陰に陽に怨訴する者が至て多かつたのは即ち個人主義の弊が顯はれて、國民的自覺心が多少痲痺して居つたからである。

伯は同一地方に於て、同じ状態にあつた各藩中に、強弱の差が有つたのは何故で有る

かと云ふ説明を望まれたければ、同じ地方同じ状態といふ事は、決して強弱の源因ではない、いくら自覺心があつても、強弱の差は自らあつて、又時にその自覺心を喪失し若くは更に之を發揮する者のあるのは、自然の勢である、要するに國民の自覺心は、戦捷の源因たるは争ふ可らざる事實で、自分が、兵力、民力の一致、同心一體の活動と云ふたのは、伯の所謂國民の自覺心であつて、現れて軍隊の精神となり、決死の奮戦となり軍紀嚴肅となり、祕密の嚴守となり、敵情視察の精神となり、後方勤務の完成となり、内國に於て國民の後援となり、公債の應募となり、軍隊傷病兵の慰問となり、敵捕虜の愛護となり、赤十字の功業となり、俘虜情報の好成績となり、以て世界萬國の尊敬を買ひ得るに至つたのである、或は今日迄、日本を野蠻國と信じたる心よりして、驚きの餘り、日本を尊敬せる様に考る人もあらうが、それは甚しき誤謬で、英國の如きは現に多數の士官を我國の各師團に從屬せしめて、軍人教育の實際を學び、人を特派して赤十字事業を調査し、以て自國の赤十字事業の組織を改め、我參

謀部の組織を參酌し又我國民の教育制度を學習せんとし、且つその同盟を擴張して、攻守同盟の結果を得たるが如き事實に徴せば、一朝世辭的の贊稱でないことは火を賭るよりも明かであると云はねばならぬ。

第九章 我と理想

人は事實を抽象して理想を作り、その理想の光に導かれて生活して居るものである、その理想の高いと低いとに依つて、人格の高いと低いとが定まるのである、物質的生活に目を奪はれて精神的生活の何ものたるを知らないのは、理想の最も低いものである、我々の目的を定める上では理想は成るべく高くして置いて、我々の日常の生活や日常の行事は果して作つた理想に適應したものであるか、理想に對照して見たら恥ぢ入るやうなものではないかと云ふことを常に自省するのが必用である、若し理想がないなら克己心などは必用はない、思ふまゝに己れの慾を擴充して五感の小欲を満たし

現前の小意志を追隨して暮らせばそれで足るのである、自己が大慾があり大意志があり大理想があるから、目前の小自己を捨てて小自己に打勝て遂に大自己を作り上げんとするのである、人間は理想に對照して見ないと喜んで自己を制すると云ふことは出來ないものである。

人間の三性

我々の心の中では三種の性が常に争闘して居るのである、三性と云ふは我々が常に活動を欲する性と安逸を欲する性と、正義を欲する性と三種である、言ひ換へて見れば動性と暗性と善性とである、我々は何事か爲さんとして恒に活動して居る、而るに暗性が出て惛沈の情を起し安眠の欲を生ずる、併し動性が蕃殖しても暗性が旺盛になつても、甚しく罪惡的傾向を生ぜない内にはよいが、向下的罪惡に向んとすると、善惡判断の善性が顯はれて所謂良心の制裁が得られる、而るに暗性が盛んになつて善性を暗らまし、動性が盛んになつて善性を攪亂すると、善性が遂に鈍ぶる時がある、之

が最も恐るべき結果を生ずるのである、かうなると人間は黑暗蠢動の一土塊に過ぎないことになる、そこで人は暗性の發動のまだ弱い内に之を滅して安逸、墮落に陥らないやうにし、動性の發展がまだ惡傾向を生ぜない内に之を制御して盲動、輕舉に至らないやうにせねばならぬのである、どうしたならこの暗動二性を制御することが出来るかと云ふに、是れ亦自己向上の理想に對照し自ら恥ぢ自ら勵みて善性に立ち反りて良心の制裁を鋭敏にしなくてはならないのである、善性の多い人は君子であつて、暗性の多い人は愚夫である、動性の多い人は目的なくして動いて居る人である、この配合によつて人格が定まるのである、三性の調和を計るのは克己心の修養である。

克つべき己とは何ぞや

克己は人間の精神修養の骨髓であるが、己に克つと云ふその己といふものは果して何を意味するかといふことを今少し吟味して見たいと思ふのである。

先づ我々の個人を形造つて居る本源を指して己とするのであるとして見れば、之は、

「我」といふ者である、されど「我」と云ふ語は種々の意味に用ゐられて居る、第一自己を指して「自我」といひ、又宇宙の本體を指して「大我」と云ひ、又我々の「我執」といふ者を指して唯「我」といふ者との三種ある、哲學などで我を説く時には重もに自我か若しくは大我かである、宗教で説く我は重もに我執であつて、無我といふのは即ち此我執を除くといふことである、我執とは我意、我慢、我慾などを總稱していふのであつて、我の利己的表現を指すのである。

我執の方は重もに情に屬するもので、自我、大我の方は重もに情を離れた我々の本性で寧ろ智に屬する方の側である、印度ではこれを説くのになか／＼巧妙な譬喩を用ゐて居る、一體我々は何の光に依つて活動して居るかと問ふと、太陽の光に依つて活動して居る、太陽のない時は月の光に依つて活動する、月の光もない暗夜であれば、何の光に依つて活動するか、その時は火に依る、火もない時は何の光に依つて活動するか、響きに導かれて活動する、音響も光明もない眞暗黒であつたならば何に依つて

活動するか、その時こそ我の導きに依つて活動すると説くのである、この時は自我自照の時であつて、我々の本性が活動する時で我々の良心が働く時である、俗に云ふ「寢醒のわるい」時で如何なる暗愚のものも悪動のものも善性の呵責に逢ふて廣い天地に身を置く所なきやうに感ずる時である。

克己の眞主義

この場合の我といふは自己には相違なきも俗にいふ良心であつて、先づ我々の理性と

言つて宜いものである。我々は生得の智と、後得の智との二つを有してゐる、この生得の智の方は正しく云へば慧であつて、天に近い方で心の奥の院である。

後得の智は一般の知識であつて、外界から學んで得る知識である、又我々の情は善性の發動であつて、即ち生得の情である、これは天に近い方である、五感に依つて發動する處の情は實は情ではない慾である、これは外界から催されるもので、淺薄なもの

である、此根本の情と枝末の慾とは同じ系統であつて、常に相争ふて居るのである、根本の情は孟子の所謂性善であつて良心の方に屬し、善性が發動して同情となつたのであるが、枝末の慾はその情に使はれて居り乍ら常に謀反を企て、居るものである、心の戦争を休息なしにやつて居る、それと同じやうに生得の慧と後得の智とは同じ系統でありながら、然も時々相背反する傾向をもつて居るのである、根本の慧が正義を爲せと命じても、枝末の智は利己主義から割出して却て不正の事をする、今己に克つといふその「己」といふのはこの中でどれを指すのかといふと、この根本の情、根本の慧の己を指すのでなくて、その發動の如くに見えて、然もその根本性に背反して居る迷妄の智と、迷妄の情とに打克つといふのが克己の眞意義である。

一人の知己

人間は恒に二種の生存を有して居るものであるといふことを忘れてはならぬ、物質的生存と精神的生存との二つである、我々の物質的生存は食物に依つて保たれて居り、又

之に系統を引いて居る處の金錢その他重もに五感の慾望に依つて維持せられて居る、精神的生存の食物と云ふものは、何であるかと云ふと、我が本然に有して居る處の「知りたい」と云ふ心と「知られない」といふ心の満足である、この知りたいは即慧の働きであつて、知られたいと云ふ心は情の働きに屬するものである、人間が相互に「知りたい」「知られたい」と云ふ二つの心の交換が即所謂人間の交際である、「知りたい」といふ心が物に對するといふと、これが即、自然科學（動物、植物、化學、物理）となり、これが心の働きに對したものが精神科學（歴史、倫理、哲學、心理、）となつて居る。

「知られたい」といふのは他に對して同情を求めるのである、自己の眞價を人に知らしめんとする心であつて、同時にまた知らせたいといふ心である、この知りたいと知られたいと云ふ二つが常に満足して行けば人間の相互の間に平和が維持して行かれるのである、互に知て満足し知られて満足するこの満足が即、精神的生存の食物である、

人は多くの人に廣く知られるよりも、一人の人に精細に知られるのが肝要である、殊に實業に従事するものなどは一人の眞の同情者を得れば一生は安全に暮らせるものである、何となれば眞の同情者は一人あれば直に百人千人となるのである、人生一人の知己もないと云ふことは、實に寂寞たる生活となり一生は涙の歴史となるのである。

小意志と大意志

情といふのは、我々の感應性であつて、慧と云ふのは覺知性である、覺知と云ひ、感應と云ふのは、主觀客觀の相對の間に行はるゝのであつて、總てレシプロカル相互のものである。

金子三四郎君は、「相互」の間に神を認識し、眞理の存在を認めると云ふので、常に相互主義を主張して居り、自ら相互と云ふ新聞を發行して居る人であるが、これは理由のあることで我々は相對の間に絶對を認め得るのであつて、相對以外には我々の智も情も及ばないのである。

この相對の知りたいたい、知られたいと云ふ心の及ぶ範圍が即、生物界である、動植物界にも無論この心は及ぶけれども我々人間同志の間のみ殊に「知りたいたい」と「知られたい」といふその「たい」の意義を最も廣く擴張する事が出来るのである、この「たい」は即、我々の意志である、一事一業に熟せんとするは「知りたいたい」の結果であり、功成り名を顯はさんとするは「知られたい」の結果である、そこで我々の意志は慧の方面も情の方面も、總括してこれを希望とし、理想として常に實現せんと欲して居るのである、この意志の中に目的の小さい意志と、目的の大なる意志とがある、大意志は理想として恥かしくないが世には小意志を理想として安樂にしたい贅澤がしたいと云ふ物質的生存の小満足を目的とする卑劣漢が多い、この小意志を捨て、大意志の實現を計ると云ふのが即、克己の根本の思想でなくてはならぬ、我々の個人的生活の上で言つて見れば、五感の慾は小意志であつて、根本性の満足する意志は大意志である、國家的生活の上で言つて見れば、我々個人若くは一家族の意志は小意志であつて、君國の

意志は大意志である。

そこで人間生活の上では常にこの二通りの目的を有して居るものであると云ふとを忘れてはならぬ、常に小意志を捨て、大意志を捉へると云ふとが精神修養の中心である。

自己犠牲

耶蘇教でも自己犠牲と云ふとは最も高尚な道徳であるが、佛教でも自己犠牲は中樞の道徳である、國家教育に於ても自己犠牲と云ふとは最も樞要の教である、工藝實業教育に於ても自己犠牲は克己心の發現であつて最も必要である、併し根本の趣意は各々相違して居る、耶蘇教の献身的思想は神に對する献身である、佛教の献身的思想は生類に對する慈悲の献身である、日本の献身思想は君主に奉ぐる献身思想である、實業界に於ける自己犠牲はその業務に對する献身思想である、各々その趣は異なつて居るが、要するに個人と國家との差はあつても、小意志を捨て、大意志を存すると云ふとが中樞の目的である。

歐羅巴の意志を主とせる哲學はシヨツペンハウエルが印度の思想をもつてその哲學を組織したのが初めである、その以後は一般に意志が哲學研究の中心となつたのである。

その中意志を肯定すると、意志を否定するとの二潮流があつて、意志を否定する方の側は小意志を捨て、大意志の満足を得んとするのであるが、肯定の方に屬する人は我々個人の本能を本位として活動せんとする一派であつて、意志本位説、本能主義、自然主義などは皆この潮流から出て來るのである、併し我々が見て以て本能なりとして之に依つて活動せんと欲して居るものは、或は既に迷妄の雲に蔽はれた本能であつて、時に依ると濁りのついた煩惱であるかも知れぬ、遂に五感の小意志を満足せしめんと欲する所謂自然主義のやうな墮落傾向に向はしむるともある。

かう云ふ風に總ての感官的慾望、迷妄的信仰、總ての向下的傾向を避けると云ふことが、我々の個人生活に於ける克己心修養の本義である、つまり前に言つた我慾の己に

打克つて本然の己に復ると云ふのが克己復禮の本義であらうと思ふ。

精神の衛生

以上餘り空論のやうに聞えるが、これを具體的に言つて見れば、つまり普通の人が忍ぶことの出来ないものを自ら忍び、小意志を捨てると云ふ實驗をするのが第一である。例へば普通に人の説く酒とか煙草とか憤怒とか不平とか云ふ類のものに就て、自己を試験して見ることが最も必要である、小意志を捨てる事が出来なければ、同時に大意志を捉へることの出来ぬことは明白であるから、理想は實現せられない、つまり克己の試験に落第したものであることを自覺せねばならぬ。

自分は學生時代には大酒家と言はれて居たのであるが、これをやめやうと思つて幾度も試みたけれども、なか／＼及第することが出来ない、同窓の友人を遊説して自らその主張者となつて、反省會と云ふ名で禁酒會を起して相互自然の制裁に依つて遂に全く喜んで禁酒し得ることが出来た、此時には自ら雑誌を發刊してその趣旨を鼓吹し

て居た、その後身が即、今の新公論である、爾來全く酒を飲まなかつたこと十年間であつた、その功に依つて今では飲むことは間々あるが酒と云ふものは自分の生活に於て必要と感ずる瞬間は嘗つてないやうになつた、自ら煙草を禁じて見てどうしても喫煙しなくてはたまらぬと感ぜらるゝならば、禁煙の必用がある證據である、已に煙草中毒の方に近づいて居るのである、自分は煙草も喫むが唯人と對話して居る間のみで一服せねばならぬと云ふ感じは曾てないのである。

身體の上でも酒と煙草とは衛生の爲に打勝つ必用があるが、精神の衛生の爲に打勝たねばならぬものも澤山ある、その中で最も打勝つ必用のあるのは不平と忿恨と倦怠とである、倦怠の心は、暗性から出るのである、もし之が起つたら、自己の理想を考へて之を退治せねばならぬ、自ら激勵して動性を喚起しなくてはならぬ、もし忿恨が心の中に在る時には恨みは決して直接に晴らすべきものでないと云ふことを信じて他日間接に之を晴らす時があると云ふことを注意せねばならぬ、心に不平の在る時には常

に訴へても決して聞き目のあるものでないと思はねばならぬ、内務省で私學系統の高
等文官有格者が常に不平を持って居た時代がある、官學系統者は早く地方へ就職する、
私學系統者は何年でも本省に屬官として置かれると云ふ不平は至極尤である、或人
が内部の様を探つて見て呉れと云ふから、内々聞いて見ると罪は矢張り自身に在る、
内部では「彼等は日々不平を云つて居る、そして勉強はしない、あれでは地方へ出し
てもやりそこなうに相違ない、彼等の不平が止んだら地方へ出す積りである」と云ふ
ことで、一方では出さぬから不平で日々不平のみ云ひ、一方では不平があるから出さ
ぬと云ふ、この間に處する道は一意潛心義務に忠實なる外はないのである、そこで青
年は第一に不平を漏らすべきものではない、忿恨は晴らすべきものでないと云ふこと
を心得てもらいたい、不平と忿恨と倦怠とは理想を殺す三毒であると云ふことを忘れ
てはならぬ。

常識と信念

人は倫理的常識がなくてはならぬと同時に、宗教的信念がなくてはならぬ、常識と信
念とは舟と楫との如きものである、倫理的常識があつて、宗教的信念がないと理想が
低い方に向つて行く恐れがある、とかく人が物質的生活にのみ傾く恐れがある、宗教
的信念がなくては精神的生活は完全しないのであるから、實業界に活動する人は殊に
宗教的信念の光明に依つて生々するの必要がある、その宗教的信念は迷信を離れた純
白の信念でなくてはならぬ、殊に日本の實業界は實業道德の低度なるに依つてどれほ
ど障害を受けて居るか知れない、随分常識のありさうな實業家は多くても大切な時
に善性が働かない、人が多い、一般に純白なる宗教的信念に依つて善性の能力を有功
のものにせねばならぬ、既成功の實業家には自分に眞の信念がないから「宗教などは
實業には關係はない」と公言する馬鹿者も居る、併し今後の實業界は斯る盲目の先達
の導きに随つて居つてはならぬ、大空に飛躍せんとする鳥には兩翼が必要である、實業
界最後の活躍は常識信念の兩機能を備へた人の手に落ちるのである、之が即、理想の

實業家である。

第十章 美の宗教

政教社の一字千金の選題で、憐れにも美と云ふ文字の運命が予の手中に陥つた、美に關する問題を取扱ふには予は恐らく最後の人たるべきものである、美術に於ても予は滔々たる天下の大哲學者とは全くその意見を異にして居る、古今の美術論中でも最も一般の潮流に反して居るレオ・トロストロイが稍々予の意を得て居ると思ふ、彼も亦美術の真相を看取するに於てその根柢に誤解あるを免れない、予は他の社會的論評に於てはトロストロイと正反對の意見を有して居る、然るに美術の點に於て稍々相近觸するを得たのは先づ藝術の爲めの藝術と云ふやうな品の好い愚論を根本的に破壊して藝術の目的を評論の根據とした點にあるのである、而してその目的はと云へば藝術が知識を人に傳ふると同じやうに、藝術は感情を人に傳ふるものである、これが藝術の目

的である、この目的を全うしたのが眞正の藝術である、その傳ふる感情が時代の宗教意識と融合するに至つたのが完全の藝術であると云ふのである、處が藝術は果して感情を傳ふる使命を持つて居るものであらうか、この邊は見解の誤謬があると思はれるがとにかく宗教意識を土臺に置いて滔々たる賣春美術を翻弄して完膚なからしめたる點に於て著眼點が世の所謂美術論者とその趣を異にして居る。

かく説き來れば世の論者は予を以て一概に道德論者流と同一視するであらうが、予が立論の根據は全くそれと相違して居る、予は今組織的論述の法を避けて、極めて通俗的に予の思想の徑路を一通りの示して見ようと思ふ、大體に於て予は立論の根據を人格論に置かねば美と云ふ原理に就いても決して正鵠を得たる結論に到着するものではないと思ふ。

人格美の根柢

我々個人の性格で云へば、智情意の完全に働くのが完全人格である、しかしこの三つ

が同じ格で三方面に働くものと思ふのは全くの誤謬である、智が知るのと情が感ずるのとは自ら兩方面で而もその働きの性質が異なつて、一方は冷靜にして始めてその目的を達し、他方は熱烈にして始めてその面目を全ふするのである、意は此の兩方面より得たる材料を地盤として形成されたる心の状態である、智情は他より來るものを受くるに反して意は外に出だすものを選ぶのである、そこで我々の意志の發現は必智情の地盤の上に立つて居ることは申すまでもないのである、意は智情よりも一層外に近い、一轉すれば行爲と進化する心状である、そこで佛教では既に意志を指して意業となし、行爲の結果の有無に拘らず、その動機のみにて應報の果を引くものとするのである、既に人格構成の要素がこの三であるとすれば社會に存在する重要な原素は、哲學系のももの、宗教系のももの、藝術系のももの、その完全なものは人格の三方面を満足させるものでなくてはならぬ、しかしこれにも自ら専門の方面があつて、哲學は我々の智の社會に顯はした結果であると同じ様に、宗教は我々の情の社會に顯はし

た結果である、それと同じやうに藝術は我々の意の社會に顯はした現象であることは明瞭なことである、この三は同一資格のやうに見えても決してさうでない、宗教も哲學も説くことは出来るが目に見ることは出来ぬ、藝術は目に見るか、耳に聴くか、同時に耳目に訴へて受取るか、とにかく明白に感覺の領分のものである、宗教、哲學を説くのを聴くのも聴くのではあるが、音樂を聴くのととは全くその趣を異にする、完全の智と完全の情との地盤の上に意志が行はれるのでなければ統一人格でないと同じやうに、完全の哲學と完全の宗教との地盤の上に生じた藝術でなければ完全のものとは云へない、されど強ち既成の宗教が産み出した美術でなければいかぬと云ふのではなから、時代の宗教意識に反し、完全の哲學主義の根柢のないものは人格の統一がないと同じやうに半端の藝術、断片的の美術であると思ふ、この根柢のない、當世畫家の美術は空華に吠ゆる犬の如く、水月を捕ふる猿の如く理想を傳へ向上せしむるに非ずして、理想を破り之を墮落せしむるのである、社會も亦一の大人格である、小宇宙の我々個

人の人格も社會の大人格も同一有機體と見なければならぬ、此有機體の向上に害のある美術は美術として評論するに足らないものである、殊に藝術は我々の意志の畫いた理想を表して居るのである、藝術は人に感情を傳へると云ふのは間違ひで、藝術は人に理想を傳へるのである、人の畫いた理想を目で受取るのが繪畫彫刻である、人の畫いた理想を耳で受取るのが音楽歌咏である、耳と目とで人の理想を受取り得るものは文學戯曲である、さすれば結局我々の意志の畫いた理想が藝術であつて藝術は理想を傳へるを以て目的とするのである、その理想は藝術の爲めの藝術として孤立的に評判の高いやうなものではない、健全な哲學主義、健全な宗教意識を地盤としたものでなくては統一せる社會の要素と見ることは出來ないのである、つまり個性人格も社會人格も同じ形式に進化するものである。

超人格美の理想

水が流るれば方向がなくてはならぬ、社會が活動して居るならば方針が必要である、

その方針は哲學と宗教とが與へるのである、哲學は主義を定める上にその特質を發揮する、宗教は主義を廣める上に特功がある、しかし哲學と宗教と相反する時がある、そこで佛教のやうな哲學と宗教とを打つて一團としたやうな宗教が進歩した社會の指導者としては最も必要である、適當に指導せられ、適當に理想を畫いた社會の產物として自ら超越人格なるものを我々の理想の標的として畫きたいのである、この超人格は取りも直さずプラトン以來理想の根柢としてパオムガーテンに至つて理想の三位として標榜せられた眞善美の三を具有せる人格である、これも三位對等のものと見るのは一般の僻見で、三原理は個人格に於ける智情意と同じやうに社會人格に於ける哲學、宗教、藝術と同じやうに、眞善の二が地盤となつて始めて美の原理が生ずるのである、眞も見るべからず、善も見らるべからず、然るに美は目に見るのに標準が置かれてある、一口に云へば、眞善の顯はれが美である、言を換へて云へば哲學の教ふるものは眞である、宗教の教ふるものは善である、而して藝術の顯はすものは美である、

これが宇宙間の理想の原理で所謂超人格なるものは之を體得したものでなければならぬ、しかし前に言つたやうに眞も見ることは出来ない、善も見ることは出来ない、美は目か耳かに觸るゝのが本義であるが或る形式に顯はれねば見るも聞くも出来ない、そこで超人格構成の要素はこの眞、善、美の三であるが之が人格の上に顯はれたら如何なる形式に示さるゝか、この點が十分に吟味されねばならぬと思ふ、これは所謂三つのエルで光明(Light)と慈愛(Love)とをうして生命(Life)とである、これが法華經に教ふる三大義である、而して亦大無量壽經に説く三要旨である、眞の發現、智の發現は光明である、善の發現、情の發現は慈愛である、光明と慈愛とを地盤としてその上に顯はれた生命が完全の生命であつて、之れ即、美の發現、意の發現の形式である、これが即、無限の生命である、これ即、超人格が一層進化して絶對人格の果位に到達したのである、プラトンの所謂眞善美の三位が至上至眞の一體に收まつたのである、之が即、悲智圓滿の佛格である、佛格に於ても亦同一人格の形式で慈悲(情)と智

慧(智)との地盤の上に、表面には普度一切の誓願(意)となつて現はれる、裏面には無量壽の大生命となつて存在する、佛教はいつまでも人格教の立脚地を離れない點に妙所がある、超人格と佛格(絶對人格)との差異は別でない、超人格は我々の理想の頂點に達して不退の地位を獲得するに止まる、佛格は一切救済の活動を主とする、この方面から見たのが悲智圓滿の佛格である、之を理想として進んで止まることを知らざるが佛教である。

絶對人格美の憧憬

佛教が絶對無上佛を理想とする所以は大なる理由がある、理想と云ふものは結局畫かれたものであるから恒に變化するものである、理想は進化する點に妙味がある、恰も太陽の如きものである、庭前に高樹あれば太陽はその上に出る、小山があればその上に出る、富士山の西に行けば富士の頂上に出る、世界第一の高山ヒマラヤ山に行つてもやはりその上に出る、理想は此の如きものである、又此くの如くならねばなら

のである、而してかゝる理想は哲學の上から見ても宗教の上から見ても藝術の上から評しても完全な理想でなければならぬ、佛教の性質はかゝる理想の上に構成せられて居るのである、絶對人格の無上位を憧憬して之に同化し之を實現せんとするのが宗教の生命である、世には佛教が原始時代から變化したことを云々して、とかく原始状態に還元せんと欲する傾向もある、これは佛教進化の徑路を辨へざる愚者の思想である、時代思想に應じて進化したればこそ三千年の昔印度に適した宗教が三千年の後日本今日にも適するのである、理想はその時代の思想に依つて畫かるゝものであると云ふことは眞善美の三字が明瞭に説明して居る、文字の説明の前に申さねばならぬことは、最初ブラトンの時の三原理は眞善美と云ふよりも寧ろ義善美であつてこれが絶對の眞に合一すると云ふ思想らしく思はれる、文字の説明には之が最適するから今は義善美として進むこととする。

支那の黄河の流域で、この文字の出来た頃の五千年前を想像して見ると、一般に遊牧人種で主として羊を以てその財産とし、一切の標準を羊に置いたことはこの三字の構成を見ても明瞭に分る、義は羊の下に我の字でこの羊は我に屬すると云ふ、我がものを我がものとする正義の念である、善は羊の古きもので、昔は羊の下に古の字を二つ並べて書いたのである、羊の古きが善の意を表したのである、美は羊の大なるものその大にして肥えたるを美の標準としたのである、凡て牧羊時代の産物であるとは明瞭である、養ふと云ふ字は羊の下に食の字、羹と云ふ字は小羊の下に美の字である、丁度印度で守護(ゴバ)も領域(ゴチャラ)も戦争(ガビシユチ)も同僚(ゴシユチー)も皆牛で出来て居ると同じことである、而して牧羊時代の羊標準の義善美は果して希臘の義善美と同じ意であつたらうか、希臘の義善美は果して今日我々の考へる義善美であつたらうか、これはその時代その時代で多少の變化若くは進化があつて遂に一定の標準に達したのである、若し今日物質主義の世の中でこんな文字を作ることゝなつたら、果して如何なる文字を作るであらうか、察する所義も、善も、美も、悉く金

扁へんて作つくるであらうと思おもふ、美術びじゆつも金かねの高たかで畫まがか畫まがかぬかを決けつせられ、善業ぜんげふも運動うんどうがなければ表彰へうしやうせられず、金かねがあれば不正義ふせいぎの行なありしものも榮爵えいしやくを得える世よの中なかである、然しかるにその後塵こうじんを拜はいしながら真面目まじめに美びの理想りきやうを説とかんとするものは流れに畫まがかんとすると一般へんぱんである。

大正五年七月二十日印刷

大正五年七月二十三日發行

佛教國民の理想

定價金壹圓廿錢



著者	高楠順次郎
發行者	高島大圓
印刷者	佐久間衡治
印刷所	株式會社 秀英舍

東京市京橋區西紺屋町廿七番地

發行所

東京市小石川區原町六番地
電話東京一五六八六
番町二六〇八

丙午出版社

大正文庫

明治時代の榮光を記念し大正聖世の文藝に貢献せむがために現代第一流の宗教家學者文藝家を煩はして「大正文庫」を發行し今や全部十二冊こゝに完成す外形は電車汽車中の攜帶に便に内容は處世修養の伴侶に好し——(全部完成)

- 文學博士三宅雪嶺先生著(定價半錢郵稅八錢) **第一編 明治思想小史**
- 文學士沼波瑠音先生著(定價七十錢郵稅八錢) **第二編 此 一 筋**
- 新佛教徒同志會編(定價七十錢郵稅八錢) **第三編 來世の有無**
- 大内青巒先生著(定價六十錢郵稅八錢) **第四編 禪の極致**
- 黒岩周六先生著(定價六十錢郵稅八錢) **第五編 予が婦人觀**
- 釋清潭先生著(定價六十錢郵稅八錢) **第六編 狐禪狸詩**
- 高島米峰先生著(定價八十錢郵稅八錢) **第七編 噴 火 口**
- 杉村楚人冠先生著(定價六十錢郵稅八錢) **第八編 ひとみの旅**
- 加藤咄堂先生著(定價六十錢郵稅八錢) **第九編 書窓 車窓**
- シヨウ原著堺利彦先生譯(定價半錢郵稅八錢) **第十編 人と超人**
- 文學博士村上專精先生著(定價半錢郵稅八錢) **第十一編 六十年**
- 内田魯庵先生著(定價八十錢郵稅八錢) **第十二編 沈黙の饒舌**

井上哲次郎博士序 橋惠勝先生新著

定價金一圓廿錢 郵稅金八錢

著者は佛教の研究に於て一家の見を樹てたる篤學の士にしてその論斷往々にして先人未到の境に入る本書は多年研究の結果に基き西洋の心理學以外別に佛教心理學の可能を論定し彼此對照以て佛教心理の微を聞き細を穿つ今此の新研究の發表は蓋し學界の幸慶ならずとせず

東洋大學教授 境野黃洋先生新著

定價金一圓三十錢 郵稅金八錢

觀察の警拔と論斷の明快とを以て佛教史界の權威たる著者が極大なる史筆を驅つて印度支那日本の佛教が過去三千年間に於ける重要な問題十有數條を研究してこれに快刀亂麻を斷つ結論を與ふ殊に「正確なる事實に基いて自分の立場を定めると同時にどこまでも佛教宣傳の精神を離れざる所」著者の弱に誇りとする所にして又最も尊重すべき態度なりとす

東洋大學教授 加藤咄堂先生新著

定價金八拾錢 郵稅金八錢

吾等一個の戰士として社會に立つや其の生活は命懸にして其の處世は眞劍勝負なり一步を過れば喪身失命忽ち人生の劣敗者たらざるを得ず本書は兩刃相交はるの中に秘術を盡すの劍を説くと共に生死岸頭に自在を得るの禪を語る劍客の逸話禪僧の垂示此の劍禪一味のところ直にこれ處世の要訣生活の妙諦事異なりと雖も道は一一讀して趣味全巻に横溢し教訓編中に滿つるを覺るべし

西川光次郎先生新著

定價金壹圓 郵稅金八錢

著者は現代行はるゝところの最新の強健法及治療法に關し、久しく研究を重ねたりしが、今やその中につき、最も有効なりと信ずる、岡田式靜坐法、二木式深呼吸法、藤田式息心調和法、高野式抵抗養生法、川合式強健術、葛田式運動療法、井上伸子の筋骨矯正術、小森式塗擦療法、石塚式食養生法、川面式體育法、アドルフ・ジャストの土の利用法、ニッパの水の利用法、歐米諸大家の日光療法、各種心理療法等について、その方法と特効とを詳説せり。世の身體虛弱なる人、疾病に悩む人、一度、本書を讀みば、総合、萬病強ひ來らむも、敢然としてこれを學退するの力を獲得せむ。

「萬朝報」記者 大住嘯風先生著
現代思想講話
 定價金 一圓廿錢
 郵税金 八錢

現代人は須く現代の思想に通ぜざるべからず現代の思想に通ぜむには其の思想の由来せる傳説を究め通じてゼームス、マイケン、バルグソン等の如き現代思想を代表する大思想家の説くところを知るを要す著者今此等碩學の著作の全體に精緻の研究を加へ深遠なるその根本思想を抉へ來りて明快直截に講話し人をして一讀直に現代思想に通曉せしむると共に又親しく大思想家に接して自己を養ひ人生の意義を了得せしめんとす洵にこれ思想講話に一新生面を開きたるの名著

真村隱士 久津見藤村先生著
現代八面鋒
 定價金 八拾錢
 郵税金 八錢

物平を得ざれば則ち鳴る而も著者はたゞ自ら鳴るを以て足れりとせず之を發して八面に當り散し十方に飛散すその鋒先の向ふところ女傑あり倫理あり藝者あり教育あり浪花節あり哲學あり活動寫眞あり宗教あり眞にこれ多角多趣味の一大珍寶

真村隱士 久津見藤村先生著
眞人偽人
 定價金 壹圓
 郵税金 八錢

先生書を著はすこと數次而して發賣禁止の殺命を蒙ること亦數次即か痛癢を起して朝野の名士一百餘人を捕へ大にこれに嘆つてかゝる眞人はこゝに其面目を掲げ偽人はこゝにその面皮を剥かるその論筆鋒その評深刻洵に筆端風を生じて文に凝あるの概あり

堺 利彦先生著
樂天囚人
 定價金 六拾錢
 郵税金 六錢

此書は狂暴、不平、怨恨、嫉妬、殘忍、無恥、悖逆を以て世に目せらるる社會主義者が人の子として親として夫として友として將た人無れ一員として宇宙の一分子として如何なる態度を持するかを其獄中生活に於て率直に露骨に赤裸々に發揮せる者之一言にすれば社會主義者の安心を語れる者

夏文社長 堺 利彦先生著
賣文集
 定價金 壹圓
 郵税金 八錢

壽頭之飾 著者の友人先輩六十餘名家が著者の人物文章主義、事業に對する長短錯落奇抜痛快の評語 序 賣文社の記、著者自ら其の事業を語る 第一編 一、唯物的歴史觀 二、子に對する態度 三、宗教とは何ぞや 四、木下尚江君を評す 五、對する態度 六、子に對する態度 七、三、墓見物 四、寸馬豆人 五、逆徒の死生觀 六、死の趣味 七、三、喜劇 一、谷川の水 二、ハバナード、シヨウ原作 三、告白 三、如來村 二、クレンタビユ、大杉榮 三、報隊人耶蘇、高島清之

堺 利彦先生著
赤裸の人
 定價金 九拾錢
 郵税金 八錢

佛國の革命はルソーの「民約論」によりて點火せられ日本の教育界はルソーの「エミール」によりて啓蒙せらるる波瀾重疊神田鬼没の彼が生涯は彼自ら大膽にこれを告白して餘すところなし今これを譯して彼が眞面目を傳へむとするものは遠讀詔文の堺利彦先生なり一讀してルソー前に立てるの感を抱さしむ

カウツキー先生原著
 堺 利彦先生譯
社會主義倫理學
 定價金 壹圓
 郵税金 八錢

哲學界には迷妄にして頑冥なる唯心論が跋扈し文藝界には不徹底にして神秘的なる本論主義が流行し宗教界及び教育界には淺薄にして偽善なる因習道徳が唱導せらるる今日此の明晰透徹なる唯物的倫理觀を以て彼の聲を發し此の味を照すは隱者が深く痛快とする所なり著者カウツキーは歐洲社會黨中第一の學者を以て目せらるる人日本の學界と文壇とは遂に此聲を無視すること能はざるべし(譯者)

幸徳秋水が最後の文章
基督抹殺論
 定價金 七十錢
 郵税金 八錢

一代の論客として知られたる幸徳秋水も驟つて天地の容れざる大道無道を企て今や遂に斷頭臺上の露と消え去りぬ其鐵窓裡に吟呻せるの間特に此一巻を著す所論痛快絶行文意絶倫嗚呼幸徳秋水死に臨みて基督を抹殺したせむとす抑々何の思ふ所あつて然るか多く語るに忍びざるなり秋水自ら曰はく「是れ予が最後の文章にして生前の遺稿也」と敢て滿天下の僧頭を費ふ

文學士 渡邊又次郎先生著
最新論理學
 (品切)
 定價金一圓廿錢
 郵稅拾貳錢

本書は哲學の泰斗たる著者が學界の缺陷を補はん爲めに特に選定せる所に係り所論の明晰にして内容の整頓せる簡潔なる叙述の中に學士の卓見を洩したる所他に比を見ざる老練の大著なり又欄外に重要なる題目を掲げ巻末に英語と對照せる詳細の索引を附したるが如き讀者の便益之に過ぐるものなかるべし

加藤晴雲先生著
筆と舌
 定價金七十錢
 郵稅金八錢

天下の大雄辯家大文章家たる著者が筆舌生活二十年の經驗を基として演説と文章との秘訣を語り模範を示したる名著にして殊にその生活實踐談は正に現代の青年を奮起せしむるに足る大文字なり

村上博士序
 藤井瑠枝女士著
亂れ雲
 定價金八十錢
 郵稅金八錢

女史は跡見花隠先生門下の才媛にして學界の先覺文學士藤井宜正氏の未亡人なり夙に文才と快氣とを以て知らる「亂れ雲」一編集むる處二十餘章四百五十餘頁諷刺教訓皮肉或は鋭き觀察或は隠れたる温情あらゆる方面を輕妙洒脫なる筆を以て大膽に且つ痛快に描寫し實に一部の現代世相史を成す

「無我愛」首唱者
 伊藤聖信先生著
新氣運
 定價金八十錢
 郵稅金八錢

斷然傳習と教權の束縛より脱却して世の罵詈雑言輕侮恣意の中に立ち臨面なく忌憚なく無我の愛の根本眞理を吐露して以て混沌たる現代思想界に一道の新氣運を誘導せむと試みたるもの！

三宅馨嶺先生序
 高島米峯先生著
廣長舌
 定價金七十錢
 郵稅金八錢

加藤晴雲先生曰はく「米峯今胸中鬱物の氣を呵して『廣長舌』一篇を著す其の言ふ所は世事に疎なる學者輩の企て及ばざる所にして其の論ずる所は肉を刺し骨を透して當世人士の肺腑を刺る洵にこれ堂々當世の大文字」と

加藤弘之先生序
 高島米峯先生著
惡戰
 定價金八十錢
 郵稅金八錢

著者曰はく「これ俄が半生の惡戰史なり父なく母なく學なく職なく疎に加ふるに資金なく後援なき裸一貫の青年が如何にしてこの生活難の世に處し來りたるかを語るは又以て現代青年諸君が新運命の開拓に資する處なきを保せざるべし」と

島田三郎先生序
 高島米峯先生著
理想的商業
 定價金二十五錢
 郵稅金六錢

賣ると買ふとは對等なりお客威張つて商人尻こ垂れること甚だ道理なしそれ賣るに法あり買ふに道ありこの法を説きこの道を教へ以てお客様といふものゝ立場を明にし以て商人といふものゝ位置を高め而して買ふものにはうんと買へと勧め賣るものにはしこたま賣れと告ぐるものは即ちこの書なり

前外務大臣 伯爵 林董閣下序
 東北大學 學總長 澤柳政太郎先生序
 櫻井 千河岸 買一先生著
修養史譚
 定價金壹圓
 郵稅金八錢

林伯爵曰はく「此の書を讀くに古今東西の史乘より異世同職の事實二百對を擧げたる者にして教師これを用ゐば以て講話の資を得べく父母これを讀まば以て臨訓の料たらむ」と

新外務大臣 伯爵
林 實閣下 著
修養の模範
定價金七拾錢
郵税金八錢

家庭では父母が子供にする話の種に困り、學校では教師が生徒にする話の種に困り、而して青年は讀んで自修の資とするに足る程の書籍の少ないのを嘆いて居る譯者これを憂へ書を書き毎に精神修養の模範とするに足るやうな英談逸話を編譯摘録して遂にこの書を作成すに至つたのである。此書は世の宗教家教育家及び父兄青年諸君の前に此の書の發行を報告することとなつたのは實に無上の光榮である。

文學博士 村上專精先生著
俗修養論
定價金壹圓
郵税金八錢

古聖賢蹟の芳蹟を辿り前賢研究の結果を収め荷も規倣とするに足るべき名論金言は悉くこれを援引して依て以て極めて平易に修養の理論を説明し荷も模範とするに足るべき善行美談は悉くこれを蒐録して依つて以て極めて明快に修養の方法を叙述す恐らくはこれ斯界未だあらざる精到完備の修養書たらむなり。

文學博士 村上專精先生著
改訂自 **信錄**
定價金六拾錢
郵税金八錢

これ博士の新著にして又實に博士が信仰の告白なり言々己の實驗を語り句々心の奥底を披露すまづ筆を「人生の目的」に起して「目的の成否」を明にし「實在と我れ」「佛陀と我れ」の關係より「自力と他力」の異同に及びて之を結ぶ五章廿七節説いて至らざるなく述べて盡さざるなし進歩せる佛教學者の見解は此書によつて窺ふべく敬虔なる佛敎信者の態度は此書によつて知るを得べし。

文學博士 村上專精先生著
誠のしるべ
定價金四拾錢
郵税金八錢

誠は實に人生の基礎をなすものにして政治も實業も宗教も道徳も教育も凡て此の根柢の上に立たざるべからず今や村上先生古今東西の事例を引いてその終る所以を詳記せらる荷も誠を體得して眞の人たらんと欲するものは此書を讀め。

文學博士 村上專精先生著
女性訓
定價金四十錢
郵税金六錢

本書の内容は天賦中賡實業諸師の五訓を以て女子座右の箴言となすにあり多年女子教育に經驗を重ねたる村上博士はよく女子の缺點を摸索きて之を訓諭すその親切實に至れり遠せり凡て世の淑女たらむと欲する者は必ず其の座右を離すべからざる珍書なり。

スタンフォード大學總長
ジョルダン博士原著
マスタート、オプ、アーツ
中村 平先生譯
人物の修養
定價金五十錢
郵税金八錢

澤柳南文部次官特に長文の序を草す其の一節に曰く、「ジョルダン博士は當今世界有数の學者にして北米第一流の人物なり且外國人中最も深厚なる同情を我日本及日本人に寄せらるゝ紳士なり我國人がその所説その意見を知らむと欲するの情益に之を知ること依て利すること尠からざるは首を待たず：我日本人は本書に對し尊敬と同情とを表し以て博士に報ゆるところあらんことを希望す」と。

ウチリヤム、ハイド氏原著
鈴木券太郎先生譯補
處世 **自己測量**
定價金五十錢
郵税金八錢

これ米國に於ける最新の處世術なり最新の修養法なり而して又實に最新の記術法に成れる名著なり今移して以てこれを我が邦現代の社會に薦めむとするもの他なし吾人が惡徳邪僻の軀格人格完成の砥礪立身處生の嚮導社會道徳の軌範として眞に得難き大教訓たるを以てなり來れ青年等がこの生活難の世に處して新しき運命の扉を開くべき鍵はこゝにあり。

黒岩周六先生講演
人生問題
定價金七拾錢
郵税金八錢

人生とは何ぞや是れ千古の疑問なり哲人之を説き碩學之を論じて而して懷疑の雲益々密に苦悶の人愈々多からむとす然るに現代思想界の泰斗黒岩先生自ら人生問題に透徹して疑問の源泉を探り大に其深趣を得て茲に此書あり叙ぶる所神の有無に始まり人生の悲觀樂觀に終る眞に天領の妙音なり世の悶ある人疑ある人速に來つて此福音に接せよ庶幾くは平穩と満足と活力とを得て温く且つ光ある人生に觸着することを得ん。

退耕錄
東北大學總長 澤柳政太郎先生著
正價金壹圓
郵税金八錢

死後の生活
フエヒル先生原著
文學士 平四元吉先生譯
定價金五拾錢
郵税金八錢

強肺病全快談
杉村巖橋先生譯編
定價金九十錢
郵税金八錢

南半球五萬哩
文學博士 井上圓了先生著
定價金九十錢
郵税金八錢

著者の序文に曰はく「官遊十數年其間人よりも多く云ひ多く論じたるも尚ほ腹ふくる心地を忍んで言はざりし者多し」と知るべし本書は先生が實歴上百餘の問題に透徹して滿腔の所感を披瀝したるものなることを觀察あり大膽にして穩健なる斷案あり言はんはんと欲する所は言ひ盡せしめて毫も時勢に阿らず誠に憂國愷世の大文字なり經世家教育家宗教家及び現代の青年諸君は須く一讀せざるべからず

本書は現世の事實を基とし最高の詩的想像を參へ或は歸納的に或は類比的に未來生活を縱横に叙述したる時と科學との靈妙なる融合にして此書によれば千里眼幽靈等の不可思議なる現象も容易に解釋することを得故に本書は親愛者を失ひし人死生の疑惑に苦しめる者の無二の慰藉となり一般の讀者に津々たる興味を配ち又學者研究者に豊富なる暗示刺激を與ふるや疑ふ可からず

本書前編は歐米に於ける最新の肺病根治法にして親しく譯者が實驗してその効果を收めたるもの後編は日本現代の名士が肺病全快の實驗談にしてこれによつて從來不治の病と定められたる肺病も必ず全快すべきものなることを立證せられたり世の醫師に弄ばれ賣藥に欺かれたる人々は本書を讀いて天來の福音に接せよ

南半球を一周し赤道を四週し濠洲南阿南米の各洲は勿論北は北極海より南はマゼラン海峡まで行程實に五萬哩の大旅行を試みて其の間の山容水態國情民俗の珍奇怪異を記して遺囑なし紳書五十餘上更に花を添ふ

活佛教
文學博士 井上圓了先生著
定價金壹圓拾錢
郵税金八錢

國民と宗教
帝國大學教授 高橋順次郎先生著
文學博士 羽溪了諦先生著
(品切)
定價金七十錢
郵税金八錢

釋尊の研究
文學博士 松本文三郎先生著
文學士 羽溪了諦先生著
定價金壹圓
郵税金八錢

彌勒淨土論
京都帝國大學文科大學長 文學博士 松本文三郎先生著
定價金壹圓
郵税金八錢

明治の宗教界思想界を震盪せしめたりし「佛敎活論」は完成す僧侶の活躍寺院の興隆期して待つべし眞にこれ死佛敎をして活佛敎たらしむるの福音

本書は國民と宗教との關係を述べたる論文に非ずして著者が該博なる學識と深厚なる同情とを傾注して日本人が國民的生活の理想と宗教的生活の理想とを詳説せられたる新著也苟も日本の國民たる者日本の宗教家たる者は一讀せざるべからざる佳書たるのみならず行文は通俗平明なる論語體なれば又以て演説講話の好模範たるべし◎附録として研究上修養上極めて重要な論文數種を收む悉く學界の珍

本書を釋尊以前の婆羅門敎の理想に起して釋尊當時の印度諸學派の狀態より進んで釋尊の根本思想に説き及び以て釋尊の世界觀人生觀生死問題の解決及解脱の方法を明にし更に釋尊の涅槃に移りこゝに著者の全力を傾倒して詳に涅槃の意義を解し具に東西學者の議論を破る誠ニ敎界及學界に於ける尊重すべき一大新研究なりと稱すべし

宗教學上殊に佛敎史上理論實際の兩方面に涉り極めて重要なる地歩を占むるものは「淨土の思想」なり而して其半面は「阿彌陀淨土」の闡明にとりて光輝を放てるも其他の半面は「彌勒淨土」の埋没によりて全然暗黒に歸すこれ豈佛敎史上の一大缺點にして又實に佛敎界の一大恨事ならざるや松本文三郎博士多年の遺著を傾けその專攻する學科の立脚地より「彌勒淨土」の由來淵源を詳論し博士の舊著「極樂淨土論」と相持つて茲に佛敎の淨土思想研究は完璧を成せり何人か又此の新研究を味はずして茲に佛敎の淨土思想を談せんとするものぞ

阿彌陀佛
ゲール、ケラス先生著
 學習院教授鈴木大拙先生譯
 (品切) 定價金三十五錢
 郵税金六錢

阿彌陀佛とは何ぞや是れ佛教の根本問題也ケラス博士その影響を揮ひ殆ど小説的結構を以て通俗に之が解釋を試む宜なりその暇米讀書界に好評噴々たることや弊社茲に十年博士と居を同じうし最も博士と親善なる大拙先生を頼はして此和譯を得たり豈啻に佛の實無に惑ひ心の不安に悶ゆる人のみこれを讀むべしと言はむや

釋迦牟尼傳
東京帝國大學講師
 文學士 常盤大定先生著
 (品切) 定價金七十錢
 郵税金八錢

佛傳の大部を占むるものは神祕なる傳説なり世人或は直にこれを抹殺して顧みざるべしと雖是等の傳説が古來深く佛徒の頭腦を支配せるより見ればその裏に何等かの意義を有せざるはなかるべし此著は主として是等の傳説の起原を尋ね意義を究め南北兩傳大小兩系の相違を比較對照し以て此の千古の大聖釋迦牟尼の眞面目を傳へむとするに在り

孔子傳
文學博士 渡藤隆吉先生著
 定價金四十錢
 郵税金十二錢

その涉獵極めて廣汎にその材料極めて豊富にその觀察極めて鋭利にその論斷極めて通達なるは勿論殊に各編各章到處に博士獨特の奇想と先哲未嘗の結論とに接するを得るは洵に本書の特色として天下に誇稱するに足るところ

王陽明
高等師範學校講師
 夏理章三郎先生著
 定價金一圓五十錢
 郵税金十二錢

哲人王陽明もまた凡人吾等の如く事毎に理想と現實との衝突に逢うて悲觀し懊惱したりし也しかも能く自ら百校の問題を解決し盡くして遂に悟徹の妙境に入る豈傳ならずや本書はこの王陽明の人格を主題として其の實生活と學説とを併叙し依つて以て凡人が如何にして哲人たるを得しかの歷程を明にし吾等が修養の範としたる者なり

增補 聖德太子傳
東洋大學講師
 堀野武洋先生著
 定價金五十五錢
 郵税金八錢

佛教史家として夙に名ある堀野先生が其の熱原なる史觀と圓熟せる文才とを傾倒して日本文明の開拓者日本佛教の教主たる聖德太子の事蹟を叙述し併て當時社會の政教習俗の特色を發揮したる名著にして文章の明快險阻の道確實に他に其の匹を見ざる所

一休和尚傳
大内春樹先生序
 高島米藏先生著
 定價金九十錢
 郵税金八錢

元日に假體を振廻はして人の皮肉を抜き末期に薨を臨つて梵天に捧げたる一休後小極帝の皇子として九重雲深きところに榮華の夢を見やうともせず一簣一笠ただ平民的教化のために一生を送つた彼一休翁か狂かかはた一大偉人か彼が眞面目そは本書の上に躍動して居る

達磨と陽明
青洲宗大學教授
 忽滑谷快天先生著
 定價金壹圓拾錢
 郵税金八錢

本書は王禪二學を比較對照して禪學の精髓を發掘すると同時に王學の眼目を豁開して餘蘊なく進徳の工夫修養の方法爲學の用心精神練磨人格養成等一として備はらざるなし眞にこれ精神界の指南針にして亦實踐道徳の指導者たり

和譯維摩經評註
明楊起元評註
 加藤明堂先生和譯
 定價金七十錢
 郵税金八錢

本書は明の楊起元が評を加へ註を施して斯經の哲理と文學とを闡明したるものと更に加藤明堂先生が平明暢達な文を以て之を和譯し佛國を附して通讀會解に便ならしめしもの世の佛を學び禪を説せむと欲する者には勿論評習本として亦最も適當なり

加藤 鳴堂先生著
原人論講話
定價金六十錢
郵税金八錢

佛教典籍多しと雖も之れを儒道二教の教義と比較して佛の樹然一頭地を抜く所以を明にせるもの此の原人論に過ぎたるはなし著者今獨得なる通俗平易の筆を以て叮嚀懇切に此の原人論を講述し且つ近代思想を以て批評を加へ髓頭には添ふるに古人の解説を以てしたれば佛教の大意と人生問題の解決とは此の書によりて知ることを得べし

加藤 鳴堂先生著
通俗講話の理方法
定價金九十錢
郵税金八錢

通俗教育の必要日に過りてしかも通俗に講話し得べき人幾人かある本書は多年の研究と豊富なる経験とを有する加藤先生が如何にせば通俗に講話して聽者を感動せしめ得べきかの理論と方法を極めて親切に解説し多くの例話を擧げてその使用法を示されたるものなれば教化の秘訣雄辯の奥義講話の資料收めて一巻の中に在り荷も講壇に立たむと欲する人一たび本書を讀むか趣にして一箇理想的の通俗講話者たるを得む

東洋大學講師
釋 澤先生著
寒山詩新釋
定價金五十錢
郵税金八錢

是れ佛か是れ仙か是狂漢か得て解すべからざるものは寒山詩なり是れ韻語か是れ詩語か是れ佛語か得て解すべからざるものは寒山詩なり宜なり千古の疑團牢固として抜けざることや著者精深雄大の學と才とを以て一筆勾斷彼が面目ここに於てか露出す寒山詩禪を知らんと欲するものは須らく此書を以て指南車となすべし

東洋大學講師
釋 澤先生著
高僧名詩新釋
定價金五十錢
郵税金六錢

本書、漢は唐宋元明清五朝の高僧に涉り和は虎關以後經海叢堂に至る大凡七十餘人の名詩を新釋したるものなり其詩雄渾なるもの高古なるもの典雅なるもの勁健なるもの純麗なるもの清秀なるもの幽淡なるもの之れに悉く字解と讀法と評論とを付し平易を旨として深奥を極む和漢高僧詩篇を釋義して此の如きもの恐くは曠前なるべし

慶應義塾大學教授
忽滑谷快天先生評釋
和名士參禪集
定價金壹圓
郵税金八錢

本書は日本に於ては後醍醐天皇花園天皇龜山天皇の聖帝より北條時頼北條時宗武田信玄上杉謙信前田利家楠正成等古今の名臣支那に於ては唐の宣宗皇帝宋の太宗皇帝等の諸帝より黃山谷蘇東坡白樂天蘇軾陸遊等の碩學が參禪せる佳話を蒐め且和漢禪匠に關する逸話美談を合せて之に批評を加へ學道の正路を示し在家參禪の資糧に供する者にして讀者をして坐ながら古今の鴻儒碩學と禪を商量し名僧大德の僧縁に接するを得しむ

マクス、ミュラー博士原著
文學士 清水友次郎先生譯
宗教學綱要
定價金五十五錢
郵税金八錢

清水學士佛敎大學に教授として宗敎學を講ずるや近代稀有の宗敎學者マクス、ミュラー博士の原著を購本とし隨つて譯して教ふ今これを補訂潤飾して以て世に公にす蓋し邦文の宗敎學書としては唯一無二の良書なり

第三高等學校教授
文學士 野々村直太郎先生著
宗敎と倫理
定價金五十錢
郵税金八錢

正にこれ新宗敎論なり新道徳論なり爾してまた實に人生問題最後の解決書なり世の靈と肉との饑渴に悩める者知と信との衝突に苦しめるもの若しくは夫の舊宗敎と舊道徳とに厭けるものは速に來つてこゝに編上の安樂地を見出せ。附録には二宮尊徳翁の宗敎論を譯す

眞宗補敎 北條蓮蓬先生著
眞宗の敎義
定價金二圓
郵税金十二錢

眞宗は實に日本佛敎の精華にして又實に日本佛敎の最大勢力なり本書は佛敎學を以て聞えたる北條師が多年の遺著を傾けて宗祖親鸞上人を中心とし其師法給上人と其發願如上人との敎義を信仰上より研究したる結果を組織的に叙述したる者なり他力敎の秘奥を探り本願寺の盛なる所以を知らむとする者の必讀を冀ふ

帝國大學講師 荻原雲來先生新著
實習梵語學
 定價一圓七十錢
 郵税金八十錢

文學博士 高楠順次郎先生
 曹洞宗大學教授 立花俊道先生著
巴利語文典
 定價一圓八十錢
 郵税金八十錢

高楠順次郎先生序
 阿彌得壽先生著
悉曇阿彌陀經
 定價一圓八十錢
 郵税金八十錢

平子鐸嶺先生遺著
補校法王帝說證註
 正價金一圓
 郵税金八十錢

佛敎を學はむとするものは言ふまでもなし印度の文學美術を研究せむとするものも亦梵字梵語を知ることなくしては常に霞を隔てて花を觀るの憾なくはあらずしかも邦人にして梵語を學ばむには歐語を知らざるべからざるの不便あり著者常これを慨き邦語を以てこれを解説せむことか努力するもの實に十數年而して今や漸く本書成る自今以後英字母二十六を讀み得る程の人は容易に梵字梵語に通達し得べし殊に悉曇十八章を擧げてこれに新體梵字を配し一々發音を附したる全く斯界空前の試みにしに大に天下に誇示するに足るの事業たり

著者南天楞伽島に入りスマンガラ僧正の會下において巴利語を修むること多年其平生手記する所と迦旃延以下原語の文典と歐洲人の手に成れる巴梵兩語の語典とを併せ參考し以て本書を成すに至れり叙述の前後には多大の注意を拂ひて簡より繁に入り易より難に進むの方法に従ひたれば初學者にして巴利語並に梵語を修めんとするものには良好の伴侶たるべし

悉曇阿彌陀經とは古來日本に傳はりたる梵文阿彌陀經即ち極樂莊嚴大乘經なり特に悉曇と冠語せしは新體梵字に簡はんが爲なり梵文に加ふるに漢字羅馬字音を附し脚注には馬博士の訂正本との異同をもあげ終りに訂正本、辭書、唐秦二譯を掲げたり學者此の書によらば悉曇學の一端を窺ふに易からん

「上宮聖德法王帝說」はその記事切實その文詞醇古多く寧樂已往の記録を取つて正史の闕を補ひ誠に史家必讀の書たること今こゝに贅するを須みず而して狩谷樞齋先生の「證註」に至つては群說を折衷し正誤を辨別して先人未發の見解甚だ少からざるは史家の夙に嘆服するところしかも尙多少の遺漏あるを免れざるなり然るに我が平子鐸嶺先生博覽強記にして史眼犀利樞齋先生の未だ見ざるを見未だ言はざるを言ひ誤れるを訂し足らざるを補うて錦上更に花を添ふ敢て之を史家と佛家とに薦むる所以なり

文學博士 村上專精先生編
科註原人論
 定價金十二錢 郵税金二錢
科註大乘起信論
 定價金十六錢 郵税金二錢

高島米峰先生著
 學生 參考 東洋史
 定價金十三錢 郵税金二錢

文學博士 三宅雪嶺先生著
訂偉人の跡
 定價金八錢 郵税金八錢

文學博士 三宅雪嶺先生著
小泡十種
 定價金四十五錢 郵税金八錢

この二書は共に筆記書入れ等に便せんがため本文の上下に空白を存し置きたれば學校の教科書學會の購本として最も適當なり

著者曰はく「形に於ては恐らく既刊東洋史中の最も小なるものたるべからむも學生を安くる點に於ては或は最も大なるものあるべきを信じて疑はざるなり」と

古今東西の偉人數十名を捕へ其の時代を語り其の性格を論じ其の功過を明にす觀察警拔にして行文微妙今の偉人の眼に映じたる古の偉人の眞面目は隠如として技に活動す人若し偉人とは如何なる者か偉人は如何にして修養したるか偉人は如何なる事業を爲せしか偉人は死後に何を遺せしか社會は如何に偉人の死を觀しかを知らむと欲せば實くは此の偉人の偉著に問へ

博士の學殖富饒に博士の見識卓越に博士の文章超凡なると世既に定評あり今此學と讀と文とを傾倒して此著を作す政治を論じ宗教を説き文學を語り人物を評す其の筆の向ふところ流れては活潑盡きざる大河となり歐じては繽紛限りなき飛沫となる小泡か激濤か蓋し近代稀有の快著也

文學博士 三宅雪嶺先生著

明治思想小史

定價金五十錢
郵税金六錢

文學士 沼波瑣音先生著

此一筋

定價金七十錢
郵税金八錢

新佛教徒同志會編

來世之有無

定價金七十錢
郵税金八錢

高島米峰先生著

現代青年論

定價金十五錢
郵税金二錢

日本の大思想家三宅雪嶺先生今や思想の最高境に立つて明治思想の變遷を語るまづ明治以前の思想界に筆を起して維新の思想に入り進んで最近四十五年間の政治經濟學術道德宗教教育社會等の各方面に亘り深刻の觀察を逞しうして劃切の結論に到る今や大正維新の風雲に際會せる日本國民は明治年間國運の大發展が果して如何なる思想の産物なりしかを知らずして依て以て第二の維新を大成せざるべからず果して然らば此書これにして大正國民必讀の書

現時俳壇の飛將軍、沼波先生の新著なり。先生曰はく、「この書に、大知識大感想ありて、天下の士、必ず一本を求めよとは言はず。たゞ書中、或物あつて存す。この或物は、或人には輕んぜられんも、或人にはソクソクと嬉しがらるゝなり。其の嬉しがりそうなる方にか、これを借む。」と本屋曰はく、「輕んずるも可、嬉しがるも不可なし。たゞ買ふ人の多からむことを、切望に堪へず。」と

吾等の死後はどうなるか地獄があるか極樂があるか抑々又吾等の靈魂は滅するの滅しないのか元來吾等に靈魂などいふものがあるのか無いのか凡そ此くの如きの難問題に關し現代各方面の名士二百數十人の解答を得てこれを滿載したのが本書である古來の大疑問も本書一たび出づるに及んで忽ち雲散霧消するであらう

本書は著者が某會社の青年に向つて講演せるもの、筆記にして各種青年會などの施本として最も適當なり内容目次左の如し

一、青年の力—二、今の青年は依頼心が強い—三、今の青年には氣概がない—四、今の青年は成功を急ぐ—五、今の青年は一事に精しくなくて多岐に勞する—六、今の青年は思想が羸弱である—七、今の青年は信仰が乏しい—八、今の青年は同情が乏しい

大内青穂先生著
結城素明畫伯畫

禪の極致

定價金六十錢
郵税金八錢

黒岩周六先生著

予が婦人觀

定價金六十錢
郵税金八錢

釋 清潭先生著

狐禪狸詩

定價金六十錢
郵税金八錢

南天棒禪話

中原鄧州老師著
大石正巳居士序 飯田鐵齋居士跋
定價金一圓廿錢
郵税金八錢

不立文字の教理も、文字に依らざれば知ること能はず。以心傳心の妙諦も、言語を離れては傳ふること能はず。但惜しむ。古來禪を説くもの、大に難解の語句を弄して、人を迷はせしむることを、徒に先生學深く徳高く、教誨二面に於て、眞に現代の達人たり。殊に先生、平談俗話を以て、陶玄の理を説き、深遠の法を語ることに、殆ど天下獨歩、而して本書は即ち先生得意の作、禪の極意、正にこれに盡きたりと稱するも、敢て溢美にあらざるなり。附録—五位頌講話—また先生獨創の見識を以て、縦横に講解す、蓋近來の大字なり

進歩的にして却て稍保守的の檢束あり古きが如くして實は極めて新しき趣味を有する黒岩先生の婦人觀はトルストイ的の絕對貞操觀に配合するに經濟的獨立の實際問題を以てし種々様々の方面よりして斷案の片鱗を示しつゝ遂に人をして成程と承服せしむる老巧親切の文を爲す眞に現今婦人問題の燈明臺也世の年頃の娘その父母及び女子教育家の精讀を冀ふ

今世何ぞ夫れ狐禪狸詩の多きや著者大獅子吼猛烈として起ち狐禪の窺狸詩の窟一黙して之を壊る其の毫端に上りしもの實に此の一書なり今や裝成りて人間に横行す世の狐禪狸詩に太平なる者は讀むも詮なしたゞそれ狐禪狸詩に不平なる者のみこれを讀むべし作詩壇上別に一新生面を開き人をして詩禪一味の妙境界に遊ばしむ

機鋒辛辣得て近づくべからざるが如くにしてしかも慈教懇到兒女童孩も亦度せずむば止まざるもの實に是れ吾が南天棒禪州老師の面目なり今著はすところの禪話一卷巻中の所談悉くこれ釋尊拈華し迦葉微笑する底のもの縦横に説き無礙に辯じて眞に四方八面來旋風打の概あり人若し南天の痛棒亂下し來るの間に立ちて平然としてこれを喫了し得ば則ち人間の大事こゝに成るべし驚くばまづ啣かこれを試みよ

釋清潭先生主筆
月刊 漢詩
一年分五十錢

釋清潭先生を中心とする漢詩國漢社の機關雜誌にして毎號「作詩法講話」「三體詩講話」「附淵明集講話」及び社友の作品を掲載す
別に漢詩漢文の添削代作等の規定あり切手五錢送付せらるれば規則掲載の「漢詩」一部贈呈す

土屋風洲先生著
晚晴樓文鈔
定價金八十五錢
郵税金八錢

本書は一代の鴻儒文壇の巨匠たる土屋弘先生の文集にして表あり説あり辨あり序あり記あり碑あり傳あり書あり贊銘あり題跋あり凡そ漢文の諸體備はらずといふことなし苟も漢文を學ばむと欲するものこれを模範とせば又良師なきを憂ふるを須めざるなり殊に明治時代の碩學文豪辭を凝めて各篇に讚評を加ふ卒然巻を開けば天下の文屋一堂に會して道を談じ文を論ずるの偉觀を成す餘餘深處にこれを繕かば涼風自ら起つて神氣清爽を覺えむ

村上專精先生序
高島米峯先生著
噴火口
定價金八十錢
郵税金八錢

著者心内に鬱積する熱火今や轟然として爆發しこゝに噴となり砂となり灰となりて四方に飛散す之を餘熱と言ふべきか之を偉觀と稱すべきか著者自らこれを知らずたゞ著者はその著書「廣長舌」「惡戰」等に比し來つて本書の愚論無文更に一段の進境あるを確信するのみ

文學博士村上專精先生主筆
月刊 人道講話
一冊 七錢五厘
一年分八十二錢

「人道講話」は村上先生の人道講話を連載する者
「人道講話」は教育と宗教と道徳との三面を有す
「人道講話」は精神の涵養を以て教育の本領とす
「人道講話」は人道の實踐を以て宗教の要諦とす
「人道講話」は父母の孝養を以て道徳の大本とす

記者 松本博士、大内博士、新村博士、上田博士、小川博士
月刊 藝文
一冊 廿二錢
半年分 一圓廿錢
一年分 二圓卅錢

「藝文」は京都帝國大學教授及び其他學者の研究創作を發表する機關雜誌也
「藝文」は東西兩洋の學術文藝に對し最徹底深究の批判を下さむとする者也
「藝文」は關西思想界の中心として兼て關東の思想界を風靡せむとする者也

「東京朝日」記者
杉村楚人冠先生著
ひとみの旅
定價金六十錢
郵税金八錢

長い足、鋭い眼、明な頭、太いペン、而して此書成る。しかも山水の景を描かず、風月の樂を語らず、専ら現代を寫し、人間を論ず。會て、落陽の紙價を貴からしめたる「大英遊記」以來の名文にして、又會て、發賣禁止の嚴命を蒙りたる「七花八裂」以來の奇著なり。

加藤唯堂先生著
書窓車窓
定價金六十錢
郵税金八錢

天地の秘奥を探り、人心の機微を明にす、乃ちこゝに天籟あり、地籟あり、人籟あり。これによつて世界の知識を求むべく、これによつて古今の徳澤に浴すべし。内に在りては書窓の良師、外に出でては車窓の善友、一卷の書まを尊貴なるかな。

學習院教授 鈴木大拙先生著
帝國大學講師 鈴木大拙先生著
スエデンボルグ
定價金五十錢
郵税金八錢

神學界の革命家、天界地獄の通歴者、學界の偉人、神秘界の大王、古今獨歩の千里眼、精力無比の學者、明敏透徹の科學者、出俗脫塵の高士、之を一身を集めたるをスエデンボルグとなす。吾國今や宗教思想界の風雲漸くまさに急ならず、精神を養はんとするもの、時世を養ふるもの、必ず此人を知らざるべからず。これ此著成る所以。

文學博士村上專精先生著
六十年
 定價金九十錢
 郵税金八錢

これ村上博士が過去六十年間苦悶の活歴史を大膽に赤裸々に叙述せられたるものにして現代青年が以て鑑鏡とすべき絶好の立志傳たり殊にその間に於ける佛教の盛衰消長及び教界人物に對する忌憚なき評論は明治佛教の側面史として教家の一讀を要求するに足るの實益と趣味とを具有する大文字にして眞にこれ教界未だ有らざる自叙傳なり

文學博士松本文三郎先生著
佛典の研究
 定價金九十錢
 郵税金八錢

松本博士は佛典の本文批評に於て實に日本學界のオーソリチー也多年その蘊蓄を傾けて研究せられたる佛典已に幾十人加ふるに較近燦爛その他に於て發掘せられたる佛典の研究は正に先哲未到の新説なりとす佛典の眞偽を如何に辨別し經論の精神を如何に會得すべきかに心を勞する人まづ此書を一讀せざるべからず

久津見巖村先生著
ニイチエ
 定價金九十錢
 郵税金八錢

ニイチエの研究ニイチエの理會ニイチエの祖述に於て著者の如きは邦人中未だこれあらざる所今其爛熟の想と奇峭の文とを以てニイチエの性格ニイチエの事業ニイチエの思想ニイチエの人生觀世界觀ニイチエの哲學ニイチエの理想を描出し人をして親しくニイチエに接するの感あらしむ

文學博士松本文三郎先生著
宗教と哲學
 定價金七十錢
 郵税金八錢

本書全編十有四章まづ第一章「釋尊は何を説きしか」に起し「宗教と道徳」「研究と信仰」等次第を逐うて遂に健全なる宗教の基礎は哲學的論據に在ることを説明し延いて老莊程子の支那哲學に論及す惟ふに病弱なる現代の思想界は此書によりて元氣の回復を求め得む乎

東洋大學教授土屋鳳洲先生編
唐宋八家文鈔
 定價金四十五錢
 郵税金八錢

夫の唐宋八大家文が文章の模範と仰がるゝもの久し矣惜しいかな巻帙浩翰初學の徒却つて岐路に亡羊の嘆なき能はず今我が土屋先生これを遺憾となし八大家の名文中更にその精髓五十編を選びこれに細評を加へて以て文章の結構作法を知らしめこれに詳解を施して以て故事熟語の意義を明にす學校教科の用書として甚だ適當なるのみならず地方青年獨學の良師として實に得易からざる珍籍たり

帝國大學講師鈴木大拙先生著
禪の第一義
 定價金一圓
 郵税金八錢

禪は東洋に於ける精神界の特産なりしかも從來誤つて山林の徒のみによつて拈弄せられ活きたる人生と殆ど没交渉なるかの觀ありしは蓋し未だその第一義を闡明しその着手の處を説述することの徹底せざりしに基するものならずむばあらず著者參禪辨道三十年その實験の歷程を精叙しその所得の公案を解説し一は以て初學者の指針となし一は以て人生の苦悶を除くせむとす不立文字教外別傳の禪も本書出でゝその近代的色彩の顯る鮮なるものあるを看取し得む

内田魯庵先生著
沈黙の饒舌
 定價金八十錢
 郵税金八錢

維摩の一默その聲雷の如しといふ今や日本文壇の老維摩内田魯庵先生が沈黙の懷中に一大獅子吼を試み婦人を濟ひ文士を度し靈肉の調和を説き生活の難易を教ふその言の懇切なるその論を穩健なる誠に人間處世の好南針たりこれを目して饒舌となしこれを評し咄哉と言はむは蓋し未だ方丈の妙諦に參する能はざるもの

スエデンボルグ著
新エルサレム
 定價金六十錢
 郵税金八錢

此書は思想界の奇傑スエデンボルグの新基督教説にして救済には信と行とを要すること愛即ち意志は人格の基礎なること自由あるが故に善惡あること善惡あるが故に神の榮光彰はるゝこと等の諸説を簡明適切に述べたる快著

人と超人

文藝博士 井上國了先生著
定價金九十錢
郵税金八錢

レウウ熱全盛の今彼の最大作の譯書出づ彼れ生命哲學彼の兩性體破の皮肉彼の風刺彼の滑稽彼の冷嘲彼の熱罵悉く此一篇の中に在り
譯書内容は本文の外、譯者の序、原著の序、原著通俗版の序、レウウの人物及著作、革命家必携及其座右銘、私が曾讀て見た人と超人(松尾松葉)等あり

おぼけの正體

文藝博士 井上國了先生著
定價金五十錢
郵税金八錢

本書は妖怪研究の大家たる井上博士が明治維新以後今日に至るまで日本の各地に起つた妖怪事實の中で特に珍な者奇な者恐ろしい者怪しい者謎しい者憐れな者面白い者馬鹿々々しい者百三十件を調査して一々その原因を示し百鬼夜行の眞相を明にした快書であつて怖がるくせに化物話を聴きたがる小供のためにも「幽霊の正體見たり枯尾花」など、悟つたつもりの大人のためにも趣味と實益とを與へること多大である

青巒禪話

東洋大學 大内青巒先生著
定價金壹圓廿錢
郵税金八錢

この人にしてこの著ありといへばそれだけでもう深山なりそれ以上廣告文でコケを成す必要いづこにかあるしかも試みに一二言を加ふれば平談以て微妙の法門を説破し俗語以て別傳の眞諦を闡明す題を説く六十有餘悉くこれ天地の秘奥を探り人心の機微に觸る迷悟凡庸の如きたゞ讀者の導ぶところに委するのみ

印度哲學宗教史

文學博士 高橋順次郎先生共著
文學博士 木村泰賢先生共著
定價金貳圓
郵税金八錢

本書は著者が印度の哲學宗教の大成は日本學界の本務なりといふ確信の上に立ちて久しく東京帝國大學に於て購進せる稿本を増補整理したるものにして斯界唯一最高の權威なり收むるところ吠陀、梵、佛、真經、經書及び諸學派の開展に涉り尚これ印度の根本思想を説述して臨まざるなきもの荷も世界無比の寶庫と稱せらるゝ印度古代の文明について闡明するところあらむと欲するものは須くまづこの秘鑑を讀らざるべからざる也

修道禪話

新井石禪老師著
定價金一圓
郵税金八錢

新井石禪老師は學に於て德に於て舌に於て筆に於て現代禪門第一流の人なり今や世俗の往往にして野狐禪に満足し邪禪に墮在するもの尠からざるを見て慈心到底截止するに堪へず故に活禪談を試みて修道處世の南針を指示す釋尊一字不説の妙諦達磨西來の眞意こゝに於てか始りて了了明

神智と神愛

學習院教授 鈴木大拙先生譯
帝國大學講師
定價金一圓半錢
郵税金十二錢

本書は天界地獄の迴歴者として學者宗教家を驚倒せしめたる思想界の奇傑スエデンボルグ氏の人生觀を率直に披瀝したる者也愛は宇宙の本源にして智は愛より生ずる所以より説き起し造化の大功人生の目的を闡明す所論警拔斷案透徹譯註明快

店頭禪

高島米峯先生著
定價金八十錢
郵税金八錢

禪坊主の禪にもあらず野狐禪の禪にもあらず語默動靜皆是禪の禪也
學林の禪にもあらず僧堂の禪にもあらず鷄聲堂の飯場格子裡に獨り自ら實參實究したるところの禪也
傳統の禪にあらずして店頭の禪也空想の禪にあらずして創造の禪也即是れ生活の實験也信仰の告白也

禪の面目

建仁寺派管長 竹田默雷老師著
定價金一圓
郵税金八錢

語も亦曾の如く默も亦曾の如し本來の面目眞に此の如きのみ今絶版せる「默雷禪話」二卷數百則中より奇峭の論と懇到の説とを選びて百五十則を獲たりこれを世に行ふ所以のもの主とし生死街頭に迷惑するものをして自性徹見の境地に到達せしめむと欲してなり

「修養世界」主筆 菅原洞禪師著
禪林奇行

定價金 壹圓
郵税金 八錢

和漢古今の居士禪僧が奇行佳話を蒐むるもの實に百數十項一として古聖證悟の過程前賢參究の所得たらざるなし綿密なる佛祖の行履潑刺たる禪林の消息正にこゝに盡きたりと稱すべき也

釋宗演老師著
拈華微笑

定價金 壹圓
郵税金 八錢

釋尊拈華し迦葉微笑す個中の消息何人か會し又何人か會せざる會する者を聖と稱へむも當らず會せざる者を凡と呼びむも亦當らず凡聖一如の境地は畢竟此書を必讀し體讀したる者にして始めて到達し得べしとなす耳

京都市平安中學講師
トーマス、カービー先生著
英文佛教讀本

定價金 五十錢
郵税金 六錢

著者は敬虔なる佛教信者として熱心なる佛教研究者として夙に世に推重せらるゝ英人にして本書收むる所釋尊の傳記印度諸王族の佛教傳播に盡し、狀況及歐米に於ける佛教學者の筆に成れる論文英語に翻譯せられたる佛典の拔萃並に將來佛教の歐米に傳播すべき趨勢に關する著者の意見等凡そ二十餘章蓋し佛教學校の英語教科書として唯一無二の良書たり

帝國大學講師 萩原雲來先生著
梵漢佛敎辭典

定價金 五圓
郵税金 十二錢

本書收むる所顯密二敎の法數名目を始め經律論三藏中の學語は勿論佛菩薩天龍八部天象地儀山川草木飲食器血數方時より動詞副詞に至るまで語數甚だ豊富にして單に佛敎辭典としてのみならず又梵漢辭典として未曾有の寶藏なりこれを以て佛敎を知らむと欲するもの梵語を學ばむと欲するものは言ふまでもなく一般語學者印度文藝の研究者に取ても亦唯一無二の寶典たり

曹洞大學長 秋野孝道老師著
禪の骨髓

定價金 壹圓
郵税金 八錢

以心傳心の禪直指人心の禪そこに何の膺肉ぞ何の骨髓ぞ今吾が秋野老師特に「禪の骨髓」と題して一卷を成す或は言はむ是れ好肉上の麩と易ぞ知らむ是れ指月の指なることを世の指に執着するものは則ち去れ迷雲一たび拂へば眞如の明月耿々として天地こゝに朗然これ此書を學人に薦むる所以

原僧暹老師著
禪の捷徑

定價金 壹圓
郵税金 八錢

教外別傳と説き不立文字と説き而して實參實究を強ふ禪も亦難いかな易ぞ知らむ語默動靜皆是禪喫茶喫飯も亦即ち是れ禪ならざることなきを果して然らば人誰れか禪に眠り禪に覺め禪に生き禪に死せざるものぞ僧暹老師八十年の禪生涯その行業直ちにこれ禪の眞諦今婆心默止し難くて敢てこの捷徑を示す寧ろ却て大道坦々として長安に通ずるものあらむ

荒井漢光先生著
道元禪師

定價金 壹圓
郵税金 八錢

曹洞宗の開祖道元禪師遠く宋土に渡りて慕道尋師し深く佛院所説の核心を探り詳に祖師而授の單的を領す而して歸來喝破すらく「空手懸錫」と空手懸錫の那一曲知らず何等の妙法を要旨故に存し禪の骨髓に盡く著者今禪師が一代の行狀事蹟を描寫するに流麗にして巧妙なる文辭を以てし禪師の風華面目をして卷中に躍動せしむ通俗にして文學的なる禪師傳は蓋し此書を以て嚆矢とせむ讀者これに依つて曹洞禪風の淵源を究むべく又これに依つて悟徹の洪範を得べし

原田祖岳先生著
參禪の階梯

定價金 壹圓
郵税金 八錢

原田老師洞濟二家の宗風を把持し銀山鐵壁容易に攀づべからざる底の禪に姑く階梯を設けて學人のために參禪の一路を示す夫の胡亂に大悟を語りて鬼窟裡の活計を作すが如き野狐精者流は乃ち問はず苟も荆棘林を透過して清風明月の趣を會得せむと欲する者は須らく秩序整然たる階梯を辿れ

大石正巳君序 飯田橋露君跋
南天棒禪話
定價金一圓廿錢
郵税金八錢

東洋大學教授 境野實洋先生著
活ける宗教
定價金壹圓廿錢
郵税金八錢

醫學博士 岡島狂花先生新著
現代の西洋繪畫
定價金一圓六十錢
郵税金十二錢

加藤咄堂先生推讚 笛岡清泉先生著
美人禪
定價金一圓
郵税金八錢

機鋒辛辣得て近づくべからざるが如くにしてしかも慈愍對兒女童
も亦度せずむば止まざるもの實に是れ吾が南天棒禪州老師の面目なり
今著はすところの禪話一卷巻中の所談悉くこれ釋尊拈華し迦葉微笑す
る底のもの縦横に説き無礙に辯じて眞に四方八面來旋風打の概あり
著者が限りなき渴仰と量りなき崇敬とを拂つて居る日本佛教の代表的
偉人中特に 聖德太子 蓮如上人 白隱禪師の人格と教義と信仰とを精
道元禪師の親鸞上人 蓮如上人 一列傳體日本佛教史であるし、世間
叙したもので正にこれ一部の「列傳體日本佛教史」であるし、世間
の有りふれた冷やかな抽象的な人間の血の通つて居ない學究的な
のてはなれて此等の偉人が親しく體驗したる内面的生活の上に活躍して
居る眞の宗教の語つたものであるこれによつて佛教の大意もわかるし
健全なる佛教の信仰も理會せられる
岡島博士多年研究の所得を組織して此の書を作成すその内容の概略
を掲記せむか。一、代表的名畫三十二卷を挿入したる事。二、從來ありふ
れたる氣分的断片的文集にあらずして科學的の著作なる事。三、現代西
洋十六ヶ國の繪畫を取扱ひたる事。四、筆を太古の繪畫史に起し、古き既
向よりの推移期に入り進みたる事。五、筆を太古の繪畫史に起し、古き既
象派、未來派、色彩派、立體派、立體派より印象派、新印象派、後期印
ムに至るまで悉く精叙して盡さるる事。六、一、千餘語の原語索引を
附したる事。七、現代の版畫を七節に分ち廣告畫にまで論及したる事。

帝國大學教授 高楠順次郎先生閱
帝國大學講師文學士 木村泰賢新著
印度六派哲學
定價金二圓卅錢
郵税金十二錢

スエデンボルグ著
帝國大學講師 鈴木大拙先生譯
神慮論
定價金二圓卅錢
郵税金十二錢

建仁寺管長 竹田默雷老師著
禪機
定價金一圓
郵税金八錢

高橋竹迷先生新著
（口繪、三禪師自讃畫像）
隱元・木庵・即非
定價金一圓
郵税金八錢

六派哲學（數論、瑜伽論、勝論、正理論、聲論、吠檀多）は印度哲學の代表
的思潮にして諸種の論義と學說と一として備はらずと言ふことなし
然るに我國未だ之に關して權威ある著述の發表せられたるを聞かざ
るは眞に學界の一大耻辱なりとす木村先生夙に之を講ずること多年漸
くその完成を告ぐるや更に東京帝國大學に於て之を講ずること二年漸
年其間又多少の補訂を加へて遂に汎く印度思想の雄大深遠なるに驚嘆す
る者多きガールによつて今更の如く印度思想の雄大深遠なるに驚嘆す
るべき名著を推薦することを得たるは當に學界の誇りならざる出
「神慮論」はスエデンボルグが支那神祕なる宗教を知るべき一大著述
なり「天界と地獄」は現世と離れて離れざる心界を描出し「神智と
神愛」は絕對無限性の神徳を説破し而して「神慮論」は實に此の神
徳が萬物の上に現はるる所以を詳述したるものにして天界地獄の遍
歴者神祕界の大主神學界の革命家たるス氏の所説を知らむと欲する
者は本書を讀め
不言言の妙諦言ひ得て盡さざるなく不説説の眞源説き得て盡らざる
なしその舌鋒鋭利互に人間の皮肉を刺し肺腑を刺る正にこれ眞禪機
の暴露
著者今流麗なる筆を呵して夙に黃蘗三筆の稱ある隱元・木庵・三禪師の哀
怨なる生涯顛脫なる言行書畫風流の三昧を描寫し以て明朝滅亡史を
背景として江戸時代佛教の活舞臺に躍り出でたる黃蘗禪の眞面目を
傳ふ蓋し禪界最初の著作たり